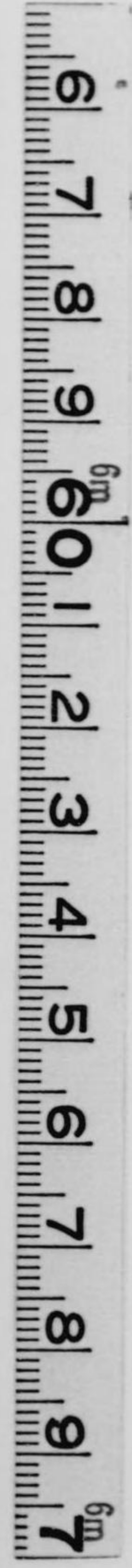
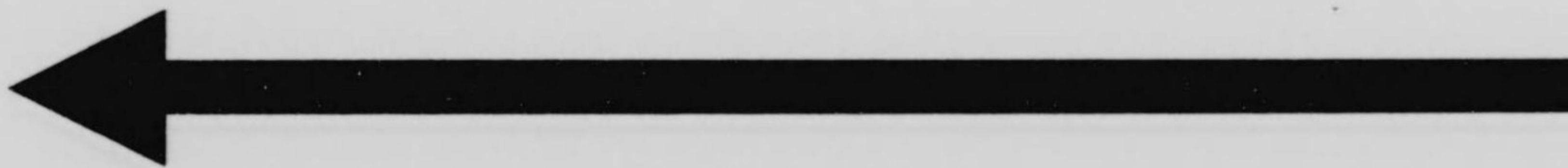


369  
11



始



369-11  
369-11

『佛教大觀』發行の辭

曾て、僕が、編輯發行した『佛教談義録』が、廢刊してから既に數年、然るに、今尙、購讀を希望する者頗る多く、或はその再刊を迫り、或はその合本別冊の發賣を求むるなど、一々これに答ふるの煩に堪へない程である。乃ち今、中に就き、左の各編を選びて、これに名を『佛教大觀』と命じ、逐次刊行して、大方學佛者の望を滿たさしめたいと思ふ。

第一編	佛教概論	東洋國敎大學教授	加藤咄堂先生著
第二編	印度の佛教	東洋國敎大學教授	萩原雲來先生著
第三編	支那の佛教	東洋國敎大學教授	境野黃洋先生著
第四編	日本の佛教	日本敎學宗敎大學教授	境野黃洋先生著
第五編	歐米の佛教	宗敎敎學大學教授	渡邊海旭先生著
第六編	禪學要義	宗敎敎學大學教授	加藤咄堂先生著
第七編	佛典の解説	帝敎國敎大學教授	常盤大定先生著
第八編	佛教研究法	東洋國敎大學教授	島地大等先生著

惟ふに、佛教がわからなくては、日本の歴史も解釋が出来ない、日本の文學も味ふことが出来ない、日本文明の由來するところも知ることが出来ない。然るに、その佛教といふものを知りたいといふ人々の、いつても當惑するのは、唯識三年俱舍八年など、言つて、兎角、面倒臭い研究に、長い月日がかゝつて、手つ取り早く、佛教の大系を飲み込ませて呉れる人のないことである。従つて、

# 佛典の解説

常盤大定著

大正  
7. 8. 10  
内交

一、佛教は、どういふ風に研究したらよいか。  
一、佛教は、大體、どういふことを説いて居るものか。  
一、佛教が、印度に興り、支那を経て、日本へ傳つた道筋は、どういふ風になつて居るか。  
一、日本に現存して居る、佛教の宗派の狀態や、その教義の概要を知るには、どうすればよいか。  
一、日本の國家と佛教との關係は、古來、どういふ風になつて來て居るか。  
一、西洋の學者が、盛に、佛教を研究して居るといふことだが、その狀況を、詳に知る方法はないか。  
一、佛教の經典は、その數甚だ多いが、その一々の經典の内容を、解説したものはないか。  
一、禪學といふものが、非常に流行して居るが、一體、それは、どういふことを教へるものか。  
一、などいふ質問が、絶えず繰り返されるのである。今この『佛敎大觀』は、確に、これ等の人々に、満足を得るものであることを確信する。

各編の著者は、悉く、現代有数の學者であつて、殊に、各々その専門とするところの科目を選択して、執筆せられたのであるから、世の徒に、大家の姓名だけを列ねて、その實、杜撰な代作もので間に合せて居るが如きものとは、大にその面目を異にして居るのであつて、これ、この『佛敎大觀』の、密に誇りとするところである。

大正六年九月廿五日

西午出版社にて

高島米峰識す

序

廣瀚なる大藏經の解説ともいふべきものは、古きものにては、宋の惟白禪師の大藏經綱目指要餘十三卷あり、明の智旭老師の閱藏知津十卷あるが、共に甚だ簡單で、且つ其の方法が異なるから、殆んど現代の要求を満す事が出来ぬ。この一篇は、大藏經中より日本文明に重要な關係を有する經典を取り出し、必要に應

じて特殊のものを交へ、成るべく手短に解説を施したものである。經典成立の時處や、他經との關係などは、實際の上からいはず、何の意味を爲さぬともいへ様が、然し大藏經典中の唯一だも、時處位の皆目分らないのは、研究上に取りて堪へられぬ遺憾である。この遺憾の一部を満さんとの希望から、出來得る限り私心を挟まずして、内容の上に何等かの手がか

りを得て、經典相互の關係を跡附けて見たいといふのが、筆を取つた出發點である。現に本多日生師の努力に成りつゝある大藏經要義といふのがあるが、これは一定の主義の上から見て行くのであるから、此の一篇とは全く異なる立場に立ちて居る。

經典は、その說相從容として、解行の共に淺く狭きもの、窺ひ難き深き廣き内容を有する

無盡の寶藏であるから、之に對する人の立脚地により、目的により、方法によりて、如何様にも解釋し得べく、如何様にもまとめ得べきものである。この意味からせば、この一篇も、畢竟予一己の見方である事と、また紙數の都合上往生系統の經典を全く擧げ得なかつた事とを、最後に附記する。

大正七年七月

常盤大定識

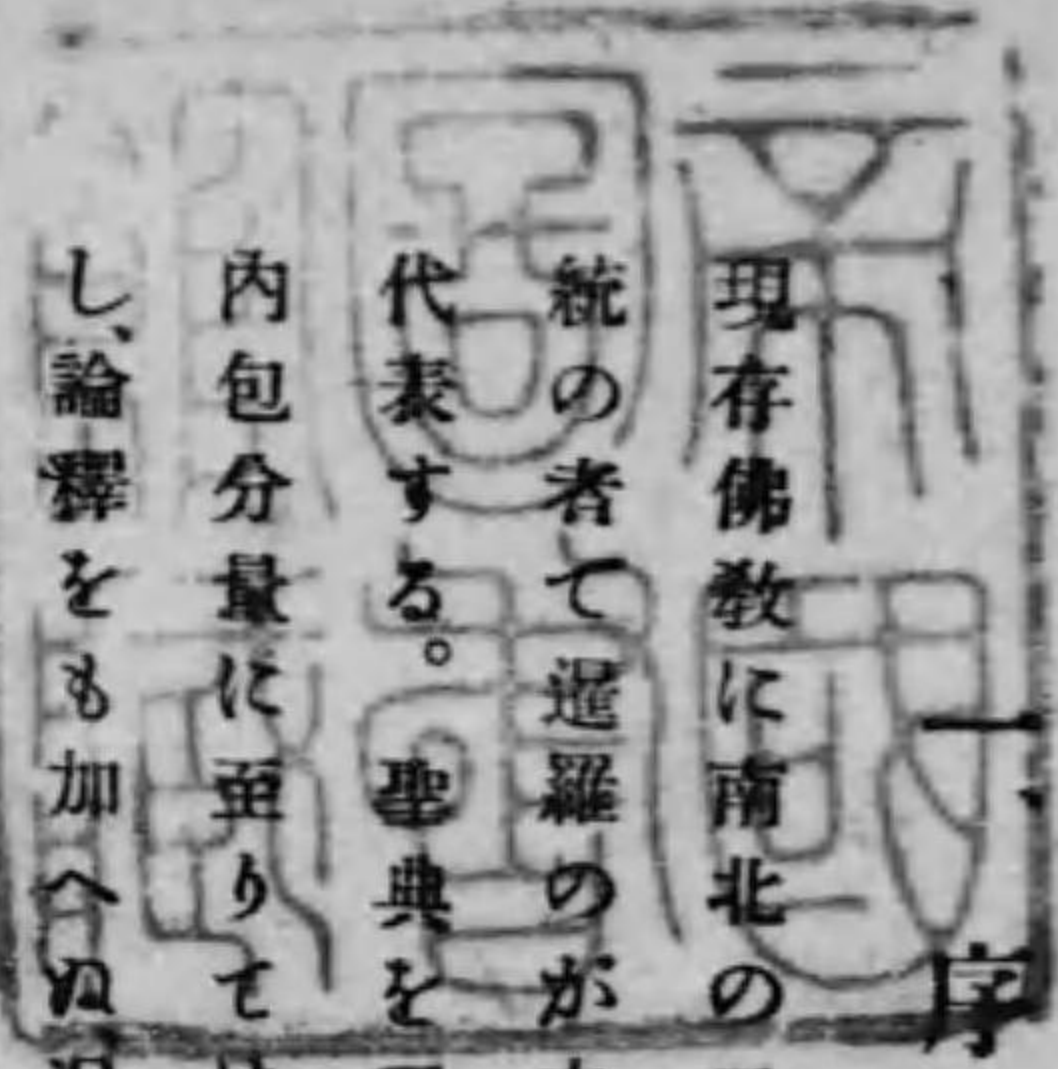
目次

一	序説	一
二	大般若波羅蜜多經	四
三	金剛般若經	九
四	首楞嚴三昧經	一五
五	大乘伽耶山頂經	二一
六	思益梵天所問經	二七
七	維摩經	三六
八	妙法蓮華經	五一
九	大華嚴經	七〇
十	十地經	九〇

十一	入法界品	一〇四
十二	梵網經	一二七
十三	菩薩瓔珞本業經	一三六
十四	大般涅槃經	一四六
十五	勝鬘經	一六三
十六	大方等如來藏經	一七四
十七	解深密經	一七八
十八	楞伽阿跋陀羅寶經	一九三
十九	大方廣圓覺修多羅了義經	二二三
二十	結論	二三五

# 佛典の解説

常盤 大定



## 序説

現存佛教に南北の二大系統があり、大小の二大組織がある。南方佛教とは錫蘭系統の者で暹羅のが之を代表する。北方佛教とは支那系統のもので、日本のが之を代表する。聖典と三藏と呼ぶ事は、南北に通じ、古今に亘りて變りはないが、聖典の内包分量に亘りては、南北大に差別がある。南方にては、一種の三藏を以て聖典とし、論釋をも加へぬ。況んや集傳の如きは、聖典以外に置く事勿論である。故に南方三藏の分量は、新舊約全書の二倍弱の語數を有するに過ぎぬ。然るに北方にては、大小二種の三藏を並せ有するのみならず、論釋集傳をも加へて、すべて聖典と爲し來つた故に、北方の聖典は非常に豊富な分量となり、三藏の語義に適合せぬ所から、五代以後大藏と呼ぶ様になつた。大藏の目は、五代の可洪「音義」に見えるのが、蓋し

最初であらう。可洪は、開元釋教錄によりて整頓繕寫せられた藏經を斯く呼んだのである。開元錄の大藏經に對する關係の密接なる事は、多言を要せぬ。大藏經には宋本、元本、明本、清本の各種があり、外に高麗本もあり、契丹本もあつた。日本にも種々のものがあるが、皆開元錄の大藏を以て本體とするので、畢竟附加追補の相違が諸本の相違を來すに過ぎぬ。日本の縮刷藏經はその分類法も、その順序も變へたけれど、他の諸本は悉く開元錄のそのまゝを繼紹し、これに少しの追加を交へたに過ぎぬ。

特殊佛典の解説に入る前に、一應大藏經といふ一大聖典の中に含まるゝ部數卷數と分類法とを表掲するを順序と思ふ。開元錄によるのを至當とするが、之を繼紹した、至元錄に至りて、一層便利に整頓せられて居るから、今は之に從ふ。至元錄は、後漢の永平十年より至元廿二年に至る一千二百十九年間に、百九十四人の傳譯せる三藏千四百四十部、五千五百八十八卷、五百卅一帙を本體とし、之に梵本集傳及び東土集傳を加へた總目錄で、一々西藏の大藏目錄に對照して居る。其後の明藏目錄もあるが、整頓の上に於て之に及ばぬ。

一、契經藏分	菩薩契經藏	顯教大乘經	五四九部二二二二卷	二八二帙
	密教大乘經	密教大乘經	三四六部 六五八卷 (或三五二部 六六五卷)	
	聲聞契經藏	聲聞契經藏	二九一部 七一〇卷	五七帙
二、調伏律藏分	菩薩調伏藏	菩薩調伏藏	二八部 五六卷	五帙
	聲聞調伏藏	聲聞調伏藏	六九部 五〇四卷 (或、五卷)	五三帙
三、對法論藏分	菩薩對法藏	菩薩對法藏	一一七部 六二八卷 (或六二卷)	六一帙
	聲聞對法藏	聲聞對法藏	三八部 七〇八卷	七三帙
別集	梵本翻譯集傳	梵本翻譯集傳	九三部 二二八卷	二〇帙
	東土聖賢集傳	東土聖賢集傳	一一九部 一三六八卷	一五二帙
	經律論集傳合計	經律論集傳合計	一六五二部 七二八四卷 七〇三帙	

斯く莫大な佛典の中で、初の大乗經を(一)般若(二)寶積(三)大集(四)華嚴(五)涅槃の五大部(六)五大部以外諸大乘經とするのが、開元錄以來の分類法である。至元錄は第六より更に秘密部を分けた。秘密部を別にしても、猶この第六分の中には三六一部八九七卷の多數を包括し、法華、維摩の如きを初として、彌勒、文殊、藥師の如き、幾多の有



名な經を有する。この中には種々の思想信仰を有するから、之を適當に分類する事は、至つて困難で、古來之を試みたものすらない。唯「開元錄」の後を繼紹して、五大部外とするに過ぎぬ。

天台大師の有名な五時教といふのは、もと說法年時の上からの分類であるから、この分類とは自然其目的を異にする。その華嚴、方等、般若、法華、涅槃の順序によりて、諸大乘經の間に一路の脈絡を附したのは、この五大部の分ち方よりも、理義を有する事と思ふが、方等といふ名目は、誠に重寶てそれだけ曖昧である。この中から諸佛、及秘密の二門だけでも開いたなら、幾分よいやうに思ふ。此講義には、先づ般若、方等、華嚴、法華、涅槃、諸佛、秘密の代表的大乘經典を擧げて後、小乘經に及び、更に律論に及ばうと思ふ。

## 二、大般若波羅蜜多經

*Mañjuśrīpāramitā-sūtra*

般若 Prajñā は六波羅蜜の一つで、智慧と譯せらる。戒を守り、定を修しての後に現はるゝ實相觀照の妙用であるから、この般若は六波羅蜜中のそれとなく、六波羅

蜜を代表するものである。「智度論」には之を般若波羅蜜、名三世諸佛母とまで稱讃して居る。佛陀は嘗て法を以て、一切佛菩薩の母と名けられたが、今はこの般若を以て一切の佛法を總括する名稱としたのである。斯くて般若は非常に尊崇せられて、大乘佛教の根本と仰がれたから、其流行は非常であつた。従つてその種類も夥しく、長年月に亘りて、種々の名の下に幾多となく傳譯せられた。大般若經六百卷の中に、その多くが統括せられたけれども、猶その外に有名なる「心經」(五譯ある)、「佛母寶德藏」(一百八名)、「五十頌」(帝釋)、「聖佛母小字」(以上六種は西藏大般若中に包含せらるゝとの事である)の如きがあり、「仁王」(二譯ある)、「了義」(開覺自性)、「大乘理趣」等十四部廿九卷がある。六百卷を正部とすれば、他は眷屬部で、眷屬部の多くは秘密部に混ぜられて居る。正部の六百卷は十一種以上の般若を合糅したものである。是等の諸種がもと獨立に成立したものである事は、「文殊般若」の寶積部に混入し、「理趣般若」の秘密部に混入せるにても知るべく、また「仁王般若」中に、「大聖世尊前已爲我等大乘」二十九年中、說摩訶般若波羅蜜、金剛般若波羅蜜、天王問般若波羅蜜、光讚般若波羅蜜、今日如來放大光明、斯作何事」とあるにても知らるゝ。

さて、大般若經は六百卷より成り、唐玄奘三藏が顯慶五年（龍朔三年）西曆六六〇—六六三の間に譯せる所、四處十六會とて、鷲峰、祇園、竹園、他化天の四個處に於ける説法である。

初分、鷲峰の説法、四百卷

第二分、同、七十八卷。（これに三種の異譯がある。（一）西晉竺法護、光讚經十卷。

（二）西晉無羅叉、放光般若經廿卷。（三）後秦羅什、小品般若經廿七卷）

第三分、同、五十九卷

第四分、同、十八卷。現存異譯に五種ある。（一）後漢支謙、道行般若經十卷（二）吳支謙、

大明度經六卷（三）秦曇摩婢、摩訶般若鈔經五卷（四）後秦羅什、小品般若經十卷（五）宋施護、佛母出生三法藏般若經）

第五分、同、十卷

第六分、同、八卷。（異譯一、陳月婆首那、勝天王般若經七卷）

第七分、祇園の説法、曼殊室利分二卷。（現存異譯二種。（一）梁曼陀羅仙、文殊所説般若

經二卷（二）梁僧伽婆羅、文殊般若經一卷。前者は寶積經第四十六會に編入）

第八分、同、那伽室利分一卷。（異譯、宋翔公、濡首菩薩無上清淨分衛經二卷）

第九分、同、能斷金剛分一卷。（これに五種の異譯がある。（一）姚秦羅什、金剛般若經一

卷（二）元魏菩提流支、同、一卷（三）陳真諦、同、一卷（四）隋笈多、金剛能斷般若經一卷（五）唐義淨、能斷金剛般若經一卷）

第十分、他化自在天宮の説法、般若理趣分一卷、五種の別譯がある。（一）唐菩提流志、實

相般若經一卷（二）唐金剛智、金剛頂瑜伽經一卷（三）唐不空、大樂金剛不空眞實三摩耶經一卷（四）宋法賢、徧照般若經一卷（五）宋法賢、不空三昧大教王經七卷。最後の

ものは頗る擴大せられて居る）

第十一分、祇園の説法、布施波羅蜜分五卷

第十二分、同、淨戒波羅蜜分五卷

第十三分、同、安忍波羅蜜分一卷

第十四分、同、精進波羅蜜分一卷

第十五分、鷲峰の説法、靜慮波羅蜜分二卷

第十六分、竹園の説法、般若波羅蜜分八卷

佛典の解説

大部の經典にて、般若部程、完全に梵本を保存せるものがない。十六分中、第一、第二、第四、第六、第七、第九、第十の五十卷に應ずる原本があり、最近于闐等の古佛敎國の城趾より、その古寫本を發掘すると甚だ多い。以て流布の程度を卜すべきである。于闐は放光般若を譯せし無羅叉の生國である。西曆二六〇年、朱子行が、道行般若の原本を得たのも、この地であつた。

是等の十六分は、性質上前五と後十一とに分る。前五は同一經典の廣略に過ぎぬ。その中に於て、小品及大品が最古のものであらう。中に現はるゝ主要の活動者は、舍利弗、目連、須菩提、富樓那、阿難の如き羅漢、及び彌勒菩薩、帝釋天等である。後十一は別種の經典で、獨り、金剛のみ其成立も古く、前五と同性質のものであるが、勝天王、文殊、那伽室利、理趣の四種は、多少他部の思想を交へて居る。中の活動者も文殊、那伽室利、金剛手の如き諸菩薩で、わけても金剛手を中心とする「理趣」の如きは、密教の分子を加ふる事が多い。斯く同一「大般若」中に於ても、二部に分るゝけれども、諸法皆空、無所得、中道の理を説くに至りては、悉く同一で、其中に大なる統一がある。四百卷といふ長篇でも、中心思想は、小品にあらはれたに過ぎぬ。「小品」のは、金剛經の「外ならぬ」。「金剛經」のは、畢竟、心經の「外ならぬ」。かくて、心經は六百卷の精髓である。但し、般若はいづれかといへば、文殊菩薩系統に屬すべきであるのに、心經は、觀自在菩薩を以て理想人格として居る。六百卷中に收められざりしより見れば、「小品」や「金剛」に後れたものであらうと思はるゝ。簡短にして、而も「般若」の主張の十分に見らるゝのは、蓋し「金剛經」を以て第一とする。

### 三、金剛般若經

Vajracchedikā

此經は、姚秦の羅什、元魏の菩提流支、陳の眞諦、隋の闍那崛多、唐の玄奘、同義淨の六人によりて傳譯せられた。此經ほど新舊譯時代の代表的大家の手に懸けられたものはない。經の結構は、佛陀、一時、祇園に在りし時、長老須菩提 Subhūti が、發心せるも(菩薩)の「住心及伏心法修養法」を問へるに對して、答へられた説法である。

われ無量の衆生を濟度せんが爲に、説法はすれど、然し菩提 Bodhi と名くべき定法はない、隨つて説くべき定法もないので、如來の説法は一としてこれぞと執する事は出来ぬ。故に法ともいへず、ざりとして非法ともいへぬ。さればこれぞ滅度と定まつたものゝある筈がない。若し我相 the idea of self、人相 the idea of a person、衆生相 the idea of being、壽者相 the idea of living being に執するならば、菩薩といふ事は出来ぬ。心に相を取らば、我か、人か、衆生か、壽者か、何等かに著せずには止まぬ。菩薩たるものは、何等の法にも住せずして修行し、住する所なくして心を生ずべきである。佛といふも外てはない、一切諸相を離れたものに外ならぬ。故に菩

提は無得所のものにして少法の得べきなき所に現はる。この域に達するものには、一切法皆佛法である。而もこの一切法といふのは、所謂一切法の事ではない、所謂一切法でないから、一切法と名くるのである。

斯の如く一切の情執打破に全力を注ぎ、最後に佛教の代表的世界観をあらはせるものとして、有名な偈を以て結んでいふ。

一切有爲法 如夢幻泡影 如露亦如電 應作如是觀

大内義隆が武運拙く、敗滅の際の辭世として傳へらるゝうつものも、うたるゝものも、もろとも、如露亦如電、應作如是觀」というたのは、此經より得た人世觀である。以上によりて、經の期する所は、諸法皆空の智見によりて、一切の執著を打破し、これより導かるゝ無相中道の行足によりて、第一義の妙諦を體得せしめんとするにある事がわかる。皆空の目が開けば、中道の行が自ら出来る例として、經中に佛の本生 *Jātaka* を掲げて居る。佛昔し、忍辱の行を修せる時、歌利王 *King of Kalinga* の爲に、身體を割裁せられたけれど、我相も人相もなかつた爲に、毫も瞋恨を生じなかつたといふのである。何が故に諸法皆空、随つて一切不可得であるかといふに、一切萬

法はその實心外のものでないからである。有形の事物 *Dharma* は差別的にして、彼此の間に區別あらしむるけれど、其真相に立ち入りて考ふれば、これ單に現象的のもので、其實は主觀上の相 *Samjñā* に過ぎぬ。外にありと思はるゝが、其實は心中の相に外ならぬ。相の上に彼此の名を與へたに過ぎぬ。單に名のみものは、空であるから、これまで外界にありと思へる如き物は無い事となる。斯く諸法の平等を知る所に、完全の智慧が起る。完全の智慧、一たび起れば、一切の迷執が取り去らるゝ。故に之を菩提の智慧といふ。菩提の智慧に導かれた修行が、行者を一切から解脱せしむる。之を滅度といふ。滅度といへばとて、別にこれと執すべきものがあるのではない。これが般若の世界觀と、この世界觀より現はるゝ實行で、實に一切の大乗佛教の根柢たるものである。

此經は、直接、間接に、漢、西藏、蒙古、滿州諸語に翻譯せられて居る。その原本を馬翁 *Max Müller* が、一八八一年を以て、*Anecdota Oxoniensia* 中に出版し、其英譯を同じく馬翁が、一八九四年、東方聖書第四十九卷中に公刊してある。渡邊海旭氏の記事によれば、漢譯よりせる *Beerl* *Beal* の英譯もあり、西藏譯よりせる *Schmidt* の獨

譯もあり、蒙古譯よりせる佛譯もあり、滿洲譯よりせる佛譯もあり。ハートレット Harlez は漢、藏、滿三譯の助けによりて、貴ぶべき梵文佛譯を、一八九二年の *Journal Asiatique* 中に掲載したとの事である。斯の如く古く東洋全般に流布尊崇せられ、近く泰西諸國に紹介せられた此經は、印度以來盛に研究せられた。既に印度に於て無著の論もあり、世親の論もあり、また世著の論頌もあり、世親の之に對する釋もあり、また功德施の此經に對する破取著不壞假名論といふもあり、いづれも漢譯せられて居る。義淨三藏が此經最後の頌を讚述して後、附言せる所によれば、無著世親の論釋は、瑜伽派の理にも合し、中觀派の義にも同ずるもので、兩派の弄ぶ所たりしが、他に中觀派の眞無俗有の説のみに従ひ、瑜伽派の眞有俗無の説に會はざる釋を造れるものあり。爲に兩意を含める般若をして、單に中觀派のものたらしむるに至つたとの事である。印度てさへも斯る有様であるから、支那に於ける注疏は一層盛大である。晉の僧肇、隋の智者、吉藏を初とし、唐の智儼、窺基、慧能、慧淨、宗密、宋の道川、子璣、可觀、善月、曇應、楊圭、明の智旭、宗泐、元賢、德清等甚だ多い。三論にても、天台にても、華嚴にても、法相にても弄んだが、之が祖述に力めて居るのは就中禪である。本邦の

宗派に於て、現に之を讀誦讚嘆するは、禪密二宗を主とする。

般若の主張には壯快な點はあるが、依憑とするには物足らぬ心持がせられ、其言ふ所理想的にして、實際には到底行ひ得べく思はれぬ様である。然し此主張がそのまゝ活きた主義として、實際上に著しく行はれつゝあつた。布施の一例についていへば、施者も、受者も、施物も、その體悉く空といふ所に心を住せしめねば、眞の布施にあらずとせられた。三輪體空とは、これである。般若の宣傳者たる提婆論師は、その破邪の論鋒あまりに猛烈な爲に、外道の毒刃に罹つたが、而もその外道に對して、我相、人相等を去りて、早く解脱に入るべきを訓戒して、身に苦痛あるを知らぬ如くにて、從容として入寂した。空主義が、斯の如く宗教上にも、道德上にも、實際活躍して居たのは驚くべきである。

元來般若佛敎は、煩惱菩提、生死涅槃を對立せしむるより起る迷執を破らんとて現はれたものである。この世界觀の現はれるには、その前提として、二元的の執著があつたに相違ない。元來宗教は生死煩惱を厭ひ、菩提涅槃を渴仰する所に起るのであるから、生死涅槃の對立は必要條件である。然しながら、徒に生死を厭ひ、煩惱

を恐れて、この生死の外に涅槃あり、この煩惱に離れて菩提ありと思ひ、兩者の間に天地隔絶の差別を認め、絶縁的のものとするのは、一方の弊に墮したものである。此弊に墮して、單に生死の人生を遁れん事にのみ汲々たるものを二乘小乘といふ。生死と涅槃は、天地隔絶のものではあるが、其實表裏を爲すに外ならぬ。表裏に過ぎぬ兩者をして、天地隔絶せしむるのは、我執の所爲である。この我執さへも取り去れば、煩惱はそのまゝ菩提となる。諸法皆空、一切不可得の實相を觀照さへすれば、我執は自ら除去せられて、その後の行業は、自ら中道の理に契ふものである。かゝる見地に立つものを菩薩大乘の行人といふ。而して大乘の第一着の任務は、二乘の短見迷執を打破するにあつた。二乘打破の文證は、般若の至る所に見ゆるが今唯その二節を掲げて見やう。

當來の世の善男子、善女人、深般若波羅蜜をすて、技業に攀り、聲聞、辟支佛の行すべき經を取らば、これ菩薩の魔事たるを知るべし。……當來の世に佛道を求むる善男子、善女人、深般若波羅蜜を得て、之を捨て去り、聲聞、辟支佛の行すべき所の經を取らば、これまた菩薩の魔事たるを知るべし。(小品般若經)

菩薩もし生死を觀じて、驚怖を起さば、すなはち非道に墮して、一切衆生を利益し、如來甚深の境界に通達する能はず。いかに非道なる。所謂聲聞、辟支佛地を貪樂し、諸の衆生に於て、大悲心なきなり。……聲聞、辟支佛は生死を怖畏し、速に出離を求め、功德智慧具足せず、この義を以ての故に、菩薩道にあらず(勝天王般若經)

同一佛教の中にありながら、二乘を以て非道邪路と爲せるは、頗る極端の語法であるが、以て二乘の迷執を開示啓發せんとしたのである。大小二乘の争は、この邊より起つたものである。般若は全體としていへば、菩薩大乘の旗幟を翻へして、二乘退治の壯舉を試み、以て一切大乘の根柢を造つたものであるが、其中に於て、聲聞の須菩提を對手として、菩薩法を説ける、金剛經の如きは、その初期に屬するものであらう。

#### 四、首楞嚴三昧經 *Sūraṅgama-samādhi*

首楞嚴 (Sūraṅgama) を羅什は、小品に健相、玄奘は健行、法護は經名に勇伏と譯すとい

一六  
ム三昧の名は、古くから人口に膾炙したもので、三昧を説く所には必ず出て居るといつてもよい。此經早くより翻譯せられて、合計九譯ある中、現存するものは、僅に羅什譯のみである。乃ち(一)後漢支謙(二)吳支謙(三)曹魏失譯(四)同(五)曹魏白延(六)西晉竺法護(七)西晉竺叔蘭(八)前涼支施崙の八譯は、悉く散逸して、最後の新譯のみ、残つて居るのである。法顯三藏が、萬死を遁れて、耆闍崛山に參詣した時、これ佛陀が、首楞嚴經を説きたまへる地なりとて、悲喜の情に堪へず、香華を求め來りて、終夜此經を讀誦して、佛恩を報じたとあるが、法顯の出發する時には、什譯がまだ出ぬ時であつたから、その讀誦したのは、現存のものではない。さて、經の中心は、堅意といふ菩薩であるが、この菩薩の外に數人の菩薩と天子とが、縦横に現はれて來る。この經、一方には律法主義に走れる弊を矯めんが爲、他方には空觀に應ずる實行法を示さんが爲に、三昧を高潮したものと思はるゝ。よりて以て寂滅主義、消極主義、隱遁主義の不足を救ひ、大乘菩薩の精神氣魄を鼓舞したものである。般若の後にあるは、勿論である。

八相成道を示現して、而も畢竟涅槃に入らざるには、如何なる三昧によるべきか

といふ堅意菩薩の問に對して、佛は首楞嚴こそそれなれと答ふ。坐中の天人、之を説かれんを請ひ、各々師子座を設けたれば、忽にして八万四千億那由他の寶座あり、一々の天子皆餘座を見ずして佛を我座上に請じた。佛普ねく是等の上に坐せしかば、天子皆喜んで發心したので、佛之を嘉して、衆生利益の爲に發心するは如來供養の第一なりといはれた。等行梵王が、八万四千億の佛中、何れを以て眞實とすべきかを問ふや、佛は、諸法皆空にして、悉く憶想分別より起るに過ぎず、諸法平等なれば、諸佛も平等なり、而して諸法平等の上に立ちて妙色身を示現するは、此三昧の力なりといひ、神力を攝めて、唯一佛となつて後、堅意に向ひ、此三昧は十地の菩薩のみの得る所、之に住すれば、舉足下足、念々常に六波羅蜜あり、此菩薩を見聞せん衆生は皆度脱を得べしとて、百句を以て、この三昧を釋かれた。堅意之を學ぶ法を問ふや、佛は學射の喩によりて、之を詳説した。時に持須彌頂釋堅意の問に應じて、一切法に於て、無所住のもの乃ち此三昧を得べく、此三昧中に遊ぶものは、諸法中に於てすべて無所得なりと答へ、三昧を現すれば、また現意天子も、佛命によりて三昧を現じ、此三昧を得るものは三千世界を芥子の中に入る

一八  
べきをいひ、堅意の問によりて、佛法と凡夫法と二あるにあらず、凡夫法を修して能く此三昧を得べしと答ふ。時に惡魔あり來りて說法を惱亂せんとするに、忽ち身に五縛を感じた。魔界行不汚菩薩乃ち解脱と繫縛の區別を説き、魔をして解縛の爲に發心せしめ、之を率て佛前に至れば、佛は淨心よりせずとも、發心の功德によりて、佛道を成就する時あるべしとて、記を授けて後四種の授記を説かんとて、未發心者に對する授記あるを説くや、大迦葉之をさして、自今一切衆生に於て佛想を生ずべく、若し之を輕慢せば自ら傷つけんと白せば、佛之を讚嘆して、堅意の問に應じて四種の授記を説かれた。魔に従ひ來れる魔女、現前授記を得て、魔に向ひ、魔界如は即ち佛界如なり、魔界と名くべき定法もなく、また佛界といふべき定法もなし。故に我等は魔の眷屬にあらず、而も眷屬に非るなしといへば、惡魔憂苦して天上に還らんとした。魔界行不汚菩薩魔に一割を加へて、此衆を離れずして汝が宮殿なりといへば、惡魔忽然として我宮殿にあるを知つた。大迦葉、此三昧を知らずして、而も自ら福田を以て任せる從來の非を慚愧するや、堅意の尋に應じて、文殊は十法行を福田と名くとて、逆理的菩薩行を擧げ、涅槃に

入りて、生死を捨壞せずといふに結歸した。時に二百の菩薩あり、甚深の菩薩の得がたきを慮り、退轉の意を發せしかば、文殊之を激勵せんとして方便說法するや、諸天之を聞き、感泣して、寧ろ五逆を作るも、この三昧をだに聞くを得ば、漏盡阿羅漢とは作らじ、漏盡は破器の如く、この三昧を受くるに堪へずと告白した。名意菩薩、此三昧を修する法を問うたので、佛乃ちこれを説きて後、これ甚だ困難なり、故に此の三昧に住するものは少く、他の三昧を行ずるものは多し。但し彌勒を初め一生補處の菩薩は皆之に住すと答へた時、彌勒乃ち此神力を現じて、佛意に添うた。大迦葉、文殊の久しく前に成佛せるを知り、その時期を問うたので、佛之を説明して、此三昧力あるものは畢竟不滅の境に遊ぶ旨を以て、成佛以來無量の時を経たと答へられた。

短かい經典ではあるが、結構甚だ複雑して、中に活動するものもまた甚だ複雑である。菩薩にては、堅意、文殊、彌勒、魔界行不汚の如きがあり、聲聞にては、舍利弗、大迦葉、須菩提、阿難の如きがあり、天子にては、等行梵王、持須彌山頂釋、瞿城天子、現意天子、淨月藏天子等があり。又惡魔、魔女までも現はれて、變現自在、機辯縱橫、以て能く第一



義諦の深旨、如幻三昧力の妙用を表はして居る。理想人格としては文殊を以て第一とし、彌勒之に次くが、結構の上に於て中心たるものは、堅意である。蓋し、法身無相、本有無作の境地を憧憬して、三昧によりて之に體達せんを希求せる時代にあらはれ、此時代精神を表現せしむるに、特殊の堅意を以てしたのであらう。經中、彌勒の淨土に言及し、阿闍佛國に言及し、文殊の淨土に言及し、無所得、皆空の世界觀の上に立ちて、諸法平等より上りては諸佛平等に進み、下りては生佛一如となり、遂に佛魔一如の大膽なる宣言を爲し、二乘を斥して而も之を包容するの量を示し、般若は勿論、維摩、法華諸經の説相と交渉するが如く思はるゝ邊あり、いづれにせよ、多くの趣味ある問題を含んで、短き割合には關係する所甚だ大なる經典である様に思ふ。中に、如來所説諸法、無量無邊、阿難所持、甚爲少耳とある事、當時既に大乘經典の豊富に存在せし事を知らしむる。唐譯の大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經が、甚だ有名なる所から、首楞嚴經といへば、必ず此方を指すのであるが、その前驅たるべき此經に注目する事も、必要な事と思ふ。法顯三藏が、殊に此經を靈山に讀誦したのを見て、名聲噴々たるものありしを證すべきであるが、唐譯楞嚴の出

づるや、その盛名に蔽はれて、其後は殆んど忘れられたものである。

## 五、大乘伽耶山頂經

Gayāśūtra

翻譯に四種あり、註釋に印度成立のものが一種ある。支那及本邦にては、一向流布しなかつたが、印度にては相當に行はれたものに相違ない。菩薩行を説いた極めて短いものであるが、條目を陳列して居るので、之が紹介には、相當の行數を要する。蓋し、菩薩行の概括で、小乗教といへば、恰も三十七助道品の如きものであらう。之を見れば、當時大乘教徒が、如何なる實行個條を要求して居たかを知る事が出来る。首楞嚴經は、三昧を重要視した思潮を代表し、此經は、行法を重要視した思潮を代表する。但し、菩薩大乘を以て自任した事と、大乘教初期のものといふに於ては同一であらうと思ふ。

異譯 (一) 文殊師利問菩提經 一卷、姚秦羅什 Kumārajīva of Kucha (四〇一—四一二) 譯

(二) 伽耶山頂經、一卷、元魏、北天竺、菩提流支 Bodhiśuci (五〇八—五三五) 譯

(三) 佛說象頭精舍經、一卷、隋、天竺、三藏、毗尼多流支 Vinītaruci of Udyana (五二八) 譯

三三  
(四) 大乘伽耶山頂經、一卷、唐南天竺菩提流支 Bodhiruci (六九三—七一三) 譯

註釋文殊師利菩薩問菩提經論、二卷、天親菩薩造、後魏菩提流支五三五譯

説時は、佛成道後、久しからざる時て、説所は摩伽陀國伽耶山頂、秦譯には、山祠、魏譯には山頂塔、隋唐二譯には山頂精舎とある。その中、最古の秦譯がよい。民間信仰の祠の存せし所である。此時、精舎の存在する筈がないであつた。會座には、大比丘衆千人を初とし、十方世界より、文殊、觀音、勢至、香象、勇施、勇修行、智等を上首とせる無量の菩薩、天龍八部等が來會した。比丘衆千人は皆前に編髮、梵志であつたといふから、三迦葉の師弟合計千人を指すのである。佛陀は、婆羅捺城に成道第一夏を送り、雨期の後、弟子をして四方に傳道せしめ、自ら苦行林に事火外道の三迦葉を度し、王舎城に向ふの途次、伽耶山に登りて、三迦葉師弟に對して、火に關する説法をせられたと、佛傳にある。此經の舞臺は、此傳記に基いて居るが、内容は此時の説法に關係なく、之に先つ成道即時の佛陀の内證を傳へたものである。經中に活動するものは、文殊菩薩で、問答の對手として、淨月、威光天子、決定、光明天子、勇修行、智菩薩が少しく活動する。經題に文殊の名を標するも當然である。

(一) 佛三昧に入りて、法界を觀察して念ふ、誰か菩提を得たるぞ。身なりや、心なりや。身は四大より成り、父母より生れ、無常敗壞のものである。心はまた幻の如く衆縁より生じ、無相、無所有のものに過ぎぬ。共に常住普遍の菩提を容受すべき器でない。さて又所證の菩提なるものは、唯名字あるのみ。去來なく、出入なく、戲論を離れ、一切言語の道を離る。斯る菩提は證得し得べきでない、無證無成にして、始めて成正覺と名くべきである。云々。蓋し、理想を前に置きて、之に向つて進む時は、一種の所得あるを期すれど、達して見れば、所得あるものではない。證得の念の存する間は、却りて眞の菩提といへぬ、迷悟善惡の如き差別觀念を超絶して、法性の平等に悟入する所に眞の菩提ありといふのである。

(二) 文殊問ふ、然らば、如何にして發心すべきか。佛いふ、菩提相既に三界を超絶し、名字言説を離るゝから、菩提に趣むくといふも、その實は初發心より趣むく所がない。無所趣に趣むくのが、乃はち菩提に趣むく所以であるとして、菩提に趣向する法として、(一) 無自性に趣むく、(二) 無處所に趣むく、(三) 法界性に趣むく、(四) 一切法中無所執著に趣むく、(五) 實際無差別に趣むく、(六) 如鏡中像、如光中影、如水中月、如熱時饑に趣む

くの六個を擧げて居る。宛然これ般若の世界觀、及菩提觀である。

(三)淨月威光天子、文殊に向つて、然らば發心に附隨する行なきや、若しあらば何の爲なるかを問ふ。文殊いふ、大悲行を修すべし、此行は衆生の爲に存するもので、自己の爲に存するのではないとて、天子の問に應じて、大悲行の起る根源順序を尋ね、次第に廻りて、十四句を列してある。乃はち(一)聖教を憶持して忘れず、(二)世法を觀察して(三)理の如く思惟し、(四)よりて持戒以て諸過を犯さず、(五)十善業道を修し、(六)身口意の三業悉く淨く、(七)不放逸にして、(八)方便慧を起し、(九)六波羅蜜を修し、(十)菩提心を發し、(十一)深信心を起して、(十二)法性に悟入し、(十三)一切衆生の平等を知るを以て、(十四)すべてに對して誑誑の心がない。斯くて一切に對する大悲行を生ずるのである。次で天子が發心後の經過を問うたので、文殊は四種の發心とて、成道まで終始發心あるべきを説き、この中に能く因果を攝すといひ、花寶造車月の三喻を出して、後、是等を種々に配當した。

一、初發心—行道心の因—超聲聞地—因—生法王家  
二、行道心—不退轉心の因—超辟支佛地—智—學法王家

世親はこの一段を菩薩功德勢力分といひ、

三、不退轉心—一生補處心の因—超不定地—斷—得學解了  
四、一生補處心—一切智の因—住決定地—果—得學自在

この以後を菩薩行差別分と名けた。

(四)次に決定光明天子が進んで文殊に速得の略道を問うたので、文殊はこれに答ふるに、四種の二道を以てした。これ菩薩行の概括である。

第一、方便道(不捨衆生。能知諸法差別相) 第三、有量道(取相分別)

般若道(能捨諸法。能知法界無差別理)

無量道(不取相分別)

第二、資糧道、又有著道、又有漏道(前五波羅蜜) 第四、智道(初地至七地)

決擇道、又無著道、又無漏道(般若波羅蜜) 第五、斷道(八地至十地)

(五)次に勇修智信菩薩が、所知の義と智とを問うたに對して、文殊は義とは認識以上のもの即ち非和合なり、智とは主客兩觀の一致に現はるもの、即ち和合なりと答へ、進んで義とは無爲なり、無爲は變異もなく、成實もなし故に取捨すべからず、斯る義には一法の和合すべきなく、また和合せざるなし、之に反して、智とは道を見るに名け、善く蘊處界を觀察し、緣起法を觀察し、處非處を視察するに名くるから、素より和合のものにして、不和合にあらずと答へ、進んで十智、十發、十行、十無盡觀、十調伏、十

寂靜地の六種十法を説いた。これ菩薩の證法界の相である。十智とは能證の智である。十發とは十大願である。十行とは攝化利物の積極方面の行である。之に對すれば、十調伏は十波羅蜜によりて、其反對を破る所の消極方面の行である。十無盡觀とは、十定とでもいふべきであらう。斯くて十寂靜地に安住し得るのである。この名目は、悉く略する事とする。

(六)最後に文殊は如實行に二面を分ち、之を六重して、是等を如實に行ずるものは、久しからずして、成道すべしと結び、世尊は善哉々と讃嘆せられた。

- 第一 道自調伏
- 第二 斷教化衆生
- 第三 有用智無功用智
- 第四 善建立諸地善觀察諸地無差別

- 第五 善遠離諸地過失善圓滿諸地功德
- 第六 善說聲聞辟支佛地善說諸佛菩薩不退轉法

以上、極めて短き經に對して、比較的、多くの紙數を費した。經の前半を爲す佛の三昧所見の法界及菩提の説相は、般若そのまゝであるが、後半の六種十法の邊は、頗る華嚴的といふべきである。華嚴は十重無盡法門を以て、經の光彩と爲す程で、凡

てを十分せねば止まぬ傾向を有する。經中、十善業道といひ、十地といひ、十波羅蜜といひ、皆華嚴十地品の要目である。内包は異なるが、十智といひ、十願といひ、十無盡といひ、十行といひ、實によく華嚴の口吻に類して居る。或は反對に十地品の十重法が、この經の十法に甚だ類似するといつた方がよいかも知れぬ。前半の法界觀も、また十地品第六地の十平等法などの中に殆んどそのまゝに出て居る。加之、共に佛成道久しからざる時の三昧所觀の法界及菩提を説くを主趣とする。この内容と形式との間の酷似は、やがて重大な問題を含んで居ると思はるゝが、それは輕々に斷じ去る事は出来ぬ。共に世親の註釋を有し、共に元魏の菩提流支によりて譯せられた事も、また因縁多き事と思ふ。

### 六、思益梵天所問經 *Vissaiṣṭika-brahma-pariprocā*

- 一、持心梵天所問經、四卷、煥煌菩薩竺法護西曆二八六譯
- 二、思益梵天所問經、四卷、姚秦鳩摩羅什西曆四〇二譯
- 三、勝思惟梵天所問經、六卷、元魏菩提流支西曆五一七譯

註釋

一、勝思惟梵天所問經論、四卷、天親菩薩造、菩提流支(五三一)譯  
二、思益梵天所問經簡註四卷、明圓澄撰

「伽耶山頂」「法華」「十地」「無量壽」の諸經と同じく、天親菩薩に註せられ、同じく菩提流支によりて傳譯せられたものゝ一つである。晉秦二譯は麗本と同じく、十八品に分たれ丹本は二十三品に別たれたが、魏譯は品を分たぬ。思ふに、翻譯の時に卷數を分ち、又品を分けたものであらう。支那に於ては、禪の圓澄が註を加へて居る。以てその内容の如何なるものか、大概想像せらるゝと思ふ。舞臺は王舍城迦蘭陀竹林で、會座には大比丘僧六萬四千人、菩薩七萬二千人、天龍八部皆來會した。中に於て、文殊、虛空藏、網明等の十六法王子、跋陀婆羅、日藏、持地等の十六菩薩の名を掲ぐ。而して經中に活動する人格は、網明、文殊、普華の三菩薩、思益梵天、等行天子、不退轉天子、三天を主とし、舍利弗、大迦葉、須菩提の三羅漢も、間に點綴して出るが、然し單なる客分に過ぎぬ。就中、東方日月光佛刹の思益梵天が、最も多く活動するので、經名も之に従つてある。之に次ぐものは、文殊等行の二人で、いづれも大乘の菩薩である所から、等行天子は多く等行菩薩と呼ばれてある。是等諸菩薩、諸天、諸羅漢及び

佛陀が或は問者となり、或は答者となり、反覆應酬、よりて以て表はさんと期する所のものは、前掲諸經と同じく、諸法皆空觀より入りて、生死涅槃不二觀に到達せんとするにある。これ即ち「般若」の後を繼紹して、大乘佛教の共通基礎を築き上げた所の思想である事は、既に述べた所である。頗る困難な問題も、丁寧に取扱はれて居るから、能く了解せらるゝのを多とする。「楞嚴經」「伽耶經」の様に其組織も内容も、概略述べたいと思ふけれど、四卷あるので、到底紙數が許さぬから、經の中心思想と思ふ所のものゝみを取り出す事とする。

法位中、無垢、無淨、無生、無死、無涅槃、分別品といふのが、一經の出立點でもあり、やがて歸著點でもある。よく見受ける提言で、珍らしくもないけれど、至る所に、之を反覆説明して、他を説服せしめずんば已まぬ。これ諸法平等の理より、實相は無相にして、不可得なりといふに進み、不可得ではあるが、同時に不可離の涅槃は、この生死と不二ならぬれば、別に涅槃もなく、また生死もないといふのである。經の文言によりて之を説明しやう。網明菩薩、思益梵天に向つて、佛陀說法の目的は、生死を出てしめんが爲にあらざやと反問するや、思益答ふらく、佛の說法は衆生をして生死を

出て、涅槃に入らしめんとにあらざ、唯妄想によりて生死涅槃を分別して、二相ありと爲す謬見を除去せんが爲に過ぎぬ。諸法平等にして、往來なきを以て、出る生死もなければ、入る涅槃もない。故に眼前の聖衆一人として、生死を出て、涅槃に至るものがない。佛陀梵天に告げたまはく、然り梵天よ、我は生死をも得ぬ、また涅槃をも得ぬ。如來は生死を説くも、その實生死を往來する人はない、涅槃を説くも、その實滅度を得る人はない。故にこの法門に悟入するものには、生死の相もなければ、また滅度の相もない。時に會中にある五百の比丘、坐を起ちていふ、滅度せるものが眼前にありながら、滅度なしといはる。果して然らば、今日までの梵行は、無益なりしのみならず、今後とても、道を修め、智慧を求むるの要がない。是に於て、網明菩薩また佛に白す、世尊、若し法に對して見を生ずるものあらば、斯る人に佛に出世したまはぬ。若し決定して涅槃を見るものあらば、この人は生死を脱する事を得ぬ。その故如何といふに、涅槃とは、諸相を除滅し、一切の動念戲論を遠離するの謂である。世尊よ、この諸比丘は佛の正法中に出家しながら、今や外道の邪見に墮しつゝ、涅槃に決定相ありと見る。……正しき行道者には、生もなく滅もなく、得も

なく、果もない。猶梵天に向ひていふ、坐より起てる五百比丘の心を方便引導して此法門に入れ、信解以て諸見を離れしめよ。梵天答ふ、よし去りて恆河沙劫に至るも、かゝる法門を出る事が出来ぬ。譬へば、癡人の、虚空を畏れて、空を捨て、走るも、いづこに至るとも虚空を離れぬ如きものである。諸比丘は如何に遠く去るも、空相を出て、無相の相を出て、無作の相を出てぬ(空、無相、無作を三、解脱門といふ)。また虚空を求めて、東西に馳せ去りつゝ、われ空を得んと欲すと言ふが如くである。人は唯虚空の名を口にするのみ、空を得る事が出来ぬ、また空中を行きつゝ、空を見る事が出来ぬ。諸比丘もまた是の如くである。涅槃を求めんとして居るが、涅槃はたゞ名字あるのみで、不可得のものである。不可得の涅槃を得んとするから、涅槃中を行きつゝ、涅槃を得ぬのである(分別品)。文殊もまたいふ、もし菩薩、二相によりて菩薩心を發し、生死と菩提と異なる、邪見と菩提と異なる、涅槃と菩提と異ると念はゞ、これ則ち菩提の道を行かぬものである(行道品)。斯くて有爲法といひ、無爲法といふは、單に文字言説の差に過ぎぬ。無差別の平等法界中に於ては佛とて、他にあらざ、その實相を觀照した所に與ふる名である(修行

品。然るに貪著を離るゝは、至難であるから、能く之を信解するは、至難である。世人或は實に貪著すれど法に實もなく、虚妄もない。或は法に貪著すれど、法に法もなければ、非法もない。或は涅槃に貪著すれど、法に生死もなく、涅槃もない。或は善法に貪著し、或は樂に貪著し、或は佛出世に貪著すれど、法に善も非善もなく、苦も樂もなく、佛出世も、涅槃もない。……水中に火を出し、火中に水を出す事の、信じ難きが如く、煩惱中に菩提を見、菩提中に煩惱を見るも、また信じ難い。一切世間に於て難信の法は、これである〔解諸法品〕。法に貪著すると同じく、我に貪著するもまた素より虚妄である。然し、法の實相に達すれば、これ佛である如く、我の實性を得るもまた佛である。門戸の如何によらず、その實に入るのが實知見である。思益等行菩薩に問ふ、もし、我の實性を得ば、實知見を得べきか。曰く、然り。文殊に問ふ、卿の言ふ所に従はゞ、我を見るものは佛を見る事となる。その故は、我性即ち是佛性なればである。文殊よ、然るか。何人能く佛を見るぞ。文殊いふ、我見を壞らざるものが、それである。その故如何といふに、我見即ち是れ法見であるから、法見を以て能く佛を見るのである〔論寂品〕。

我に著し、衆生に著し、人に著し、壽命者に著し、養育者に著し、有に著し、無に著し、生死に著し、涅槃に著するは、たゞに世人のみでない、修道者もまた同様である。斯る虚妄の境に彷徨するものは、眞聖諦を見る事が出来ぬ〔解諸法品〕。もし斯の如き諸見に著する時は、従つて修行に著するから、到底佛知見を開く事が出来ぬ。佛此意味を思益梵天に説いていふ、我れ往昔に於て、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚嘆して、梵行を淨修し、一切布施し、一切持戒し、及び頭陀を行じ、瞋恚を離れ、忍辱、慈心にして、如説修行勤修精進し、一切の所聞を能く受持し、諸禪定に入り、讚誦思問せしが、猶未だ諸如来より授記を蒙る事が出来なんだ。要するに、所行に依止したが爲である。……其後、燃燈佛を見て、無生法忍を得るや、即時に授記を蒙つた。我その時、一切諸行を出過して、六波羅蜜を具足した。六波羅蜜を具足するとは、施を念はず、戒に依止せず、忍を分別せず、精進を取らず、禪定に住せず、智慧無二なるをいふ〔問談品〕。是に至りて、四諦の意味の如きも、これまでと全く異りて來る。苦集滅道が四諦にあらざりて、却りて是等を離れた非苦、非集、非滅、非道が聖諦となる。乃ち苦の無生を知るが苦聖諦、集の無和合を知るが集聖諦、畢竟滅の法中に於て、無生無滅を知

るが滅聖諦一切法平等に於て、不二法を以て得道するが、道聖諦である。生死を離れてその後、に涅槃を得るといふ様な見を抱くは、淺智である。生死性も涅槃性も常に實なるを以つて、有佛無佛に關らず、法性常住であるのに、生死相を苦諦といひ、衆縁和合を集諦といひ、滅法を滅諦といひ、二法求相を道諦といひ、是等を超脱せぬものは、度すべからざる徒である。佛いふ我この愚人を以て外道の徒黨といふ。我は彼人の師でなく、彼はまた我弟子でない(解諸法品)。無相不可得の見地に立つ此經にては、斯の如くにして、通常の佛教を外道といふまでに至つた。敢て之を排斥するのではない。斯くして以て其自覺を促したのである。要するに、一切法空無我が聖諦であるから、苦を見ず、集を斷せず、滅を證せず、道を修せぬ地域に進ませんと要するのである。これは法なり、これは非法なりと分別せず、二相を離るゝ所に、眞の修道あらしめんと要するのである(談論品)。

從來の聲聞法があながち悪いといふてはないが、般若以來の菩薩法は一層進んだ世界觀や眞理觀を有し、従つて一層無垢の行道を爲したに相違ない。是に於てか同一佛教中にも、小乗、大乘の區別を見(詠嘆品)、また小乗、中乗、大乘の區別を見た。

同一教法であつても、之に對する態度見地如何によりて小大の區別を爲したのである。小乗とは聲聞乗のこと、中乗とは緣覺乗のこと、大乘とは菩薩乗のことである。菩薩とは元來は俗士の大心行者を指すので、多くの菩薩の中に天子を交へ、或はまた跋陀婆羅居士や、毘舍佉優婆夷を交へて居る所から見れば、當時出家の間に、大心者あつたに相違ないが、他にも菩薩的精神を抱ける人があつたに相違ない。にも關らず、まだ出家が修行者の理想生活とせられた事は、菩薩の四法増長として、持戒名聞布施出家を數へて居る(四法品)に徴し、また毗離婆那天王子善寶が七寶蓋を佛に上りた時、佛陀が授記せる偈の中に、汝於此命終、即生兜率天、從兜率下生、得見彌勒佛、二萬歲供養、爾乃行出家、既得出家已、淨修於梵行、諸天嘆品といふに、徴して、知るべきである。

以上、この經の主張抱負を概略述べたと思ふ。最後に一言したきは、大乘經典に共通ともいふべき彌勒菩薩が、終に經中に現はれず、諸天嘆品の中に兜率天の彌勒佛として歸依せられて居る事である。これには面白い説が立てられやうと思ふが、こは思ひ／＼の見解に任す方をよむと思ふから、略する。彌勒佛が説かれてあ



るので、彌勒下生經の存在は證明せらるゝ。又堅意菩薩等行天子は、前掲の首楞嚴經に出づる。觀世音菩薩や、跋陀婆羅居士なども、問題の人格である。これにつきても、多くの斷言を避くる事とする。

### 七、維摩經 *Vimalakirti*

無相不可得の深義に立脚し、我他彼此の迷執打破を痛切に要求せるもので、之をあらはすに、戯曲的結構を以てし、此目的を達せんが爲に、惡辣極まる筆力によつて居る。大乘經典多しと雖も、此經の如き惡辣なものはない。それだけ反響も多く支那、日本に於て維摩の雷名が翻譯當時より轟き渡つて居る。

經中に一名を不思議解脱法門といふに徴すれば、經の理想とする所の境域が、不思議品に説かるゝ所にある事が知らるゝ。その中に此解脱に住するものは、須彌山を以て芥子の中に内るゝに、須彌山王の本相は故の如くにて、些少の増減がない而も四天王、忉利天等は己の入れらるゝを知らず、唯度すべきものゝみ、之を見るとある。我見の束縛を離れて、平等不二の妙理に達する時は、無住の本より一切法を

建立するから、斯の如き圓融無礙の妙用が現はるゝのである。

此經には前後總計七回の翻譯があつたが、その中、僅に吳、秦、唐の三譯を存するのみである。

- 一、古維摩經二卷——後漢嚴佛調(西曆一八八)譯
- 二、維摩詰經二卷——吳支謙(西曆二二〇—二五三)譯
- 三、維摩詰經三卷——西晉竺叔蘭(西曆二九六)譯
- 四、維摩詰所說法門經一卷——西晉竺法護(西曆三〇一)譯
- 五、維摩詰經四卷——東晉祇多密(西曆三一七—四二〇)譯
- 六、維摩詰所說經三卷——姚秦鳩摩羅什(西曆四〇六)譯
- 七、無垢稱經六卷——唐玄奘(西曆六五〇)譯

維摩は無垢又は淨の義、詰は稱又は名の義である。唐譯獨り無垢稱の譯名を用ひたが、他は悉く原語を保存して居る。古來略して維摩といひ、又は淨名の譯語を用ひた。現存三譯を對比するに、章段の分ち方から順序に至るまで、全く同一であるから、その原本が蓋し同一であつたに相違ない。最古の漢譯も、必ずやまた同一の

原本よりせられたものであらう。經典多しと雖も、斯くまで原本の同一なのが珍らしい。異本あるを許さぬまでに齊頓して居た爲である。十四品の中、初四品が序分、終一品半が流通分、中の七品半が正宗分である。正宗分は、維摩の方丈會と、菴羅の佛前會とに分れて居るが、結構雄大、秩序整然として、一絲亂れぬといふ狀況である。紹介は最も多く行はれて居る、秦譯に従ひ、非常に有名な經であるから、比較的多くの紙數を費す事とする。

經の舞臺は毗耶離城 *Vaishali* (廣嚴又は好稻城と譯せらる) で、會座には、八千の大比丘衆、三万二千の菩薩、梵釋、天龍、四衆等無數の來會者があつた。時に長者子寶積なるもの、五百の長者子と共に、七寶の蓋を以て佛に布施し、偈讚して後、説法を請ふ。その請問は、是等五百の長者子は皆菩提心を發し、清淨なる佛國と、その佛國を感得すべき淨行とを聞かんとして居る、願はくは之を説きたまへといふのである。佛之に對して、單刀直入に衆生萬有を有する此國土を以て淨土と爲し、以て唯淨なる所にのみ之を見るは小乗の見てある、菩薩の大悲の發動する所は淨穢共に淨土なる旨を示し、進んで直心、深心、大乘心、布施、持戒等の十七種の法を以

て、淨土の因と爲し、隨其心淨則佛土淨なれば、淨土を得んとせば、其心を淨くすべしと結んだ。時に舍利弗は、心の中に、釋尊の佛土たる此娑婆の不淨なるは、その菩薩たりし時の心の不淨なりし爲なりやとの疑を起したので、佛は之を洞見して、日月を見ざるは盲者の罪なり、日月の罪にあらず、佛國の嚴淨を見ざるは、汝が見ざるのみ、如來の罪にあらずと諭された。色界初禪の螺髻梵王、舍利弗に向ひ釋尊の佛土の清淨なる事は、自在天宮の如し、見るもの、心に高下があるので、淨穢を來すに過ぎずと忠言した。佛乃はち神通を現するや、三千世界の嚴麗なる事、寶莊嚴佛土の如く、舍利弗に之を見せしめていふ、我佛土の淨き事もまた斯の如し、下劣の人を度せんが爲に、不淨を示すのみと。之を拜せる五百の長者は無生法忍を得、八万四千人は菩提心を發した。佛神力を攝むるや、世界また故の如くなるを見て、三万二千の天と人とは、法眼淨を得、八千の比丘は羅漢果を得た。前二は大乘の益で、後二は小乗の益である。得果に不同あるは、衆生隨類各得解の爲である。(第一、佛國品)

此一品の活動者は、寶積長者、舍利弗、螺髻梵王、佛陀で、寶積は大乘心ある居士の代

表者舍利弗は小乗徒の代表者、梵王は聖と人との中間に位する天の代表者である。是等が同一の世界に對して、或は不淨と見、或は自在天宮の如しと見、或は寶莊嚴佛土の如しと見たのは、心の高下によるのである。是に於てか、心を淨くせよとの教訓に活力あり、後に大小二乗の相違を論議する伏線ともなる。斯くて大乘の白衣居士維摩の出づべき序が開かれたのである。

城中に維摩詰といふ居士があつた。その本地は無生忍の菩薩なれど、人を度せんが爲に、長者の身を示し、種々の方便を以て衆生を饒益せしが、今や身に疾あるを現じて、人身と佛身との差異を示し、訪ひ來る國王、大臣、長者、居士、婆羅門、王子、官屬等に對して、人身の厭ふべく、佛身の樂ふべきを説き、さて徒らに現身を厭ひ、之を滅するは至れるものに非ず、須らく佛身を得て衆生の病を斷ずべしと諭して、衆をして菩提心を發さしめた(第二方便品)。佛陀會座中に維摩のなきを見、其病に臥せるを聞き給ひ、之を問はしめんとて(一)舍利弗、(二)目連、(三)大迦葉、(四)須菩提、(五)富樓那、(六)彌多羅尼子、(六)摩訶迦旃延、(七)阿那律、(八)優波離、(九)羅睺羅、(十)阿難の十人に對して、順次に使者たるべきを命せられたが、往時に於て維摩の呵責を受けた因縁

を述べて、皆之を辭し、其他の五百大弟子もまたその任に堪へずとて悉く辭退した(第三弟子品)。よりて八千の菩薩に命ぜられたが、また同じくその本縁を述べて辭退した。その中、彌勒、光嚴童子、持世菩薩、長者子善徳の四人のみを擧げて他は略してある(第四菩薩品)。

以上は序分である。この二品は各羅漢、各菩薩の特長を取り出して、大乘の見地より悉く喝破し去つたもので、無相大乘の本旨正しくこゝにあらはれて居る。維摩の徳を顯はすのが主で、是等の羅漢、菩薩は、客である。客たる邊にのみ屈托する時は、經の本旨を没却するの愚に陥る。經の上にては十弟子の特長として、(一)宴坐、(二)說法、(三)行乞、(四)乞食、(五)說法、(六)演義、(七)天眼、(八)持律、(九)行道、(十)奉持を擧げ、別に佛弟子中の第一とも斷言せぬけれど、註維摩に至りては各を(一)智慧、(二)神足、(三)頭陀、(四)解空、(五)辯才、(六)解義、(七)天眼、(八)持律、(九)密行、(十)惣持の第一としてある。これ他の諸經を參酌し來りての命名で、後世是等を佛門の十哲と爲すのは、こゝに基づくのである。四人の菩薩につきては、彌勒に授記作佛、光嚴に道場持世に天女の受不、善徳に大施會を屬せしめて居る。いづれも佛教の當相に於て重要視せられ實行せられねばな

らぬ所のものであるが、維摩によりて悉く罵倒せられて居る。蓋し是等の行法が悪いのではない、之に執して律法的となるのが悪いのである。

佛乃ち最後に文殊に命ぜられた。文殊勅を奉じ、維摩の徳を讃嘆しつゝ、城中に向ふので、二大士の談論必らずや絶妙のものあらんとて、八千の菩薩、五百の聲聞、百千の天人皆之に隨ひ、前後を圍繞して大城に入つた。維摩之を聞き、其室を空しくし、唯一床のみを置き、其上に臥しつゝあつた。文殊を迎へて、善來、文殊師利、不來相而來、不見相而見といへば、文殊は如是居士、若來已更不來、若去已更不去と答へた。これ當初の挨拶で、斯くて後佛意を傳へて、病因、病時、療法を尋ねれば、維摩は、菩薩の病は大悲を以て起り、癡愛ありて以來であり、一切衆生の病だに滅すれば、我病もまた滅せんと答へた。文殊は、次で、この室の空なる所以、侍者なき所以より、無疾の菩薩が有疾の菩薩を慰諭する法、及び有疾の菩薩が自ら其心を調伏する法を問ひ、維摩は一々之に答へ、八千の天子をして、悉く菩提心を發さしめた(第五問疾品)。時に舍利弗この室中に坐すべき牀座なきを念ふや、維摩一たび之を呵責したが、やがて神力を以て東方須彌相國須彌燈王佛の所より、八萬四

千由旬高の師子座三萬二千を借り來り、衆をしてその上に坐せしめた。方丈の一室がこの大を包みて、毫も狭からざるは、不思議解脱の妙用によるのである。舍利弗は偏へに之を讃嘆するのみ、大迦葉はたゞ自己の小器之を解する能はざるを痛悔して號泣するのみであつた(第六不思議品)。文殊、維摩に向ひ菩薩の衆生觀を尋ねるや、三十臂を以て、即空無實なるを答へ、次で無相の慈悲喜捨を説き、猶生死の怖畏に對し、如來の功德力を以て所依とすべきをいひ、最後に無住の本より一切法を立つといふに結歸した。時に一天女の散せる天華が、菩薩の身には著かぬが、聲聞の身に著きて離れぬので、舍利弗と天女との間に(一)華の如法、不如法につきて、天女の(二)此室に住する久近につきて、(三)所得につきて、(四)所求につきて、(五)轉身につきて、(六)沒生につきて、(七)極果の所得につきて、七番の問答あるが、いづれも二乗の短見迷執を破して、無所得中道の妙を現はさぬはない(第七觀衆生品)。二大士の問答いよゝゝ其妙を發揮して、維摩が非道を行ぜば、これ佛道に通達するなりといへば、文殊は六十二見及び一切の煩惱皆是佛種なりといひ、凡庸の徒をして魂飛び神驚かしむるの佳境に入つた。大迦葉は謔法を斷盡せる

我等聲聞は菩提心を發すに堪へず従つて佛法の中に於て何の益する所もないとて痛嘆惜かず。こゝに普賢色身なる菩薩が維摩にその父母、妻子、親戚、眷屬、吏民、智識、奴婢、僮僕、車乘、象馬を尋ねたので、偈を以て一々之に答へて、菩薩の本義を現はした。問の意は有形的物質的にあらうが、答の方は精神的宗教的である。

(第八佛道品)。次に維摩を合して三十三菩薩が平等不二の法門に悟入せる各自の領解を述ぶる事となり、當初の三十一人は悉く言を法相に置いて、不二の理を説き、文殊に至りては、一段の高きに居して、言によりて言を廢し、最後に維摩は更に一段の高きに居して、默然として一言を發せなんだ。之を默不二といふのである。文殊も善哉々々、乃至文字語言なき、これ真に不二法門に入れるなりと嘆じた。これまた維摩を主とするが爲で、決して文殊を貶するの意を含むのではない。初の三十一菩薩は、次の如き兩頭の間に不二を體認したのである。(一)生滅、(二)我、我所、(三)受、不受、(四)垢、淨、(五)動、念、(六)一相、無相、(七)菩薩心、聲聞心、(八)善、不善、(九)罪、福、(十)有漏、無漏、(十一)有爲、無爲、(十二)世間、出世間、(十三)生死、涅槃、(十四)盡、不盡、(十五)我、無我、(十六)明、無明、(十七)五蘊、空、(十八)四大、空大、(十九)六根、六境、(二十)六度、一切智、(二十一)三解脱門、(二十二)三寶、(二十三)身、滅身、(二十四)三業

(空)罪、行、福、行、不動行、(二十五)我、彼、(二十六)有所得相、(二十七)闇、明、(二十八)縛、解、(二十九)正道、邪道、(三十)實、不實。(第九)入不二法門。時に舍利弗が日將に中ならんとするに、食するものなきを念ふや、維摩は聞法の席に於て食相あるを呵せしが、然し未曾有の食を進めんとて、化菩薩を上方衆香世界の香積佛の許に遣はし、香飯を求め來らしむ。滿城皆香ばしく、一鉢の香飯が衆會を飽かしめて、猶故の如くてあつた。衆香世界より化菩薩に伴ひ來れる無數の菩薩は、維摩の説明によりて釋迦佛が此土の衆生の剛強難化なるが爲に、無量の力用を藏めて、貧法を説き、此地の菩薩もまた無量の徳を藏めて、大悲の相を現はすを知りて大に感嘆し、猶維摩は他の淨土になき此界の十善法を説き、且つ淨土往生の八法を述べた(第十香積品)。

以上は方丈會とて、維摩の病室を舞臺としての大活劇である。弟子品に於ては、後世より十大弟子と仰がる、大羅漢の極めて慙れむべき位置に置かるゝを見たが、方丈會に來りては一層の甚しきを來し、聲聞法中に於て法王子ともいはれし舍利弗は、一念の起る毎に、直に維摩の呵責を受け、宿老佛に亞ぎし大迦葉は、唯自己の及ばざるを號泣するのみである。特に一天女を出し來りて、舍利弗を論詰して言句

なからしめしが如きは、二乗退治の極といふべきである。二乗退治に止まらず同じく菩薩にして、將來佛の位置にある彌勒すら、維摩の前に顔色なく大乘教中に於て法王子と仰ぐ文殊菩薩までが維摩に比して一段の下位に置かる。また佛教の當相より極めて重要な授記作佛にあれ、大施會にあれ、說法にあれ、行乞にあれ、悉く之を打破し去りて、却りて菩提涅槃の正反對なる無明、三毒、四顛倒、五蓋、乃至六十二見及び一切煩惱を以て、如來種と爲せるが如き、常想より見れば、惡魔外道の言と見らるゝまでの甚しきがあり、上方菩薩に對する辯護の中には、法門の理趣の淺近なるに満足せぬらしき口吻がほの見ゆる。流石に佛陀に對してのみ、一指を染めぬ所に、僅に宗教的温情を認め得るの觀がある。大乘經典多しと雖も、斯くまで辛辣を極めたものは、類例稀なりといふべく、此經の宣傳者は、恐くは在家居士であつたらう。出家沙門では、到底斯くまでに思ひ切つた裁斷を下し得ぬ事と思ふ。佛來れば佛を呵し、聖至れば聖を罵る所の支那の禪風は、全く此經によつて鍛成せられたのである。爾來禪門の學者が、此經を渴仰提唱するのも、此因縁によるもので、維摩の精神は今日猶禪門の中に活躍して居る。維摩の影響また大なりといふべきである。

べきである。

時に佛陀は、菴羅樹園に於て說法しつゝあり、文殊が維摩を伴ひ、大衆に圍繞せられて來らんとするや、佛前の地忽ち廣博嚴淨となる。座定りて後、佛、舍利弗を試問して、菩薩の神力不思議なるを述べしめ、また阿難が香飯の佛事を爲すを嘆ぜるを縁として、諸佛法門に入るものは、八萬四千の煩惱を以ても、能く佛事を爲すを説き、進んで菩薩の定、智、總持、辯才、一切の功德の量るべからざるをいひ、以て上方の菩薩の貢高心を抑へられた。上方の菩薩乃ち初めに下劣の想を以て此土を見たるを悔い、說法を請ひ得て還らんとしたので、佛は之に對して、盡無盡無閔法門とて、有爲を盡さず、無爲に住せざるべきを以て諭された。(第十一菩薩行品)。舍利弗が維摩の前身を問うたので、佛は舍利弗に向ひ、妙喜世界の無動佛國より没して、衆生の煩惱を破らんが爲にのみ、此不淨の佛土に生れたるを告げられた。大衆その佛國を見んを樂へるを以て、維摩乃ち右手を以て彼世界を斷取して、此土に置くや、舍利弗之を見て感嘆の餘り一切衆生をして清淨土を得ること無動佛の如く、神通力を獲る事、維摩の如くならしめんとの誓願を立て、大衆

皆此世界に往生せんを願うたので、佛は其願の如くなるべきを記せられた(第十  
二、見阿闍佛品)

此二品は菴羅會とて、佛前に於ける問答であるが、畢竟方丈會の補足に過ぎぬ。此  
經の中心人格たる維摩の本國が、東方の妙喜世界であるから此妙喜世界は即ち  
經の理想國といふべきであらう。經中には寶莊嚴佛もあり、光明國土の難勝如來  
もあり、東方須彌燈王佛もあり、上方の香積佛もあり、また阿闍、阿彌陀、寶焰、寶德、寶月  
寶嚴、師子響、一切利成等、十方無量の諸佛が説かれてある。其中に於て、殊に阿闍(無  
動佛を以て、大衆歸依の尊とし、その淨土を願生の國とせる所に、何等かの鍵鑰が得  
られはしまいかと思ふ。蓋し往生淨土の信仰が次第に勢力を張りつゝあつたが  
まだ特に西方を中心とするに至らなかつた時代のもので、猶また比較的東方に於  
て宣傳せられたものではあるまいか。その毘耶離城を舞臺とせるは、これを暗示  
する様に思ふ。

釋提桓因、此經を讚嘆して、之が弘通者を護らんを誓ひ、佛は之に對して、此經を受  
持し、弘通するものは、古今の佛を供養するものなりとて、過去の藥王如來の時の

出家王子月蓋比丘の例を引いて、法供養を以て佛を供養すべきを勸發せられた。  
(第十三法供養品)。最後に此經を彌勒と阿難とに付囑して、閻浮提に於て廣宣流  
布すべきを命ぜられ、以て最後の幕が下りた(第十四囑累品)。

經中にもある通り、維摩は如何にも權現である。此權現を出し來りて、縱横に一切  
佛教を批評し盡し、すべての行道者を揶揄警醒せしめたのは、誠に痛快の極である。  
當時専門家の多くに超脱のものがなくて、却つて在家の中に超凡出色の大士があ  
つたものではあるまいか。殊に毗耶離城は、一種の文明の中心として、早くより中  
外に其名を馳せ、西方の婆羅門文明の地域を去る事最も遠きが爲に、思想の自由に  
於て一層他の上に出るものあり、城中に住せる離車族 *Licchavi* は殊に、勇氣もあり  
熱情に富み、教學を重んずる點に於て、他に勝れて居たから、維摩は必らずや離族中  
の大乗居士の反映であらう。

此經と同様な結構を有するものには、大方等頂王經、異譯大乘頂王經、善思童子經  
の如き、また月上女經の如きがある。共に維摩の男女を主とし、これと菩薩聲聞と  
の問答を骨子として居る。また阿闍世王女と諸羅漢との問答を骨子とせる無畏

德菩薩會(異譯阿術達菩薩經)の如き、波斯匿王女と諸羅漢諸菩薩との問答を骨子とせる無垢施菩薩會(異譯離垢施女經、得無垢女經)の如きがある。いづれも此經に學ぶ所ありしものと思はるゝが、其結構に於ても、思想に於ても、到底此經に比肩し得べきでない。

羅什が此經を翻譯するや、什門四傑の一人たる僧肇は之を見て出家し、同門にして同じく四傑の一人たる道生及び師の什と共に八卷の註を著はし、以て此經の宣傳に力を盡した。我邦にては聖德太子が勝曼法華の二經と共に、此經に五卷の疏を加へられた。支那に於ても、本邦に於ても、此經が大乗經典中に於て、流布の先驅を爲せるは、注目すべき事である。此經に對する註疏は、右の外、華嚴天台三論法相禪等諸宗の學者の手によりて、各時代を通じて製せられ、義天目錄には十九部を擧げ、諸宗章疏目錄には廿九部を掲げてあるが、其中に於て、前掲註維摩の外、隨慧遠の「義記」八卷、隋智顛の「玄疏」六卷、同勅撰「文疏」廿八卷、唐湛然の「略疏」十卷、同「疏記」三卷、隋吉藏の「玄論」八卷、同「遊意」一卷、同「義疏」六卷、同「略疏」五卷、唐窺基の「贊」六卷の十一部が現存して、續藏經中に編入せられ、猶其後に成れる宋智圓の「略疏垂裕記」十卷、明楊起元の

「評註」十四卷、明傳燈の「無我疏」十二卷、清淨挺の「饒舌」一卷も編入せられて居る。若し註疏に對する講義等を掲げ來らば、際限なきまでの多數に上る。我朝に於て、齊明天皇の三年、内大臣鎌足公が山階寺(後の興福寺)を建立して、始めて維摩會を設け、翌年福亮を請して講經せしめてより、毎年の例となり、其後斷續せしが、仁明天皇の承和元年以後、不斷の法會となりし事は、此經の上に一段の光彩を添加する事跡である。

## 八 妙法蓮華經

Saddharmapundarika-sūtra

支那日本の佛教に對して、長き、廣き、且つ深き關係を有する事、此經の右に出づるものがない。之を正依とする者に、天台と日蓮との二大宗がある。南地佛教の精華として、北地佛教の極隨たる華嚴宗と並び稱せらるゝ所の支那天台宗は、印度直輸入の六朝佛教以外に、支那佛教の旗幟を掲げた最初のもので、而も三國佛敎學の基礎を築いて居る。日本の天台宗も、また古京六宗が支那輸入の佛敎たるに反して、初めて日本佛敎の旗幟を翻へし、日本佛敎全體の搖籃といつても差支がない程の位置を占めて居る。こゝに源を發せる日蓮宗は、同じくこゝに源を發せる淨土



眞宗と相並んで、日本佛教の特色を發揮した點に於て、他に比肩すべきものがない。斯く支那日本の佛教中に於て、重要な位置を占め、古今に通じて偉大なる關係影響を有する二大宗が、等しく此經を本典として立つ所から見れば、經中他に異なる長所を含むに相違ない。平安朝の佛教は、叡山によりて代表せられた程であるから、八軸の妙文として無比の法寶と仰かれた此經典は、禮拜供養の對象であつた。またこの經題は念佛と連絡して、實際宗教たるの要具となり、廿八品の名目は文學と連絡して人心を洗滌せしむる清劑であつた。殊に普門品の如きは、宗教の方面から、藝術の方面からも、今日猶大なる位置を占めて居る事を注意せねばならぬ。斯く日本に殊別の關係を有する様になつたのは、本邦佛教の開拓者たる聖德太子が、特に之に註疏を加へられた因縁にもよると思ふ。

此經の異譯に三種あるが、共に現存して居る。開元錄に従へば、

一、正法華經十卷。太康七年(西曆二八六)西晉竺法護譯。

清信士張士明、張仲正、聶承遠等筆受。

二、妙法蓮華經(新譯法華)八卷。弘始八年(西曆四〇六)姚秦鳩摩羅什譯。僧叡筆受。

並製序。初爲七卷二十七品、後人益天授品成二十八。

三、添品法華經七卷(或八卷)。仁壽元年(西曆六〇一)隋闍那崛多譯。因普曜寺妙門

上行所請、崛多、笈多二法師、重勘梵本、闕者添之。

猶此本に次の三譯があつたと傳へらるゝ。

一、法華三昧經六卷。孫亮五鳳二年(西曆二五五)吳支疆梁接於交州譯。竺道馨筆

受。見竺道祖魏錄、及始興錄。

二、薩芸芬陀利經六卷。西晉竺法護譯。見竺道祖晉世雜錄。

三、方等法華經五卷。成康元年(西曆三三五)東晉支道根譯。見竺道祖晉世雜錄。

魏錄だの、始興錄だの、晉世雜錄などいふ目錄の名が見え出したのは、費長房の「三寶記」に始まるが、此書には多くの故意的誤謬を含んで居るから、斯る目錄のあつた事すら疑はしい。况んや三譯に於てをやである。(二)(三)の如きは現存最古の經錄たる僧祐出三藏記集に見えぬ。恐くは悉く誤謬であらうと思ふ。

「添品法華」の序を見るに、原本には貝葉文と龜茲文との二様あり。法護のは前者よりし、羅什のは後者より譯出した。而して法護のは普門品偈を缺き、羅什のは藥

草喻品の半、富樓那及法師等二品の初提婆品、普門品偈を缺いて居るから、更に之を原本に照して未譯を補足し、順序を修正し、字句を改刪せるもの、これ「添品法華」であるとの事である。よりて以て、此經が西域に流はるゝ事の大なる、遂に梵本以外のものあらしむるに至つた事が知らるゝ。是等三譯を現存梵本に比較するに、いづれも多少の相違あるが、其中いづれを可とし、いづれを不可とすべきでない。皆原本上から來た相違であらう。これ印度及西域に行はれた原本は、まだ確定不動のものてなかつた事を知らしむる材料である。支那に來て、一宗の本典となつてから、不動のものとなつたが、印度に於て變化の自由であつた事は、却つて其中に活潑々々の生命のあつた證據とすべきである。

三譯中最も行はれたのは什譯であつた。唐の道宣か什譯に加へた、弘傳序なるものに、漢より唐に至る六百餘載、四千卷軸の群籍中、受持の盛なる、法華に過るものなく、此經の三譯中、秦本最も宗尙せらるゝと記し、又明の世祖が北藏を鑿梓する時、冠せしめた御製の序の中にも、三經の文理、重沓互陳すと雖も、羅什のみ獨り其旨を得たりと讚嘆して居る。本邦に於て、什譯の獨り行はれた事は、今更申すまでもない。

斯の如くであるから、之が紹介を、妙法蓮華によりてすべきは、當然の事である。

妙法蓮華經は、もとは七卷二十七品であつたが、今は八卷二十八品とせらる。そは提婆品が後に別譯追加せられたに原因する。普門品重誦偈もまた別譯追加であつた。提婆品はその原本を、揚都の沙門法献が西曆四七五年、于闐より將來し、四八三年、達磨提と共に瓦官等に於て譯したものである。普門品偈は周武帝の時、北天竺の闍那崛多が、益州龍淵寺に於て譯したものである。

序品佛、一時靈山にあり、會座には一萬二千の大比丘、八萬の菩薩、天龍八部、及び韋提希子阿闍世王があつた。佛、無量義教と名くる菩薩法を説き終りて、無量義處三昧に入り、白毫の光明を放ちて、東方世界を照した。彌勒この因縁を知らんとて、文殊に問へば、これ妙法蓮華教と名くる大法を説かんとする瑞相なり、過去の日月燈明如來に恰も此例ありとて、委しく其因縁を告げた。これ此經に淺からざる宿昔の因縁あるを示し、以て深い堂奥を知らせたのである。

(方便品二)佛三昧より起ち、舍利佛に向ひ、從來種々に分別せる説法は、これ慈悲の方便に過ぎぬ。佛は方便も智慧も悉く成就して居る。若し夫れ佛々の究盡せ

る諸法實相に至りては、第一希有難解である。所謂諸法の如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等がそれである。佛の所得の法は説くべからず、止みなんと告げられた。從來一解脱一涅槃の義をのみ説かれなと思へる千二百の二乗等しく心に疑を起したので、舍利弗之を代表して、その所以を問ふ。佛は之を説かば、人天皆驚き疑ふべきを以て、之を止めよと制し、三請の後初めて其本意を開かんとせられた時、増上慢の四衆五千人未得を得と思ひ、座を起ちて退く。佛之を止めず、衆の純實なるを見て、諸佛世尊は一大事因縁の故に世に出現す。そは衆生に佛智見を開示し、悟入せしめんが爲に外ならず。故に如來の説法は唯一佛乘のみ、二乗又は三乗ある事なし。その一佛乘を分別して三と説くは方便のみ。若し我弟子にして之を知らず、自ら阿羅漢を得、涅槃を究竟せりと謂ふは、諸佛の意が唯菩薩を教化するにありといふ事を聞かせざるが爲にして、斯るものは眞の阿羅漢にあらず、増上慢の人なり。若し眞の阿羅漢ならばこの法を信ぜざるの理あるべからずと説き、同工異曲の長偈の中に、出世本懷の一乘にある旨を推し擴めて、異の方便を以て第一義を助顯

すといひ、進んで舍利を供養し、佛廟を爲し、佛像を彫刻し、畫像を作すもの、皆佛道を成ずといひ、最後に一たび南無佛と稱するも皆既に佛道を成ず、若し法を聞くあるもの、一として成佛せざるなしといひ、廣大なる佛意を開顯せられた。これ諸法實相の教理を近く現實の上に味はせたもので、蓋し現實を超絶せる所にのみ理想を追求し、渴仰したのに對する警醒である。

(譬喩品三)舍利弗、佛に向ひ、我嘗て佛が諸菩薩に授記するを見て、我等とて同一法性のものなるに、如何ぞ小法を以て化せらるゝぞと思ひ、傷み悔ひつゝありしに、今日始めて眞の佛子たるを知ると白せば、佛乃ち舍利弗を啓發するに、過去に於て菩提心を發せし因縁あるを以てし、將來作佛すべきを記し、次で舍利弗の請により、大衆の心に疑なからしめんが爲に、長者が羊鹿牛三車の方便を以て、諸子を火宅中より救ひ出して後、三車以上の七寶の大車を與へた譬喩を説き、如來の三乗を説くは衆生を三界の火宅より救はんが爲に外ならぬ。先づ三乗を以て引導して後、大乘を以て度脫するに、虛妄の咎あるべき事かはと諭された。

(信解品四)須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連の四大聲聞、舍利弗に授記せら

るゝを見て、求めずして無量の珍寶を手にするを感じ、長者窮子の譬喩を以て各自の喜を表白した。其意は我等昔より眞の佛子なりしに、唯小法を樂しみしこそあさましけれ。若し大法を樂しまば、佛必らず、大乘法を説きたまひしならんといふにある。(藥草喩品五)佛諸大弟子に對して等しく一雨の霑ほす所なれども、草木の大小に従ひ、受くる所に相違ありといふ譬喩によりて、佛説の歸する所は、一切種智に至らしめんが爲の一相一味なれども、衆生の根性に隨ひて、受くる所に相違あるを述べられた。(授記品六)四大聲聞の憂懼を去らんが爲に、順次に授記し、以て將來成佛の保證を與へられた。(化城喩品七)過去の大通智勝如來の説ける妙法蓮華と名くる大乘經を、その十六王子が出家し、受持し、分別し、説法し、今現に十方世界に於て成佛しつゝある因縁を述べ、過去以來の教化を蒙れる諸比丘の猶聲聞地にあるは、佛道の難入なるが爲のみとて、導者が化城の方便によりて中路に退轉せんとする從屬を、五百由旬の遠きに導ける例を説き、以て二乗の涅槃が中路の止息處に過ぎざる意を述べられた。(五百弟子授記品八)富樓那、憍陳如、三迦葉等を始とせる五百弟子に授記するや、皆喜び且つ悔い、衣裏寶珠の

譬を以て、長く忘れつゝありし菩提心を、佛説にあひて覺悟せる歡喜を述べた。

(學無學品九)侍者阿難及び佛子羅睺羅に授記し、次て學無學の二千人に授記せられた。(法師品十)藥王菩薩以下の八萬の居士に對して、諸佛秘要の藏たる此經を弘通するの功德を述べ、且つ現在だも怨嫉多き此經を、滅後に於て他に説かんとする眞の法師は、如來の室に入り、如來の衣を著け、如來の座に坐してすべしと告げられた。大慈悲心を起し、柔和忍辱の相を爲し、一切法空に住して爲すべしといふのである。

以上は靈山に於ける會座で、主要な對告衆は悉く聲聞である。この後は多寶塔の踊出といふ奇瑞によりて、光景全く一變するから、以上の十品を以て一段落とし、之を述門と見べきである。古來の如く、前十四品を述門とし、後十四品を本門とするのは、餘りに機械的に過ぐるやに考へらるゝ。更に此十品中に於て、中の八品が第一次的のもので、彌勒文殊二菩薩の現はるゝ序品と藥王菩薩の現はるゝ最後の法師品とは、二次的のものであらう。

(見寶塔品十一)時に七寶の塔が、地より踊出して、空中に住まり、塔中に大音聲あり

て、經説の眞實なるを保證した。大樂説菩薩、その因縁を問ふや、佛は、この塔中に多寶如來が在る。これ十方國土に於て此經を説く所に現はれて、之が證明を爲し、四衆八部の疑を除かんとのかねての誓願に應じて出現せられたのであるとて、白毫光を以て十方諸佛界を照し、無數の分身佛を來集せしめて後、虚空に上り右指を以て塔を開けば、師子座に入定せる多寶如來、半座を分ちて釋尊に與へられた。釋尊塔中に入り、二佛同坐の後、大音を以て宣言す、如來久しからずして、入滅すべし。滅後、この經を廣宣せんとするものあらば、之を付囑すべし。持し難き此經を、暫くの間だも持するものあらば、これ勇猛なり、精進なり、持戒なり、無上道を得たるなり云云。(提婆品十二)我此經を求めんが爲に、多劫の間國王となり、此經を説く一仙人に給仕供養して怠らなんだ。今日の提婆は即ちその仙人である。提婆は斯の如く我が善知識であるから、將來成佛すべく、また此品を聞きて信ぜんものは、佛前に於て蓮華より化生すべきである。時に多寶世界の智積菩薩、本土に還らんとするや、佛、文殊を召して問答せしむ。文殊、此經に速成の利益ありとて、八歳の龍女が、刹那に菩提心を發して能く菩提に至れるを述べれば

智積は釋尊の難行を擧げて之を難じた。時に龍女の忽然として前に現ずるを見て、舍利弗は法器にあらざる女身の速成を難ずるや、龍女一寶珠を佛に上り、佛の納受し終らざるに先ち、忽然變じて男子となり、南方無垢世界に至りて、成佛説法したので、衆默然として之を信受した。(勸持品十三)菩薩聲聞、學無學、悉く此土に於て、又は他土に於て、此經を廣布すべきを願ひ、佛はまた六千の比丘尼に對して、將來成佛の記を授けられた。(安樂行品十四)文殊の間に應じて、後の惡世に於て、此經を説かんとせば、身、口、意、誓願の四法に於て安住する所あるべきを告げ、猶此經は最後の賜與で、今日始めて宣説する所なるを告げられた。

(從地踊出品十五)時に無量の菩薩踊出し、寶塔に詣りて二佛を禮し、其中の上行、無邊行、淨行、安立行の四菩薩、導師となりて釋尊を問訊するや、彌勒いづこより來れるかを問へば、佛はこれ皆所化の弟子で、下方世界の空中より來たのであると答へられた。彌勒は心に、成佛以來四十餘年の釋尊に、如何にしてこの無量の弟子ありやとの疑を起した。(壽量品十六)佛告く、我れ成佛以來實に無量劫の間常に此娑婆世界に於て、又他方無數の國に於て、説法教化すれども、薄福のものに、難遭

渴仰の想あらしめんが爲に、八相成道の形を示すのみとて、醫師病兒の譬を説かれた。偈中の於阿僧祇劫常在靈鷲山は、法華本門久遠實成の佛として、此經の生命である。(分別功德品十七)彌勒に向ひ、佛壽の長遠なるを聞き、深心に信解するものは、佛の常に靈山に在るを見るべく、且つ其功德の無量なるべきを説かれた。(隨喜功德品十八)續いて彌勒に對して、此經を隨喜する福德を説かれた。(法師功德品十九)常精進菩薩に對して、此經を受持、讀誦、解說、書寫するもの、六根清淨なるべきを、世間的及び出世間的に互りて、詳かに説かれた。(常不輕菩薩品二十)過去に常不輕なる菩薩比丘あり、何等の人をも禮拜するを事とせしが、臨終に法華經を聞きて受持し、以て成佛せる因縁を、得大勢菩薩に向つて説かれ、最後にその菩薩比丘とは我身であつたと告げられた。(神力品廿一)佛大神力を現じ、十方世界を光照して、上行等の菩薩に向ひ、斯の如き無量の神力を現じて、無量劫の間、此經の功德を説くも、猶盡す能はずといひ、猶一心に之を受持し、此經所在の所に起塔供養すべきを告げられた。(囑累品二十二)佛塔中の寶座を起ちて、右手を以て無量の菩薩の頂を摩し、この難得の深法を附囑すべければ、一心に之を流布すべ

し。この外に佛恩に報ゆるの法なしと告げられ、菩薩衆大に喜んで教命を奉じたので、佛は、十方來の分身佛を本土に還らしめ、また多寶佛塔をも故の如く下方世界に還らしめた。

以上の十二品は、虚空會と名けらるゝもので、前の十品に比すれば、全然其光景を一變して居る。對告衆は悉く菩薩のみで、前に聲聞を對手に、三一權實、授記作佛を説かれたものとは、舞臺も異り、其性質も異なる。此十二品は寶塔の出現を以て始まり、その還沒に終るので、中心は、壽量品にある。壽量品の釋尊は、迦毘羅城に應現せる八相成道の應身佛にあらずして、常に靈鷲山に在る無量壽の法身佛である。これ即ち釋尊の本地を開顯したもので、前の迹門に對して、本門といふべく、前の迹門の前後に、序結として加へられた、序品、法師品と同列に位すべきものと思ふ。この中に於て、唯一つ異例とすべきは、提婆品である。その前半には提婆の授記作佛を説き、後半には龍女速成を説き、こゝに舍利弗も現はれて居る。内容の上から見るに、前後に連絡を有せぬ。思ふに、この一品は、全體の結構に後れ、開會の精神の普遍するに至りて、獨立に成立し、單行しつゝありしが、時を得て寶塔品に附隨せられたも

のと思はる。之を缺きし什譯に、却つて古色がある様に思ふ。又西晉に、提婆品の少分別譯たる薩曇分陀利經の存するは、獨立單行した一證とも見らるゝ。本門を第二次とすれば、これは第三次又は第四次のものであらう。

(藥王本事品廿三)佛、宿王華菩薩の間に對して、藥王菩薩の本事を説いて、藥王はもと日月燈明德如來の所に於て、法華經を聞き、現一切色身三昧を得、佛滅の後、其付囑を受けて、燃臂以て佛舍利を供養せる一切喜見菩薩であるといはれ、次に此經の最勝なると、此品の利益とを説き、この品を宿王華に付囑せられた。(妙音品廿四)靈山に突然蓮華が現はれたので、文殊その故を佛に問へば、東方淨光莊嚴世界の妙音菩薩が、文殊、藥上、藥王、勇施、宿王華、上行、意莊嚴王の諸菩薩と會見し、及び佛陀供養の爲に、こゝに至らんとて、先づこの蓮華を化作したとの事である。やがて、諸菩薩に圍繞せられた妙音が、空中より來りて二佛を問訊し終るや、華德菩薩妙音の神力の所因を問うたので、佛はその本事を説き、今や現一切色身三昧の力によりて、三十七凡聖身を現じ、此經の流布に力めつゝある事を告げられた。(普門品廿五)無盡意菩薩が、觀世音菩薩の名稱を問うたので、佛之に對して、此名の起

因と、此の名を持つる功德の廣大なるを説き、又此菩薩が衆生利益の方便として、此娑婆世界に三十三身を現ずるを説くや、無盡意渴仰に堪へずして、瓔珞を脱して之を觀音に捧げた、觀音之を受けて、二分と爲し、一分は釋尊に、他の一部は多寶塔に奉つた。最後に持地菩薩、此品の功德の廣大なる事を讚嘆した。(陀羅尼品廿六)藥王、勇施の二菩薩、毘沙門、持國の二天王、及び鬼子母、十羅刹女が、各々咒文を以て、此經の行者を擁護せんを誓ひ、佛の讚嘆を得た。(妙莊嚴王品廿七)過去に邪見な妙莊嚴王といふがあり、淨藏、淨眼といふ二王子が、法華經を聞いて、心眼開け、父を引導して、成佛の記を受けしむるに至つた本事を説かれた後、その王とは今の華德菩薩で、二王子とは藥王、藥上二菩薩である。この二菩薩の名を知るものは、人天共に禮拜すべしと結ばれた。(普賢勸發品廿八)普賢菩薩、東方世界より來りて、後の五百歳、濁惡世の中に於て、六牙の白象に乗りて、此經の行者を守護し、佛滅の後、此經を閻浮提内に流布せしめ、斷絶なからしむべきを誓ひ、佛の讚嘆を得た。佛は猶頗る詳密に、此經受持の利益を説かれた。

最後の六品は、什譯は勿論梵本會座にもなき宿王華、藥上、普賢の如き諸菩薩を活動

せしむる所から見ても、後の追加であるらしい。是等六品が下表の如く什譯にては、皆囑累品の後に置かれた所に、最も暗示的な何物かを含む。護譯は囑累品を最後に廻したが、梵本及び添品に至つては、更に陀羅尼品の位置にも變更を加へた。是等六品の内容を見るに、品々皆別々のもので、必ずしも本門に附随せねばならぬ關係を有するとも見えぬ。殊に藥王品の如きは、その品自身の中に序、正、流通の三分を完備し、單行の時あつた事を極めて能く説明して居る。而して囑累品で本土に還渡した多寶塔が、妙音品及び普門品に來りて、再び現はれて居るといふ事は、頗る全體の調和を破る。これが護譯以後のものをして、囑累品を最後に廻さしめた理由であらうと思ふ。若し然りとせば、什譯の原本が西域を経て龜茲に來たのは、頗る早い時の事だ、この原本が東來した後に、西域の原本は更に(一)提婆品を加へた事と(二)囑累品の

梵本	添品	護譯	什譯
梵本	21. 陀羅尼	21. 藥王	22. 囑累
添品に同じ	22. 藥妙	22. 妙普	23. 藥妙
	23. 普莊	23. 普總	24. 普陀
	24. 普莊	24. 淨普	25. 陀莊
	25. 普囑	25. 淨普	26. 莊普
	26. 普囑	26. 淨普	27. 普
	27. 囑	27. 淨普	28. 普

位置を換へた事と、二個の變化を受けたのである。什譯よりも、現存梵本の新しい證據は、(一)後の六品に活動する菩薩の中で、無盡意、持地、華徳の三者を、梵本の會座に來りて始めて加へてある事、(二)普門品の重偈中に、阿彌陀を追説してある事の如きは、屈強のものであらう。果して什譯が最古で、梵本が最新ならば、他の二者は恰も其間に立ちて、橋梁の役目を爲すのである。

靈山會

- 一、序品—彌勒菩薩、文殊菩薩
- 二、方便至學、無學八品—舍利弗、須菩提、迦旃延、大迦葉、大目連、富婁那、阿若、憍陳如等、阿難、羅云、
- 三、法師品—藥王菩薩

虛空會

- 一、提婆品—多寶世界の智積菩薩、文殊菩薩、舍利弗、龍女、提婆
- 二、勸持品—藥王菩薩、大樂說菩薩、摩訶波闍波提比丘尼、耶輸陀羅比丘尼等
- 三、他十品—大樂說菩薩、文殊菩薩、下方世界の上行、無邊行、淨行、安立行四



菩薩、彌勒菩薩、常精進菩薩、得大勢菩薩

後六品—宿王華菩薩、東方世界の妙音菩薩、文殊菩薩、藥上菩薩、藥王菩薩、勇施菩薩

上行意菩薩、無盡意菩薩、觀世音菩薩、持地菩薩、華德菩薩、光明莊嚴相菩薩

東方世界の普賢菩薩

斯くて、經の前半に聲聞を對手として、一乘眞實、三乘方便、授記作佛を説く所は、正しく經の主張點で、他經に異なる特色と見るべき部分である。後半分はこれに證誠と權威とを添へたもので、これあるによりて前半の説明に深義を生ぜしむる。前が間口ならば後は奥行で、舞臺が一變して居る。一は現實の靈山なり、他は理想の空中なり、一は應身佛なり、他は法身佛なり、一は聲聞に對し、他は菩薩に對し、一は顯教的なり、他は神秘的なり、一は表面なり、他は裏面なり、前後對照の妙を極めて、始めて首尾完結すといふべく、斯くまで説相の鮮かに二面を有するものはない。文面上から見ただけでも、趣味深き經典で、就中普門品の如きは、人心の奥底に響く力を有する事、一切經中屈指のものである。

他經との關係を明了に判定せしむる材料は、甚だ乏しい。(一)分別功德品に、五波

羅蜜を行ずる功德に勝るといひて、殊に般若波羅蜜を除くと加言せるは、當然、般若經を豫想せしむる。(二)提婆品の提婆の開會は、大乘十法經に何等かの關係を有すべく(三)無盡意菩薩の活動は、大集經の或部分と、此一品との關係問題を生ぜしめ(四)普賢の行に結歸する所に、少くも最後の一品と、華嚴經との關係を想ひ浮べしむる。

(五)阿彌陀佛の本生を大通智勝如來に關聯せしめ、此經を如説修行する女人の極樂往生を説く説相は、共に阿彌陀佛信仰の純熟せざるを示すべく、梵本に追加せられたる普門品重偈中の阿彌陀佛は、たしかに、無量壽經と不離の關係を彷彿せしむる。方便品中の佛塔、佛像、舍利供養の記事や、藥王、普賢二品の後の五百歳の語や、常不輕品の像法の語の如きは、此經成立の年代に幾分の光明を與へはしまいかと思ふ。

此經の註釋は到底枚擧する邊がない。印度に於て早く既に世親の「憂波提舍」の存する事は尤も注意すべく、支那に來りて隋の智者大師が「玄義」文句「止觀」の三大部六十卷を大成せる事は、更に注意すべきである。此外に早きは梁光宅の「義記」八卷、陳慧思の「安樂行義」一卷あり。次に隋の吉藏の「義疏」十三卷。「遊意」二卷。「統略」六卷。「玄論」十卷。唐の窺基の「玄贊」十卷。唐湛然の「大意」一卷あり。後に元徐行善の「科程」

十卷。明一如の「新註」十二卷。智旭の「會義」十六卷。德清の「通義」七卷あり。我邦には早く聖徳太子の「義疏」がある。若し夫れ三大部に對する末疏や、其他の註釋の多き一々挙げ得べきでない。

繕寫原本少くも十種あり英佛露印日諸國に珍藏せらる。南條博士は、本年ケルン老儒と協力して之を露國より出版せられた。ピルヌフの佛譯、ケルンの英譯、南條博士の和譯のある事も、研究者の洩すべからざる所である。

### 九、大華嚴經

*Avatamsaka (Tibet) or Gaṇḍa-vyūha (Nepal)*

部分の翻譯は、後漢の支識以後、即ち譯經當初から、幾代に亘りて現はれたが、全部の翻譯としては、次の二回だけである。

大方廣佛華嚴經六十卷—沙門支法領、從于闐(Khotan)得梵本來。東晉北天竺佛駄跋陀羅 (Buddhabhadra 覺賢) 義熙十四年—元熙二年(四一八—四二〇)、於揚都道場寺出。法業筆受。

同、八十卷—于闐國實叉難陀 (Sikṣinanda 學喜) 證聖元年三月十四日、於東都大内大

遍空寺、譯、天后親受筆削、至聖曆二年十月八日、於佛授記寺功畢(六九五—六九九)

前者は七處八會に分たれ、後者は普光明殿の十定品を加へて、七處九會とせられて居る。支那佛教の精華として、天台宗と並び立つ華嚴宗は、前者によつて成立したものである。前二者の外に、猶四十卷の華嚴經がある。これは最後の入法界品の異譯で、その梵本は南印烏荼 (Uṭṭa) 國王の献せるもので、闍賓の三藏般若 (Pañcāśā) が西曆七九六—七九八の間に譯せる所である。其の中に、前者になき緣起的教義を加へて居るのは、佛教思想の發展上より、大に注目すべき所のものである。

今、八十卷本につきて、七處(入三、天四)九會の三十九品を表出すれば次の如くである。

會數、處名	品名	卷數	說者	義(五周因果)	文(五分)
○第一會	(一) 世主妙嚴	五卷	普賢	教起因緣分	
	(二) 如來現相	一卷	普賢		
	(三) 普現三昧	半卷	普賢		

佛典の解説

摩竭陀國 (四) 世界成就半卷 ——— 普賢  
 善提場六 (五) 華藏世界三卷 ——— 普賢  
 品十一卷 (六) 毘盧遮那一卷 ——— 普賢

所信因果 ——— 學果勸樂生信分

○第二會  
 善提場中  
 普光明殿  
 六品四卷  
 (七) 如來名號半卷 ——— 文殊  
 (八) 四聖諦半卷 ——— 文殊  
 (九) 光明覺半卷 ——— 文殊  
 (十) 菩薩問明半卷 ——— 文殊  
 (十一) 淨行半卷 ——— 文殊  
 (十二) 賢首一卷半 ——— 文殊  
賢首說問

○第三會  
 初利天宮  
 六品三卷  
 (十三) 昇須彌山 ——— 法慧  
 (十四) 須彌上偈讚一卷 ——— 法慧  
 (十五) 住 ——— 法慧  
 (十六) 梵行半卷 ——— 法慧  
 (十七) 初發心功德半卷 ——— 法慧  
法慧說問

初諸來海會菩薩作是思惟云  
 何是諸佛地諸佛境界諸佛神  
 力諸佛所行諸佛神通諸佛無  
 所畏諸佛三昧諸佛無能攝取  
 諸佛眼耳鼻舌身意諸佛身光  
 諸佛光明諸佛聲諸佛智願佛  
 世尊開示演說又諸佛皆說世  
 界海衆生海佛海佛波羅蜜海  
 佛解脫海佛變化海佛演說海  
 佛名號海佛壽量海及一切菩  
 薩誓願海發趣海助道海乘海

○第四會  
 夜摩天宮  
 四品三卷  
 (十八) 昇兜率天一卷 ——— 功德林  
 (十九) 十無盡藏一卷 ——— 功德林  
 (二十) 行一卷 ——— 功德林  
 (二十一) 夜摩宮中偈讚半卷 ——— 功德林

○第五會  
 兜率天宮  
 三品二卷  
 (二十二) 兜率宮中偈讚一卷 ——— 金剛幢  
 (二十三) 十迴向十卷 ——— 金剛幢  
 (二十四) 十地六卷 ——— 金剛幢  
 (二十五) 十定四卷 ——— 普賢  
 (二十六) 十通半卷 ——— 普賢  
 (二十七) 十忍半卷 ——— 普賢  
 (二十八) 阿僧祇 ——— 佛心  
 (二十九) 壽量一卷 ——— 佛心  
佛心說問

佛典の解説

因別差

出離海神通海波羅蜜海一切  
 菩薩地海一切菩薩智海如來  
 現相品十住十行十迴向十藏  
 十地十願十定十通十頂爲成  
 就一切菩薩故令如來種性不  
 斷故演說一切諸法故永斷一  
 切疑網故願佛亦爲我等如是  
 而說如來名號品  
 九會所說共答此問。

修因感果生解分

○第七會 菩薩住處

心王

普光明殿  
十一品、十  
三卷

(卅三) 佛不思議法、二卷

青蓮華問  
蓮華藏說  
差

(卅四) 如來十身海半卷

普賢別  
果

(卅五) 如來隨好光明功德、半卷

寶手問  
陀說

(卅六) 普賢行、一卷

普賢平等因

(卅七) 如來出現三卷

妙德問  
普賢說  
平等果

○第八會、普

光明殿一

普賢問—成就因果—託法進修成行分

○第九會給品

入法果、廿二卷

善財求法因緣—證入因果—依人入證—成德分

孤獨園

六十華嚴は、十定品を脱して居るから、十地品以後、如來出現品に至るまでが

悉く第六會の他化天宮の説法となつて居るのである。

諸品に對する異譯を掲ぐれば、次の如き多數がある。

名號品—後漢(一四七或一六四—一八六)支謙の兜沙經。

淨行品—吳支謙(二二三—二五三)の菩薩本業經。西晉誦道真(二八〇三—二二)

の諸菩薩求佛本業經

十住品—西晉竺法護(二九一)の菩薩十住行道品經。東晉祇多蜜(三一七—四

二〇)の菩薩十住經。

十地品—西晉竺法護の漸備一切智德經。姚秦羅什及佛陀耶舍(四〇二—四

一一)の十住經。

十定品—西晉竺法護の等目菩薩所問三昧經。

如來出現品及十忍品—西晉竺法護の如來興顯經。

壽量品—唐玄奘の顯無邊佛土功德經。

離世間品—西晉竺法護の度世品經。

入法界品—西秦聖賢(三八八—四〇七)の羅摩迦經。

此經或は不思議解説とも名けられ、或は雜華ともいはるゝ。佛成道三七日の間に於て、海印三昧に入りて、毘盧遮那法界身を現じ、蓮華藏世界に住して、文殊、普賢等の大機に對し、説かれた所の根本法輪で、佛滅後龍宮に隠れ、龍樹によりて、再び世に現はれた。これに上中下の三本ありしが、上中二本は廣博にして、到底凡夫の受持すべきにあらねば、龍樹はその下本をのみ將來したと傳へられて居る。蓋し龍は人

間に勝りて、(一)長壽(二)身大三宮殿の三長處を有する物と信ぜられて居たから、龍宮に保存せられたといふのは、乃ち人界以上の世界に、長年月の間隠没して居たといふ意味であらう。これを根本法輪といふのは、時間の上からは、最初であり、義理の上からは、一代を該羅するによる。教主を毘盧遮那法身といふのは、經の初に、智入三世悉皆平等、其身充滿一切世間、其音普順十方國土——身恒徧坐一切道場、菩薩衆中、威光赫奕——而恒示生諸佛國土、無邊色相、圓滿光明、徧周法界、等無差別——一々毛端悉能容受一切世界、而無障礙、各現無量神通之力、教化調伏一切衆生、身徧十方、而無來往——とあるによりても知らるゝ。一心が法界、法界が佛身たる意味の佛であるから、經中の「心佛衆生、是三無差別」といふ有名な寸鐵的提示に甚深な意味を生じて來る。さて、又佛陀は說法の前に、必ず入定して、所被の種類と、能被の教法とを觀するのを規則とするが、この經は、一會々々には特殊の三昧があるけれども、全體としては、海印三昧に入りてせられたものといはるゝ。海印と、いふのは、賢首品に、衆生形相各不同、行業音聲亦無量、如是一切皆能現、海印三昧威神力とあるに徴すれば、此定中に於て、一代の說法も、度すべき機根も、一時に顯現したといふ上より、起れる名

である。而もこの說法は、出定後語にあらずして入定中のものである。經に菩提道場を離れずして、天宮に昇られたといふのは、入定を意味するのである。之を成道三七日の說法といふが、證じつむれば、菩提樹下、成道即時の自内證を開顯したといふべきである。「法華經」は最後の說法の上から一代佛教を統一したものであるが、此經は最初の說法、一步を進むれば、說法以前の佛陀の自覺の中に、一代佛教を該羅せしめたものである。前の表に見ゆる如く、經の説者は第一會は普賢、第二會は文殊、賢首、第三會は法慧、第四會は功德林、第五會は金剛幢、第六會は金剛藏、第七會は普賢、心王等、第八會は普賢で、佛説の直接の說法としては、第七會の阿僧祇と如來隨好光明功德の二品のみで、一篇の上から見れば、重要でもなく、また甚だ簡單なものである。殆んど普賢に始まりて、普賢に終るともいふべき、此經の理想人格は勿論普賢である。その普賢とは、毗盧遮那法界身の因位に外ならぬ。換言すれば、完全なる行願の擬人である。法界身を基礎とする普賢が、經の理想であるのは、法界悟入の方法たる行願を説くを趣旨としたが爲である。文殊の勸發と普賢の行願とによりて、法界に證入せる善財童子の因縁は、やがて經の縮寫である。普賢の說法

も、文殊の説法も、その他何菩薩の説法も、悉く其背後に法界身を負はぬものはない。一度、經の説相を見るものは、經中に活動する一切の事件が、悉く法界身の活動に外ならぬ事を、容易に認むるであらう。これが佛陀の説法としては、單に短かい二品あるのみなるに關らず、全篇悉く法身の説法とせらるゝ所以である。説法といふよりも、寧ろ成道即時の佛陀の自證を映寫したものである。一代佛教は、悉くこの自證海中より流れ出てた、波瀾に外ならぬ。

餘りに冗漫とはなるが、順序上、三十九品の梗概を述べて、更にその中の十地及び入法界の二品に就きて、少し立ち入りて述べて見たいと思ふ。

○第一會(世主妙嚴品)世尊、菩提道場に於て、始めて正覺を成じ、遮那の妙體たる徧法界身を現じ、太虚に等しき依正の莊嚴を顯はす。會座には、三世間の主悉く雲集す。正覺世間主としては、十佛世界の菩薩、器世間主としては、城、地、山、林、藥、稼、河、海、水、風、空、方、夜、晝を主る神、衆生世間の主としては、天、龍、夜叉、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、鳩槃荼等の主、皆各々無量の眷屬と共に、法王の成覺を慶賀し、その上首同時に各々十頌を以て讚嘆し、また師子座の莊嚴具中より、各微塵數の菩薩を出し

これまた各々頌を以て讚嘆し、不思議の供養雲も現はる。十方一切の法海界またすべて是の如し。(如來現相品)佛齒間より光を放ち、光りの中に無邊の刹土、無邊の佛菩薩を現じて、一切世界の一切衆生、何人も菩提心を發せば、如來の家に生るべきを覺悟せしめ、又眉間より光を放ち、十方世界を照し、無邊の莊嚴を顯はし、無邊の菩薩を光の中に現す。諸菩薩皆法身佛の如何なるかを思惟するや、佛前に大蓮華出現す。佛の毫相中より出現せる一切法勝音菩薩、此華上に坐し、十方の菩薩と共に、佛を供養し、讚嘆す。(普賢三昧品)普賢菩薩、佛前に於て、蓮華藏師子の座に坐し、一切諸毗盧遮那如來藏身三昧に入り、佛の平等性にして、能く法界に於て、衆の影像を示すを觀ず。十方諸佛、現前讚嘆し、摩頂を與ふれば、三昧より起つ。佛毛孔より光を放ちて頌讚し、一切菩薩また皆讚誦す。(世界成就品)普賢佛の神力を以て、偏ねく、世界、衆生、諸佛、法界、衆生業、衆生根欲、諸佛法輪、三世、如來願力、如來神變を觀察し、また世界海の起具因緣、所依住、形狀、體法、莊嚴、清淨、佛出興、劫住、劫轉變、差別、無差別門を説く。(華藏世界品)毗盧遮那如來の因中に於て、菩薩行を修せる時の大願によりて、感得せる此華藏世界は、微塵數の風輪によりて持せら

る、香水海中の大蓮華中に住在し、四方均平、清淨堅固にして、金剛輪山に周匝圍繞せられ、池海衆樹、各區別ありとし、それより、此世界の狀況を詳説す。普賢の説く所。(毘盧遮那品)過去の喜見善慧王の太子たる大威光が、一切功德山須彌勝雲如來の説法によりて、勝益を得、佛滅の後、第二、第三、第四の佛に親近して證道せる因縁を述べて、以て今の毘盧遮那如來出世の法も、之に異らざるを示す。

以上の六品は如來の十種の法界無盡身雲、二十重華藏莊嚴刹海、依正二報難思の果を擧揚し、聞いて信を生ぜしめんとするもので、四分の中の信分、五週の中の所信因果と分科せらるゝものである。以上、經の説相の大概を示さんが爲に、割合に長い行數を取つたが、以下は成るべく簡明ならしめたいと思ふ。

○第二會(如來名號品)佛菩提道場、普光明殿にあり、神通を以て、十色世界の十智佛所の文殊、智首、賢首等の十菩薩を集む。東方世界より至れる文殊菩薩、一切菩薩の爲に、佛の名號差別を説く。(四聖諦品)文殊、次いで四諦の名號差別を説く。此娑婆世界中の四諦に四種あり、一種に各十種の名あり、各々不同なりとて、之を並説し、十方世界もまた是の如しといふ。(光明覺品)世尊、兩足より光明を放ちて、三

千世界を照せば、十方に文殊等の十大菩薩あり、一切處の文殊、各々その佛の處に於て、偈を説く。(問明品)文殊、他菩薩と問答して、心性一なるに、何が故に種々の差別相あるか、佛は一道によりて出離せしむるに、何が故に教義に差別あるか等の法要を發明す。(淨行品)智首の問によりて、文殊、詳に菩薩たるものは、日常生活の事々物々につきて、大願を發し、以て其行を淨うすべきを説く。有名なる歸三寶の偈は、この中にあり。(賢首品)文殊の問によりて、賢首、長偈を以て信心の功德を説く。有名なる信爲道元功德母の偈は、此中にあり。

○第三會(昇須彌山頂品)時に世尊、菩提樹下を離れずして、須彌の頂上、帝釋殿に上昇す。帝釋十頌を以て讚す。(須彌山頂偈讚品)十方より法慧、精進慧等の十慧菩薩、百刹塵數外の十華世界、十月佛所より集會す。佛兩足指より光を放つ。十慧菩薩各々偈を以て佛徳を嘆ず。(十住品)法慧、佛前に於て、無量方便三昧に入り、十方諸佛の摩頂によりて、三昧より覺めて、發心住、乃至灌頂住等の菩薩の十種の住處を説く。これ菩薩の修行階級たる四十一位の初である。十方より來れる菩薩、その證を作す。(梵行品)正念天子の問によりて、法慧、梵行を修せんとせば、身、身

業等の十法を所縁とし、觀察して、無上業を行じ、觀行相應じて、諸法中に於て、二解を生ぜざれば、一切佛法疾く現前するを得、初發心の時、即ち阿耨菩提を得、一切法即ち心の自性なるを知り、他悟によらずして、慧身を成就するを説く。(初發心功德品)天帝釋の問によりて、法慧佛の威力を承けて、初發心の功德の廣大なること、淨持五戒の功德に勝ること、算數の及ぶ所にあらざるを説く。(明法品)精進慧の問によりて、法慧發心後に於て、菩薩の修すべき住不放逸によりて得らるゝ十種の清淨法を説く。

○第四會(昇夜摩天宮品)時に世尊菩提樹下を離れず、また須彌山頂を離れずして、夜摩天宮寶莊嚴殿に向ふ。夜摩天十偈を以て佛徳を讚す。(夜摩天宮中偈讚品)功德林を首とする十方の大菩薩、十慧世界の十眼佛所より來集す。佛兩足上より光を放つ。十林菩薩各々偈讚す。(十行品)功德林佛前に於て、菩薩善思惟三昧に入り、諸佛の摩頂によりて、三昧より起ち、諸菩薩に向ひ、歡喜行乃至眞實行等の十種行を説く。(十無盡藏品)切徳林諸菩薩に對して、信藏乃至辯藏等の十種藏を説く。

○第五會(昇兜率天宮品)世尊菩提樹下及び須彌頂及び夜摩天宮を離れずして、兜率天宮一切妙寶所莊嚴殿に詣る。天王無限の嚴辦なる供養を捧げて後、偈讚す。(兜率宮中偈讚品)金剛幢等の十幢菩薩、十妙世界の十幢佛所より來集す。佛兩膝輪より光を放つや、十幢菩薩皆偈讚す。(十廻向品)金剛幢佛前に於て菩薩智光三昧に入り、起ちて救護一切衆生相廻向等の十廻向を説く。此品十一品に亘り、非常に長く、一々廻向の内に條則大願の廣多無數なるを、長行によりて、また二百四十六偈によりて、重説し、周徧十方の在會菩薩衆、これが證を作す。

○第六會(十地品)時に世尊、他化自在王宮、摩尼寶藏殿にあり。金剛藏、蓮華藏等の三十八藏菩薩及び解脱月菩薩等、雲集す。金剛藏佛前に於て、菩薩大智慧光明三昧に入り、諸佛の摩頂によりて、三昧より起ち、十地の名を説いて默然たり。解脱月三論し、在會菩薩また偈を以て請ふ。佛眉間光を放ち、十方を照せば、十方佛また眉間光を放ちて、此會を照し、虛空中に於て、大光明雲網臺を成し、頌を出して勸む。即ち十波羅蜜に配して、十地を説く。十方より同名の菩薩來りて、これを證明す。十地とは歡喜地乃至法雲地なり。



○第七會(十定品)世尊、菩提場中、普光明殿にあり、刹那際諸佛三昧に入る。心王、普眼等の十方の諸菩薩來集す。普眼、佛に向ひ、普賢の三昧を問ふ。佛、直に普賢に問はしむ。然るに法界藏を身とする普賢の住處甚深にして見るを得ず、佛の教に従ひ、大願を發し、南無一切諸佛、南無普賢菩薩と三稱せる後、初めて現身せるを見る。佛自ら十大三昧の名を唱へ、普賢をして、これを説かしむ。普光大三昧、乃至、無礙輪大三昧等是なり。(十通品)普賢、進んで他心通、乃至、得智一切三世無礙通等の十種通を説く。(十忍品)進んで音聲忍、乃至、如空忍等の十種忍を説く。(阿僧祇品)心王の問によりて、佛自ら算法名數を説く。この名數は四十華嚴經の第九卷にあるものと同様なり。(壽量品)心王、諸佛世界の一日一夜を説き、また最後の勝蓮華世界の中に、普賢、及同行菩薩の充滿するを説く。(諸菩薩住處品)心王、諸菩薩の住處を説く。中に、東北方の清涼山に文殊ありといふ。(佛不思議法品)乘會心に不思議の法を思ふ。佛加持して青蓮華をして、蓮華藏に向ひ、佛所住の法たる諸佛の國土、本願、種姓、出現、身、音聲、智慧自在、無礙、解脫を説かしむ。(如來十身海品)普賢、諸菩薩に向ひ、如來の九十七種大人相を説く。(如來隨好光明功德品)佛寶

手菩薩に向ひ、菩薩の下生時に放つ大光明の功德を説く。地獄の衆も、この光を蒙れば、天に生れ、天樂を聞き、乃至十地を證する等是なり。(如來出現品)佛眉間より大光明を放つ。諸菩薩必らず甚深の大法あるべきを思ふ。その光明、如來性起妙德菩薩の頂に入るや、菩薩起ちて、佛を偈讚して後、普賢に向ひ、その因縁を問ふ。佛また口より光明を放ちて、普賢の口に入る。普賢即ち諸菩薩に向ひ、詳に如來出現の因縁を説き、また佛陀を説き、勸持の頌を説く。

如上の三十一品(四十一卷)は、四分中の解分、五周因果の中では、差別の因果(二十九品)及平等の因果(二品)を説いたものである。因とは六位の因行、果とは十身の佛果にして以て修證についての勝解を生ぜしむるを主旨とする。

○第八會離世間品、佛、普光明殿にあり、十方の菩薩來會す。普慧菩薩普賢に向ひ、菩薩の依、奇特想行、善知識、勤精進、心得安隱、成就衆生、戒、自知受記、入菩薩、入如來等の二百の問を爲す。これに對して、普賢は二千の答を與へた。この品、七章に亘り、頗る長く、前來の所説と幾多の重複あり。

こは四分中の中行分、五周因果中の成就因果で、因果に對する解を生じ終りて、法

に託して行を爲す時は、一行の中に六位を頓修すべきを知らしめたものである。

○第九會(入法界品)佛給孤獨園にあり、文殊、佛を禮して佛前を去りて、南行して福城の東に至りて止住說法す。善財童子、これを聞きて發心し、文殊の教によりて、善知識を求めて天下を周流し、遂に毘盧遮那如來前の普賢の化導にあひ、その行願によりて法界に悟入す。

これ前八會の所説を實例によりて説明したもので、廿一卷に分れ、詳説を極めて居る。四分の中の證分、五周因果の中の證入因果とせらるゝもので、前大行を具する以上は、見聞する所證入せざるなきを、人に依りて示したものである。

一篇の詮する所信、解、行、證の四を出てぬが、その所信、所解、所行、所證たるものが何かといへば、自の真心に外ならぬ。首尾本末を該羅していふ時は、初發心者便成正覺にせよ、五十二位の階級にせよ、頓漸共に一心を指し、性海に歸するのである。一心は法界、法界は佛身であるから、入法界が一篇の究竟で、その方便として、普賢の行願を提示したのである。全篇どこを見ても、毘盧遮那法界身中の波瀾と見えぬ所がないと同時に、普賢に始まりて普賢に終るまでに因行を説くを眼目とする。滿果

の毘盧遮那と、因位の智慧文殊、及行願普賢とを以て、此經の三尊とするが、智慧は、般若經を始終し、行願は此經を徹貫する。

九會の中で、その中心たるものは、第六會の十地品と第九會の入法界品である。而して第三會以下第五會までは、殆んど同一徹の形式を有し、十地品を開いたものとする見事が出来る。發心正覺の頓悟に絶対の價值があるけれども、其後の進趣には十重無盡の徑路がある。無盡の徑路より見れば、十地にても事足るべく、而もまた五十二位にても盡るといへぬ。十地を開いて五十二位とした典型は、第九會の善財童子の五十三參にありと思ふ。而して諸菩薩住處品の中に、甘菩遮(Kamboja)、迦葉彌羅(Kashmira)、乾陀羅(Gandhara)のみならず、葱巖以來の疏勒(Kashgar)、震旦の名が記さるゝより見れば、經の成立を支那交通以前、即ち、西曆第一世紀前に遡らしむる事が出来ぬ。屬賓三藏、求那跋摩譯の優婆塞、五戒威儀經の劈頭に、七處八會の佛法僧に對する歸敬文が見え、中印曇無讖譯の菩薩戒本、北印菩提留支譯の尼乾子經、中印優禪尼國月婆周那譯の大乘頂王經、隋闍那堀多譯の佛本行集經等にも、毘盧遮那佛に對する歸敬語が見える。因て以て、第五世紀の初期以後、毘盧遮那信仰が、中印

優禪尼、北印、罽賓、西域、于闐等に普及せるを知る。また龍樹、世親の二大士に、十地經論の存するより見れば、世親時代までは十地經の單行せる事と、それが南印にも行はれし事とを知る事が出来る。更にまた名號淨行、十定、如來出現、十忍、離世間諸品が、或は支謙により、或は吳支謙により、或は竺法護によりて、傳譯せられたるより、是等が第三世紀以前に於て、別々に單行せるを知る事が出来る。果して然らば、特立に成立し、別々に單行せるものが、或時代合糅せられて、現存の形を取れるものなるべく、その合糅には十地、入法界の二品が基礎となつたものらしく、而してその時代は西曆四〇〇を以て最低限とする。各品の成立は、勿論印度の地で、合糅もまた印度であつたらしい。六十華嚴の梵本が于闐(Khoten)より將來せられ、又八十華嚴の譯者たる實叉難陀の生國が、于闐たりしを考ふる時は、于闐に於て合糅せられたものらしく思はるゝけれども、西曆三九六、罽賓を去り、摩羅婆國界に於て初果を得、師子國、閻婆國を経て、四二四年、慶州に達せる求那跋摩の歸敬文中に、七處八會の三寶が渴仰せらるゝより見れば、于闐に非ずして、南方罽賓に移る。而して罽賓は小乗の本國であつたから、更に南下して摩羅婆(Malava)か、東して中印度に移ると思ふ。

求那跋摩が西曆四三一、建鄴に達するや、請によりて直に法華及十地經を講ぜる事、少しく後れて四三五を以て廣州に着せる中印の求那陀羅(Guṇabhadra)も、小品、華嚴等の學者であつた事は、注目すべきである。兩三藏共に海路より來たのである。華嚴を譯せる罽賓の佛陀跋陀羅は、兩三藏に先ちて、四一八頃を以て、青州東萊郡に達した。其傳記の上に不明の個所があるが、同じく海路より來たものである。よりにて、此經が第五世紀の初葉、中南印度に於て、大に行はれて居た事をトせしむ。經の註釋には、舊譯に對する唐智儼の「搜玄記」十卷。唐法藏の「探玄記」二十卷あり。また新譯に對する唐澄觀の「隨疏演義鈔」四十卷あり、また唐李通玄の「新經論」四十卷もある。唐慧苑の「略疏刊定義記」十五卷は、異解を含むものとして、宗學者の間に用ひられぬが、研究上有益なるべく、下りては明德清の「綱要」八十卷等がある。猶經を祖述せるものに、後魏靈辨の「論」一卷、隋吉藏の「遊意」一卷、唐靜居の「新經玄義」一卷、唐靈裕の「文義記」法藏の「文義綱目」一卷、同「策林」一卷、澄觀の「略策」一卷、同「七處九會頌釋章」一卷、宋復菴の「綸貫」一卷、李通玄の「大意」一卷、同「決疑論」四卷、宋戒環の「要解」一卷、宋道通の「吞海集」三卷、清永光の「三十九品大意」一卷、同「綱目貫攝」一卷、新羅表員の「文義要決」四卷

等がある。

## 十、十地經 *Dasabhūmika-sūtra*

華嚴經中の別譯とのみいはれて居るが、別立單行せし時代のあつた事は、前に記せる通りである。尼波羅國にては、これを *Dasabhūmivāra* とす *Gaṇḍa-vyūha* 入法界品と同じと相並んで、共に九法の隨一として、尊崇措かぬ。首尾完備して、獨立の經典たる體裁を具へて居る。印度に於て、早く既に二個までの釋論のあつた事、今日猶尼波羅國に單行せられて居る事、單行本として屢々漢譯せられて居る事等より察する時は、其初大本の一部として存せしにあらざして、却りてこれを基礎として大本の成立せし事を想像せずに居れぬ。當初は唯菩薩の修行階級、または禪定の進趣を十種に分てるに過ぎなうだが、其後次第に加ふる所があつて、四十一位ともなり、五十二位ともなり、遂には五十七位、六十心ともなつたのであらう。此經の異譯は次の如くて、第二を除くの外皆現存して居る。

一、漸備一切智德經五卷、一名十住、又名大慧光三昧——西晉月支三藏竺法護、元康

七年(二九七)於長安市西寺譯

二十住經十二卷——西晉聶道真譯。開元錄云、第二出。十地品異譯、見長房錄。(缺)

三十住經四卷——後秦龜茲國三藏鳩摩羅什、共佛陀耶舍譯。

四十地經論十二卷中の經——後魏北天竺菩提留支、中天竺勒那摩提、北天竺伏陀

扇多等、永平元年(四一四)五〇八—五一二譯。

五、大方廣佛華嚴經六十卷中の十地品——東晉北天竺三藏佛跋陀羅、於揚州司

空謝石所立道場寺、義熙十四年(四一八—四二〇)譯(晉道人支法領、從子、闍國、將來此梵本)

六、大周新譯華嚴經八十卷中の十地品——于闐國三藏實叉難陀、奉制於大徧空寺

證聖元年(聖曆二年、六九五—六九九)譯。

七、佛說十地經九卷——大唐國僧法界、從中天竺將來此梵本、于闐三藏尸羅達摩、於

北庭龍興寺譯。

學者或は後漢竺法蘭に此經の異譯たる十地斷結經八卷(見朱子行漢錄、高僧傳、長房錄)ありと爲せど、四十二章經の翻譯さへも問題であるのに、斯經の傳來ありしとは思はれぬ。必ずや誤謬であらう。

また後秦竺佛念の十地斷結經十卷(見二秦錄、高僧傳、祐錄)を以て、同本異譯と爲せど、これは單に名稱よりいふのみ。この經委くは最勝問菩薩十住除垢斷結經又は十千日光三昧定經といはれ、全く別種のものである。

或はまた竺法護の菩薩十地經一卷、聶道眞の大方廣菩薩十地經一卷、東晉祇多蜜の十地經一卷、羅什の莊嚴菩提心經一卷、後魏吉迦夜の大方廣菩薩十地經一卷、以上同本異譯をも、此經の異譯と爲せど、これまた別種のものである。最後のものは、現存して居る。

註釋は、印度に四五種もあつたとの事であるが、其中の二種のみ傳來して居る。

一、十住毘婆娑論十七卷、聖龍樹造、羅什譯。(十萬偈の一部のみと傳へらる。)

二、十地經論十二卷。天親菩薩造、後魏菩提流支等譯。

佛成道第二七日、第六他化自任天宮摩尼寶藏殿にあり、他方世界より來集せる金剛藏以下の卅七菩薩中、解脫月 Muktiendra を對手として、金剛藏 Vajragarbhā の説けるもので、結構の大體を掲ぐれば、次の如くである。

金剛藏、佛の威神を承けて、大智慧、光明三昧或大乘光明三昧に入り、諸佛の摩頂に

よりて、三昧より起ち、諸菩薩に向ひ、菩薩の智地に十あり、三世諸佛の説法はこの地の爲なり、今これを説かんとて、十地の名を説き終りて、默然たり。解脫月、諸菩薩を代表して、之を詳説せんを三請す。佛、眉間より光明を放ちて、十方世界を照し、不思議力を現じ、虚空中に大光明雲臺を成す。雲臺中に聲ありて、偈を以て勸請す。金剛藏、また大衆をして、信敬を増益せしめんが爲に、偈を説き、佛神力無量、今皆在此身、我之所説者、如大海一滂とて、それより十地を説く。

若し衆生あり、善根を集め、善行を修し、助道法を集め、諸佛を供養し、善知識に護られ、深廣心に入り、大法を信樂し、心多く慈悲に向ひ、佛智慧を求むる時は、乃ち菩提心を發す。この心は、大悲を以て首と爲し、智慧方便に護らる。この心を發す時は、即時凡夫地を過ぎて菩薩位に入り、如來種の中に入り、必らず菩提を得べし。これを歡喜地と名く。この地の菩薩は、十不可盡法の爲に、十大願を起し、十大願によりて、十心を起し、一方に最上第一義の樂を知ると同時に、他方に衆生の二顛倒を抱くを見て、大悲を起し、大施を學行し、世間の爲に、諸經書を知り、世智を得、精進不退にして、諸佛を供養し、如説修行す。此地の菩薩は、四攝法の中にて布施、愛

語多く、十波羅蜜の中にて檀波羅蜜多し。

十種の直心を生じて第二地に入れば、自ら十善戒を具足す。此地の菩薩は四攝法中にては愛語偏へに多く、十波羅蜜中にては戒波羅蜜偏へに勝る。

十種の深心を以て第三地に入るや、一方には實相を觀じ、他方には之を知らざる衆生の苦海に沈淪するを見て、之を救はんが爲に精勤に法を求め、一句を得るも、喜樂して正觀し、空閑處に於て、四禪、四空定に入り、以て四無量心を得、神通を得。

この地において、利行の攝法特に多く、忍波羅蜜偏へに勝る。

十法明門を以て第四地に入り、三十七道品を修習し、以て六十二見を初とし、我、衆生、人、壽者、知者、見者、五陰、十二入、十八界に著する見を悉く斷滅す。こゝには同事攝法と精進波羅蜜と偏へに多し。

十平等心を以て第五地に入り、如實に四諦を知り、二諦を知り、如實に衆生を知り、この正觀より大悲智を生じ、衆生の爲に發願修善し、世の一切の學術技藝を知り、よりて以て、諸佛無上の法に入らしむ。こゝには禪波羅蜜偏へに多し。

十平等法によりて、第六地に入り、第一義中には、三界虛妄、但是一心作、十二因緣分、

是皆依心なるを知り、順逆十種に十二因緣法を觀ずるや、三解脱門現前し、萬空三昧門現前す。この地にては、般若波羅蜜偏へに勝る。

十妙行を修し、方便慧現前するを以て、第七地に入り、十種の無量種を修し、無功用行を修し、四攝法、三十七品、三解脱門、一切助善提法を具足し、よりて十種の勝三昧を得、無生法忍を得て、諸法を照明し、大願、智慧より大方便を生ず。

一切法の虚空性なるに悟入し、第八地に入れば、深行菩薩と名づけらる。一切の心意識現前せず、畢竟して涅槃を取れども、衆生利益の方便を捨てず、三世間に於て自在なるが故に、十自在を得、無罪の三業を起し、生死涅槃の二處に住せざるが故に、七種の功德を示現す。これを入佛境界と名け、淨佛國土によりて、衆生を教化す。この地には、願波羅蜜増上す。

智慧成就して、種々の差別相を實の如く知りて、第九地に入り、大法師として、無量の陀羅尼力、無礙智樂説力を得て、四無礙辯を以て、隨意説法す。或は一音を以て、或は種々の音聲を以て、或は光明を以て、或は種々の相によりて、衆生を開悟せしむ。この地には、力波羅蜜最も勝る。

第九地に於て、方便を満足し、三昧を満足し、最後に益一切智位三昧現前するや、即時に大蓮華の上に座し身中より大光明を放ち、十方無邊の菩薩の圍繞せる中に於て、諸佛の眉間光明の其頂より入るや、諸佛界に入り、十力を具足す。これを得職と爲す。諸佛、智水を頂に灌ぐによりて、灌頂法王と名けらる。智、解脱、三昧、陀羅尼神通の五大を得、十方の佛所に至り、無量の法明を皆能く受持す。即ち智波羅羅蜜の増上を見る。

斯くて後に十地を概説するに、三種の譬を以てし、此法門を聞くを得るは、善根の然らしむる所、菩薩心なきものは、之を聞くも信解する能はざるを説き、佛力を以ての故に、十方佛國の金剛藏菩薩來りて、その眞實なるを證すといふに結歸す。十地の中には、下は人天の善根より、上は佛果に至るまでを悉く攝盡し、且つその一地に各々無量の學行を含むを以て、いづれの一を取りて之を修するも、佛果を得べき底のものである。十波羅蜜を配當して、之を堅説し、次第を附せるは、一應のものに過ぎぬ。十地中互に十波羅蜜を具有すといふ風に、横に見た方がよい。後世の學者が、圓融無礙を極言せるも無理はない。賢首大師は、經意の明了ならざる所を、

本業、仁王の諸經地、攝の諸論に參酌し、以て次の如くに十地の堅説を明確ならしめた。

- 第一歡喜地 *Pramuditā* — 修十大願、行布施、施度 — 入
- 第二離垢地 *Vimalā* — 學十善戒 — 戒度 — 欲界天
- 第三發光地 *Prabhākari* — 習八禪定 — 忍度 — 色界無色界天
- 第四饒慧地 *Arciṣmati* — 觀三十七道品 — 進度 — 須陀洹
- 第五難勝地 *Sudurjayā* — 觀四諦法 — 定度 — 阿羅漢
- 第六現前地 *Abhimukhi* — 觀十二因緣 — 慧度 — 緣 覺
- 第七遠行地 *Dūraṅgamā* — 修空無相行 — 方便度 — 菩薩
- 第八不動地 *Acala* — 淨佛國土 — 願度 — 乘
- 第九善慧地 *Sādhumatī* — 說法教化 — 力度 — 乘 出出世間
- 第十法雲地 *Dharmameghā* — 受職灌頂 — 智度 — 乘 出出世間

これ皆その勝れた邊より配當したのみなる事を注意せねばならぬ。經を見れば、一地々々に絶對の價値の存する事が、明了に看取せられ、從つて彼此の特色を明了

ならしむる事が出来ぬ。經意を了得せんには、之を身讀する外はない。

以上は、極めて疎雜の叙述を試みたに過ぎぬが、之を讀過して、著しく注目せられた事は、(一)菩薩を稱揚する他の半面として、二乘貶黜の筆法の至る所に見ゆる事、(二)三界唯一心の世界觀が、明了に顯はれて居る事、(三)法空といふ以上に、自性清淨の諸法實相を説く事、(四)向上門の智的空觀の上に出て、向下門の悲的差別を立つる事、(五)大悲大智慧大方便を高潮し、其向上門も向下門も、畢竟大悲の然らしむる所なりとて、終始を通じて、大悲の極説せらるゝ事、(六)斯くて不住處涅槃の至る所に顯はるゝ事、(七)十方諸佛の信仰の至る所に溢るゝ事、(八)在家の菩薩を認むる事等である。以上は悉く大乘の名を負ふべき所以のものである。

さて菩薩の修行階級といふよりも、寧ろ禪定の進趣たる十地といふ事は、蓋し佛陀の本生觀に始まつたものであらう。釋尊の成道以前に對して、菩薩の稱を以てするに、或は菩薩道場に向はれた時よりするもあり(因果經)。或は出家して王舍城に入り、頻王と問答せる時よりするもあり(瑞應本起經)。或は出家後、獵者の法衣と、自己の寶衣とを交換せる時よりするもあり(修行本起經)。或は誕生まで廻りて全

部に適用するもあり(普曜經)。種々異りてあるが、その前生の修行時を菩薩と呼ぶに至つては、諸傳悉く一致するのみならず、南北また一致する所である。大乘經典の菩薩は、一般化せるものであるけれど、その根原に遡れば、釋尊の成道以前、特に本生時のそれから來たものに相違ない。特に華嚴の普賢の願行は、佛陀の廣大な精神と、之に應ずる實行とを憧憬せしむるもので、此の十地經は乃ち一篇の縮寫に外ならぬ。故に十地の系統は正しく之を佛傳中の本生に求めねばならぬと思ふ。さて、十地といふ語は、梵本にてはマハーヴスツ Mahāvastu にもあるとの事であるが、漢譯にては、因果經に、爾時善慧菩薩(śunetha) 功行満足、位登十地、在一生補處、近一切種智生兜率天といひ、瑞應本起、修行本起に、於九十一劫修道德、學佛意通、十地、行、在一生補處とある。これ恐らくは菩薩の修行に、階級を附した始であると思ふ。斯くて十地の階級が出来て後、自らこれが名稱を要するに至つた。大品般若の乾慧、性、八人、見、薄、離、欲、已、辦、辟、支、佛、菩薩、佛の十地は、之に應ずる一の解答ではあるまいか。こは三十七品を修し、道種智を用て、一切禪定に入りて、經過すべき進趣で、その名稱の上に見らるゝ如く、豎のものである。當時の菩薩は、まだ大乘特有の意味を有す



るに至らなんだと見える。もし菩薩を特別なものとする時は、其位階に外凡、内凡より初めて聲聞辟支佛のあるのは到底矛盾たるを免れぬ。この矛盾を除かんとするものは、此經の歡喜乃至法雲の十地である。これは第二の解答で、堅にも見られ、また横にも見らるべき性質を帯びて居る。大論には、前者を共地といひ、後者を但菩薩地といひ、以て兩者の間に調和を試みて居る。

さて、十地の名が定まつた所で、各地に附隨する行法が、要せらるゝ事となつた。六波羅蜜に何等かの四波羅蜜を加へて、十波羅蜜としたのは、これに應じたのであらうと思ふ。十波羅蜜には少くも三種がある。(一)六波羅蜜に、方便、願、力、智を加ふるもので、これは勝天王般若に見ゆる。(二)檀、戒、般若、精進、忍辱の五に、出 (rekhama) 實諦 (sacca) 受持 (adhithana) 慈 (metta) 捨 (upekka) の五を加ふるもので、南傳本生經序、善慧孺童の叙述の下、及び北傳解脫道論入に見ゆる。(三)六波羅蜜に四無量心を加ふるもので、最近閩婆島より發見せられた古物に見ゆる(荻原氏談)。是等の十波羅蜜は、いづれも本生に附隨せる行法の上から來たものである。普曜經の菩薩嘆德文中の損己布施、持戒、清和、忍辱、調意、精進、一心、智慧、善權、所度、無極、解一切法の如きは、殆ん

どそのまゝ、第一種の十波羅蜜である。第二種のは、斯く都合のよい文句はないが、特別のものではない。第三種のもは、瑞應、異出、修行の三本起に、いづれも行六度、無極、習、四等心、慈悲喜護、又は奉六度、四等、四恩、三十七品といふ風に、甚だ能く表はれて居る。猶是等の佛傳中には、三阿僧祇劫も、百劫又は九十一劫も、三世諸佛も、悉く存在して居る。

是に至りて、十心、十三昧、十地、十陀羅尼、十波羅蜜を按排配當した菩薩十地經といふものあらしむるを致した。十地の名は見えぬが、多分、大品般若の十地であらう。十波羅蜜は勝天王般若のそれである。この經は西晉竺法護、同譯道真、東晉祇多蜜、後秦羅什、後魏吉迦夜によりて、五回譯出せられたが、最後のの一のみ現存して居る。斯くてこの後に整然たる十地經の現はるゝのは、極めて自然の徑路と思はるゝ。乃ち此經は、本生に發生し、般若に醗酵し、菩薩十地に醗酵して、此經となつたものである。而して又傍に十智、十發、十行、十無盡觀、十調伏寂靜地を説いた伽耶山頂の如きがあり、十善道、五十二種善根、正行四十分位、誓願四十分位、意樂四十分位、正直解脫四十分位の名數を列擧した方廣大莊嚴の如きがあり、是に至りて大本となるべ

き準備が益々整頓した。

華嚴に對する此經の位置は、前述の如くて、殆ど其中心を爲すから、之が研究は、當初地論宗として、攝論及唯識論の研究と並立し、後に一轉して華嚴宗と爲つたも、素より當然の事である。續高僧傳、菩提留支の傳に據れば、世親の論を翻譯した留支と、勒那摩提と、伏陀扇多と、三人各々師承を異にしたが爲に、意見の一致を缺きしかば、宣武帝三人をして別處に之を譯せしめ、後に勒那の弟子慧光、之を綜合して現存の如きものとしたと傳へて居る。慧光は實に地論宗の初祖である。隋唐の間に亘りて、智愷、賢首、嘉祥、及攝論諸師、之に對する解釋を發表して、其論議極めて盛んであつた。全體、地論も攝論も、唯識論も、共に無著世親の教義を傳へたもので、根本は同一であるけれど、之を祖述する上に於て、心の分類と、阿梨耶識の解釋とに、相容れ難き相違を來したのである。經に「三界虛妄、但是一心作、如來所說十二因緣分、皆依一心、所以者何、隨事貪欲共心生、心即是識、事即是行、行証心故名無明、無明共心生、名色」とあるが、一の心が如何にして差別相あるを來したかの理由を委説してない。其原因を識の自體中に求むべきであるか、換言すれば識の本質如何。論八に「常應

於阿梨耶識及阿陀那識中求解脫といひ、次に「阿梨耶識眞如法」といふ上から見れば、識體清淨なるが如くである。また二に「名色共阿梨耶生」とある上から見れば、識の體中差別相の原因を含むが如くである。是に於てか、識質の如何が議論の焦點であつた。地論家は之を清淨と爲し、眞如と同一と見た。攝論家は識の成分中に妄分の存するを認め、而して眞妄を以て不一不異と爲し、その眞分のみの發現せるを特に菴摩羅識と名け、九識を建つる事となつた。その菴摩羅識は、畢竟眞如に異らぬ。唯識家は最も精を盡して、差別の原理を賴耶識中の種子に求め、隨つて識質を以て全妄と爲し、眞如と識とを性相に區分し、性たる眞如の變現を認めぬ。三家共に識の發展して萬物となるを説くが、其異なる所は前二家は識を以て結局眞如の一轉せるもの爲し、唯識家は徹底して眞如と識とを峻別し、性の變じて相となるを許さぬにある。地論家の如く、之を一元と爲す時は、眞如の發展して萬法となれる理由は説くを得ぬ。唯識家の如く、賴耶開展を立て、眞如が之に與らずと爲す時は、二元的に見らるゝ傾を生ずる。而もいづれも結局、差別の存在を以て、無始以來のものとならぬ事となるのである。

## 十一、入法界品

この品は華嚴經の一部分として傳へられてあるが、尼波羅國(Nepaul)に於ては、今猶前掲の十地經と共に、獨立に存在し、九法の隨一として尊崇せらるゝとの事である。かの國にては、之を *Gaṇḍa-vyūha* (雜華嚴飾の義) と稱し、西藏にては *Avakansaka* (華嚴の義) と稱する。若し、大華嚴經が、十地及入法界の二品を基礎として、成立したものの推定にして、誤らなかつたなら、華嚴の稱は、この經より來たものである。これが異譯に左の數種がある。

一、佛說羅摩伽經三卷——西秦聖賢太初年間(三八八—四〇七)於河南國爲乾歸譯。初より普覆衆生威德夜天に至る三十四知識を列するのみ。その未完なると梵本の傳來の不明なるとは、遺憾である。

二、六十華嚴中の入法界品。——東晉の北天竺覺賢三藏譯。初め天主光童女以下有徳童女に至る九知識を缺きて、四十六知識を掲ぐるのみであつたが、永隆年中、中印度の日照三藏の將來せる梵本に照合して、其缺を知り、三藏法藏等、勅を

奉じて、垂拱元年(六八五)西太原寺に於て、之を譯補し、以て現形を爲したのである。

三、八十華嚴中の入法界品。唐の于闐國三藏學喜譯。

これは則天后が、六十卷本の處會に不備の個處あるを慨き、于闐にその梵本あるを聞き、使を發して之を求め、並に學喜を請じ來りて、譯せしめたる所。南印の菩提流支三藏、義淨、復禮、法藏等の碩學、等しく之に關係したのである。

四、四十華嚴經——大方廣佛華嚴經入不思議解脱境界普賢行願品。

梵本は、南印烏荼國 *Uṭṭarā* の王が、自ら手書して、貞元十一年唐德宗帝に進上し、屬寶の般若三藏が、貞元十二年—十四年間(七九六—七九八)に、長安の崇福寺に於て譯せる所。これこの品の完成せるもので、頗る追加があるのは、印度佛教思想の發達を研究する上に於て、大切な材料となる。

この外には、不空三藏の譯せる四十二字觀門一卷。同、頓證毘盧遮那法身字輪瑜伽儀軌一卷といふが如き、この品の一小部分たる觀法に關するものもある。蓋し、入法界といふ名稱は、その内容より附したもので、名稱の上から見ても、一經の眼目た

る事が明白である。大本の所詮は、要するに普賢の行願によりて、法界に悟入するにある。

佛室羅筏城 *Srivastī* 逝多林 *Jetaavana* 給孤獨園 *Anāthapiṇḍika-saṅghārāma* 大莊嚴重閣  
 にあり、會座には、普賢の行願を成就せる普賢、文殊等の五百の大菩薩あり、心中に  
 說法あらんを待つ。佛乃はち師子頻申三昧 *Sīṃhavijrābhīta-samādhi* に入るや、樓閣  
 及園林忽然として廣博なること、不可說微塵數世界の量と等し。十方の菩薩雲  
 集して、恭敬供養す。諸大聲聞は、その善根、菩薩と異なるを以て、總てこれを見ず、知  
 らざりき。

十方の上首菩薩、各々一人、偈を以て佛を讚し、普賢菩薩十種の法句を以て、頻申三  
 昧なるものを開發顯示、照明演説す。佛、諸菩薩をして、この三昧に安住せしめん  
 が爲に、また白毫の光を放ちて、十方を照し、諸菩薩をして法界の佛事を見しむ。  
 諸菩薩皆大悲法門を得、佛所を離れずして、悉く十方に於て、種々に示現し、衆生を  
 利益す。

文殊師利童子 *Mañjuśrī-kumāra-bhūta* 偈讚の後、佛を禮して、善住樓閣 *Pratishthana-kūṭa*

*Bāra* より出て、南行して人間に往く。諸菩薩、諸神、八部衆、これに従ふ。舍利弗ま  
 た諸比丘を伴ひ、同行せんとするや、文殊之に對して、大乘を説き、菩提心を發さし  
 めて後、同行して同じく人間に遊ばしむ。

文殊往いて福城 *Dāyākāra* の東に至りて止住說法す。城中の優婆塞、優婆夷、童子  
 等來集して、禮を致す。中に善財 *Sudhama* なる童子あり、夙因によりて、大乘の器た  
 り。文殊の說法によりて、菩提心を發していふ、如何にしてか菩薩行を學修し、趣  
 行し、隨順し、憶念し、増廣し、満足すべき。文殊いふ、一切智々を成就せんとせば、決  
 定して眞の知識を求むべしと。よりて南方勝樂國妙峯山の德雲比丘を指示す。  
 乃はち、德雲に、至りて法を得て後、更に海雲比丘を指示せられ、これより順次に指  
 示せらるゝ所に従ひ、一百一十城を經過し、五十三知識に參して後、普門國蘇摩那  
 城の文殊童子に奉觀せんと思ふ。

文殊神力を以て、遠く右手を申べて、その頂を摩し、讚嘆說法し、普賢の道場に入ら  
 しむ。善財即ち普賢が毘盧遮那如來前の衆會の中にあるを見て、その神通化導  
 にあひ、次第に普賢の諸行願を満足して、法界に悟入し、以て普賢に等しく、隨つて

諸佛に等しきに至りぬ。

普賢最後に佛の功德の一滴を説かんとて、偽讃して以て終る。

一篇の趣意を案ずるに、初に法界縁起、重々無盡の廣大なる法界觀上に安立せられたる佛果の大用を顯はし、以て大心あるもの、憧憬心を激發し、次て之が修行たる廣大無量の大願大行を説んとするにあるが、之につきては、善知識にあひて親參聞修するの肝要なるを示したのである。大乘智慧の表現者たる文殊と、大乘行願の表現者たる普賢とは、離るべからざる關係を有するが、一篇の理想人格は、普賢にありて、文殊は附屬の位置である事、いふまでもない。大乘行者の代表として、是等二大菩薩の間に點ぜられたる善財童子は、文殊の勸發によりて、燃ゆるが如き熱血を傾倒して、慕進遂に一步を退かざる勇猛の努力を體現して居る。童子といふは生々發展せんとする所の餘裕なき向上心を表したもので、必ずしも年齢の沙汰であるまい。もし根本に遡らば、釋尊の菩薩たりし時の求道的精神をいふに外ならぬのである。

首尾具備して、能く整へられて居るが、肝要な普賢行願は、入法界品にありては、説

て詳ならざるものがある。蓋しこれ實踐躬行によりて會得すべくして、説明すべきものではない、若し言語によつて説明せば、別に不思議なものでもないが爲であらう。然し徹頭徹尾、普賢行願を極説しつゝ、之を詳述せぬは、聊か物足らぬに相違ない。是に於てか、大本中に普賢行品といふが加へられた、また入法界品の末尾にも、四十卷本に至りて、新に行願品が加へられた。四十卷本が普賢行願品の名を有するは、之が爲である。

順序上、先づ五十五聖の名を列して見やう。賢首大師はこれを五相分別とて、寄位修行相、四十一人。有緣入實相、摩耶夫人以下十人(實は十一人)。攝徳成因相、彌勒菩薩一人。智照無二相、文殊童子一人。顯因廣大相、普賢菩薩一人の五段に分けて見た。更に第一の四十一人を小分すれば、十信、文殊童子一人。十住、徳雲以下十人。十行、善見比丘以下十人。十向、鬻香長者以下十人。十地、迦毘羅城主夜神以下十人である。李通玄は初の十信を立てず、十住門、十行門、十向位、十地位、十一地法門、文殊普賢の五十三位に分けた。名目は、三譯幾分相違するが、今は八十卷本に従ひ、梵語は中に當らぬものもあるが、兎に角對配して見たのである。

一、福城 Danyakara 東莊嚴幢 Mahadvajavyūha 林中之文殊師利童子 Manjusri-kumara-bhūta — 勸發善財童子

二、南方勝樂國 Rāmaparvata 妙峰 Sugriva 山中德雲比丘 Meghasri-bhikṣu — 在別山上徐步經行。一憶念一切諸佛境界智慧光明普眼法門

三、南方海門國 Sāgara-mukha 海雲比丘 Sāgara-megha-bhikṣu — 告言十有二年常以大海爲其境界。一諸佛菩薩光明普眼門

四、南方楞伽道邊 Iankapatha 海岸聚落 Sāgarakṛta 善住比丘 Suprasthita-bhikṣu — 於虛空中來往經行。一普速疾供養諸佛成就衆生無礙解脫門

五、南方達里鼻茶國 Dravidapatana 自在城 Vajrapura 彌伽良醫 Megha-dravida — 於市肆中坐於說法師子之座說輪字莊嚴法門

六、南方住林聚落 Navanavasi 解脫長者 Mukta-Sreshthin — 告言所見諸佛皆由自心

七、南行閻浮提畔摩利伽羅國海幢比丘 Sāgara-dhvaja-b. — 在經行地側結跏趺坐入于三昧

八、南行海潮處普莊嚴園 Samanta-vyūha 休捨優婆夷 Asā? upāsikā — 坐真金座戴海藏真

殊網。一告言得見我者皆獲不退轉

九、南方海潮處那羅素國 Nalaya 毗目瞿沙仙人 Bhismohara-nirghosa — 在梅檀樹下敷草而坐徒衆一萬或鹿皮樹皮編草髻環垂髮。仙人申右手執善財手即時善財自見其身往十方佛刹。仙人放手童子還在本處

十、南方伊沙那聚落 Isana-janapada 勝熱婆羅門 Jayosmayakana? — 修諸苦行求一切智。一梵天皆謂見婆羅門五熱炙身於自宮殿心不樂著於諸禪定不得滋味

十一、南方師子奮迅城 Simhavijimbhita 慈行童女 Maitryani-kanya — 住毗盧遮那藏殿。一寶瓔珞中悉見一如來

十二、南方三眼國 Trinayanā-janapada 善見比丘 Sudarsana-bhikṣu — 壯年美貌端正可喜。一告言我經行時一念中一切十方皆悉現前

十三、南方名聞國 Sramana-maṇḍala 河洛中自在主童子 Indriyeshvara — 聚沙爲戲。一切工巧神通智法門

十四、南方海住城 Samudra-pratishāna 具足優婆夷 Prabhūta-up. — 告言能於小器中隨衆生種々欲樂出生種々美味飲食悉令充滿

十五南方大興城 Mahā-Saubhava 明智居士 Vidvat-gihaspati 一告言我能一切資生之物諸有所須悉全充滿乃至為說真實妙法

十六南方師子宮城 Simhapala 法寶髻長者 Ratna-cūda-dharmasresthin 在於市中執善財手示其舍宅

十七南方藤根國 Vetr-mūla 普門城 Samantamukha 普眼長者 Samanta-netra 一告言我能一切所生諸疾以方便救療又善知和合一切諸香要法

十八南方多羅幢城 Naladhvaja 無厭足王 Anala-rāja 在於正殿坐師子座宣布法化調御衆生無量衆生犯王教勅與無量楚毒

十九南方妙光城 Suprabhan 大光王 Mula-prabhar 一告言此國土中一切衆生五濁世時樂作諸惡我心哀愍而欲救護一入此三昧時彼諸衆生所有怖畏心惱害心等悉自消滅

二十南方安住都 Sthira 不動 Acala 優婆夷 一自是童女在其家內父母守護與自親屬無量人衆演說妙法

廿一南方無量都薩羅城 Tosala 徧行出家外道 Sarvagamin-parivrajaka 一告言我或住闍

見或信二乘或復信樂大乘之道

廿二南方廣大國 Pithuristira 鬻香長者優鉢羅華 Utpalabhūtmigandhika-sresthin

廿三南方樓閣城 Kūṭāgāra 船師婆施羅 Vairocana-dāsa

廿四南方可樂城 Kandibara 長者無上勝 Jayotama 一城東林中無量商人百千居士圍繞理斷人間種種事務因為說法

廿五南方輸那國 Sronaparantī 迦陵迦林 Kalīngavana 比丘尼師子頻申 Simhavijrābhita 一告言此智光明於一念中普照三世一切諸法出生一切法三昧王悟法自性知法如幻不分別衆生相不分別如來相

廿六南方險難國 Durga-janapada 寶莊嚴城女人婆須蜜多 Vasumitrā 一城內市廊之北自宅中住城中有人不知此女功德一告言若天見我我為天女人非人等見我者我即為現人非人女隨其樂欲皆全得見

廿七南方善度城 Subhapatragama 居士鞞瑟胝羅 Vesshila 一告言知十方一切諸佛畢竟無有涅槃者唯為欲調伏衆生而亦現身

廿八南方補怛洛迦山 Potalaka 觀自在菩薩 Avalokiteśvara-bodhisattva 一西面岩谷之中泉

流紫映樹林，蕙鬱香草柔，願菩薩於金剛石上，結跏趺坐，平等教化一切衆生——或化現同類之形，與其共居。

廿九、東方正趣菩薩 Ananyagāmin-bodhisattva —— 從東方妙藏世界而來，諸觀自在所——此菩薩供養於佛，雨所有莊嚴具。

三十、南方墮羅鉢底城 Divānavati 大天神 Mahā-deva —— 現廣大身，教令善財供養如來，修諸福德，并施一切，攝取衆生。

卅一、摩竭提國菩提場 Magadha-visaye-bodhimāṇḍa 主地神 安住 Pṛthivī-devatā Śāvarā —— 從然燈佛 Dipaṅkara-buddha 來，常隨菩薩恭敬守護，告善財，此寶藏是汝往昔善根果報，應隨意受用——百萬地神皆謂此來童子，即是佛藏。

卅二、迦毘羅城主夜神 婆珊婆演底 Vāsanti —— 告言，我得菩薩破一切衆生癡暗，法光明解脫——於善惡二行衆生，起不二心。

卅三、菩提道場內主夜神 普德淨光 Samanāgambhīra-srī-vimalaprabhā —— 我得菩薩解脫，名寂靜禪，定樂普遊步。

卅四、菩提道場右邊夜神 喜目觀察衆生 Pramūṭitanāyana-jagadvirocana —— 示現一切諸希

有事，善財思惟解了，深入安住。

卅五、衆會中夜神 普救衆生妙德 Samānanta-sattva-trāṇojih-srī —— 示現菩薩調伏衆生解脫神力，善財即得究竟清淨輪三昧，二神兩處中間——令塵中各見佛刹，又見一切世界。

卅六、去此不遠主夜神 寂靜音海 Prasāntarūpa-sāgaravī —— 告言，修十大法藏，十波羅蜜，得念々生廣大喜莊嚴解脫。

卅七、如來會中主夜神 守護一切城增長威力 Sarvanagara-rakṣāsambhava-keja-srī —— 告言，知甚深自在妙音解脫，令諸世間離戲論語，不作二語，常真實語，常清淨語。

卅八、佛會中夜神 開敷一切樹華 Sarva-vikṣā-praphullana-sukhamśainvāsa —— 告言，成就菩薩出生廣大喜光明解脫門，能知如來普攝衆生，巧方便智。

卅九、道場中夜神 大願精進力救護一切衆生 Sarvajagad-rakṣā-pranidhāna-vīrya-prabhā —— 告言，成就教化衆生，令生善根解脫門，悟一切法自性平等。

四十、嵐毘尼園 Lumbini 妙德圓滿神 Sutejomanḍalavāsisrī —— 爲諸天說菩薩受生海經，令生如來家，增長菩薩大功德海。

四十一、迦毘羅城釋女 瞿波 Gopa-sākyakanyā —— 善財問云，何於生死中教化衆生——宮神



來迎言、不久當成無上果

四十二佛母摩耶 *Māyā-devī* 於從地涌出大蓮華之座上、現淨色身、善財問云、何於諸世間、無所染著。主城神迎言、應守心城。善財思念、此善知識、遠離世間、住無所住、我云何親近。羅刹鬼王告、汝應普禮十方善知識。

四十三迦毘羅城童子師、徧友 *Viśva-mitra*。四十四、三十三天正念王女、天主光 *Surāndrahā*

四十五衆藝童子善知 *Silpabhīṣā* 一告言、四十二字般若波羅蜜門爲首、入無量般若門

四十六廢竭提國婆阻那城 *Kevala-varāna* 優婆夷賢勝 *Bhadrotama*

四十七南方沃田城 *Bhānu-kaccha* 長者堅固解脫 *Mukta-sāra*

四十八城中長者妙月 *Su-candra*

四十九南方出生城 *Roruka* 長者無勝軍 *Ajāsena*

五十城南法聚落 *Dharmasrīma* 婆羅門最寂靜 *Sivāgri* 一告言、以住誠願語解脫、隨意所作、莫不成滿。

五十一南方妙意華門城 *Samana-mukha* 童子德生 *Sṛisambhava*。五十二童子有德 *Sri-*

*dhara* 以不思議諸善根力、令善財身、柔軟光澤

五十二南方海岸國 *Samudra-kaccha* 大莊嚴園毗盧遮那莊嚴藏 *Vairocana-vyūha-lankara-*

*garbha* 大樓閣中彌勒菩薩 *Maitreya-bodhisattva* 一善財讚閣中諸菩薩已、願見彌勒親

近供養。菩薩從別處來、對衆會讚善財、而後令善財入閣中。善財入已、見樓閣種

々不可思議自在境、歡喜踊躍、身心柔軟、離一切想、所思不亂、入於無礙解脫之門。

彌勒說種種法門已、後言、文殊童子是汝善知識、令汝得生如來家、文殊與汝往昔同

生同行。

五十四善財經由一百一十餘城已、到普門國蘇摩那城 *Sumana* 思文殊。文殊遙申右

手、按善財頂、示教利喜、令善財成阿僧祇法門、具足無量大智光明、入普賢行道場。

五十五善財即見普賢菩薩 *Samanabhadra-bodhisattva* 在如來前衆會之中、坐蓮華師子

之座、具無量大神通力、即得十種智波羅蜜。普賢即申右手、摩其頂、善財即得一切

佛刹微塵數三昧門。次第得普賢諸行願海、與普賢等、與諸佛等、一身充滿一切世

界。

以上の五十五聖中文殊が二回出るから、實數は五十四である。これを類別すれば

(一)菩薩五人

(五)童子師一人、童子三人、童女二人、

(二)比丘五人、比丘尼一人

(六)神一人、主地神一人、主夜神八人、

(三)長者八人、良醫一人、香商一人、居士二人、船師一人、王二人、

(四)優婆夷四人、女子三人、天女一人、(七)出家外道一人、婆羅門二人、仙人一人

の如き結果を呈する。専門家たる比丘が僅に五人のみなるに對して、菩薩が同じく五人ある。専門以外のものには、俗士十四人、女子十一人の多きがあり、童男女すら六人あり、神といふべきものは天女を加へて十一人あり、甚しきは外道婆羅門が四人もある。之を見て、第一著に思ひ浮べらるゝ事は、當時大乘佛教の眞精神が比丘の上になくして、却つて俗士、女子、外道の中にあつたのはあるまいかといふ事である。その俗士の中には、香商や船師もあるのは殊に面白い。

求道の徑路は、個人によりて異なるから、善財のが必ずしも模範でないかも知れぬけれども、この中に、古今に通じて不變の眞理が含まれて居ると思ふ。之が解釋は人によつて異なるべく、またどこに重きを置くかと異なるべきも、一己の見解によつて、趣味多き歷程を味ひたい。この中には重復往返があるけれど、こは求道なるもの

、性質上、破竹の如くにのみ行けるものでない爲であらう。

善財の求道の歷程は、(一)智慧文殊の勸發によりて、眞知識を天下に求めたるに初まる。初は先づ比丘の間に之を求め、出世間的態度に出た。(二)山中に於て佛を憶念し、(三)大海に向つて、その廣大なるを觀じ、(四)また空中に對して、これを求めた。共に不徹底に終つたのである。即ち外に求めたる方向を轉じて、(五)市肆に入りて世間的生活の間に、法に向つて意を注ぐ事、十有二年、(六)心に佛を求めた。よりて更に専門的生活に入り、(七)三昧に入り、(八)我を見んと要した。是に於てか、(九)仙人に従ひ、苦行に従事して、肉の繫縛なき自己本來の面目に接せんとし、(十)五熟炙身の婆羅門生活に入り、精神の獨立尊嚴を自覺せんとした。既にして五欲の念を離れたれば、(十一)上りて王宮に入りては、王女の瓔珞中にも、一切の如來を見、(十二)下りて林中に入りては、一念の中に十方世界を見、(十三)出て、童子の河渚に戯れ、乃至一切の工巧にも、悟入の鍵を見た。今や出世にのみ存すべく思へる佛道が、一切の事物の上存する事を達見したのである。是に於てか、從來度外視せる(十四)食物、(十五)一切資生の物、(十六)舍宅、(十七)自身の、すべて疎にすべからざるを知り、疾あれば乃ち醫療

を加へ、藥香によりて衛生に注意を拂つた。苦修練行を経ての後斯の如く世間に再生し來るや(十八)王法の治罪の上にも、(十九)仁政の上にも、共に意味の同一なるものあるを知り、(廿)父母愛育の焦點たる童女の言動にも、種々の形貌、種々の方處、種々の行解、悉く是佛道を表はすものなるを知り、(廿二)香師にも、(廿三)船師にも、(廿四)乃至人間種々の事務に、悉く説法を見取りて以て修道の知識とした。乃はち、(廿五)衆生相と、如來相との分別すべからざるを悟り、(廿六)滿城悉く何等の功德を認めざる一婦人の上にも、己が欲するまゝに、天女とも見るべきを悟り、(廿七)諸佛に涅槃なし、唯衆生の爲に、現身するのみ、(廿八)天悲の然らしむる所時に同類の形を示し、我と同居すといふに進んで來た。是に於て、周圍の萬象、悉く佛身の化現となつたから、結局求道的經驗に於て、一度は徑過すべき汎神觀となつた。汎神觀には悠々迫らぬ長所があるけれども、また中心のない缺點が伴ふ。汎神觀のみては、宗教意識に究極の満足が得られない。即ち一轉して修道的必須條件として、(廿九)佛陀供養、(卅)善不善の取捨、三寶供養、平等施一切の缺くべからざるを悟つた。以上は南印度に向つての遍歴求道である。

修道は理論にあらず、また感情にあらず、理論上、萬々當然の事も、以て安心を齎すに足らず、一旦の大安慰も、いつの間にか空華の如く消失する事あり、修道の徑路には幾多の曲折がある。一たび高尚なる世界觀を樂しめる身も、今また當初の人間に還り、更に佛を求め光りを追はねば、堪ふ能はざる不安の域に彷徨する事となつた。是に於てか、踵を轉じて、聖地の巡禮を企つる事となつた。(卅一)菩提道場に至れば、地神等互に「佛藏來れり」といつて歓迎し、また、我等古來菩薩を守護し、その受用の爲に、寶藏を現出すといふ。げにや、自ら願れば我はこれ佛子である。また此世の一切は悉く我が爲に存在するのである。理よりせば、何の憂もなく、何の恩怨もなかるべき筈なれども、長夜の習氣の然らしむる所とて、善惡あり、恩怨あり、我に自由の認むべきがない。一旦の光明も、いかて雲霧に蔽はれず居られ得べきぞ。この後に、主夜神 *Urdhva* を訪ふこと八、迦毘羅城の一を除いて、他は皆菩提道場のものである。この以下、佛母摩耶に至る間の十一知識の下は、求道的遍歴中の中心を爲し、尤も曲折委細を盡して居る。もし、之を佛傳に比すれば、正しく降魔に當るのである。主夜神は女神で、次の瞿波及摩耶も勿論女である。女といふは、微細な情的

煩惱を意味し、夜といふは、心中闇にして光明なきの謂、また入定して一切すべて存せざる謂であらう。こゝを古徳が、十勝行を修し、十種障を斷じ、十眞如を證し、十地を成ずといへるも、然るべき事と思ふ。この事を一言すれば、(三十二)外界を見る眼を轉じて、自心を顧み、先づ内界の癡暗を破らんが爲に、(三十三)禪定に入り、(三十四)深く安住に入り、(三十五)一々塵中に佛刹を見るに至りて、善惡を超絶し、(卅六)念々大喜を生じ、(卅七)法性平等なるを以て、世言悉く清淨なりと知り、(卅八)善攝衆生の方便を會得し、(卅九)教化衆生の趣旨を了得し、(四十)嵐毘尼園に於て、今や其の菩薩としての新生に入るに至つたのである。以上、これまで理論的に得たものを、更に實際的に得て、自己心中の無明を破ると共に、饒益衆生の意樂を生じたものと解し得べきではあるまいか。是に至りて、新に開けたる眼を以て社會を見れば第一著に眼に映ずるものは、手近い家族である。(四十一)の瞿波は妻である。(四十二)の摩耶は母である。摩耶は、常に菩薩の母なりといふ。げにや我にして眞に菩薩たるの自覺あらば、我母は即ち摩耶たるべき筈である。然し、現實の母の舉止投足の上に、助道の説法を見出し、母の全身を善知識として、恭敬供養せん事は、至難の事である。況

んや妻子をや。若しこの手近い家庭問題に於て、宗教的解決を得、所謂世間において染著なきに達せば、他の一切は刀を迎へて容易に解決せられ、功を用ひずして、自ら教化衆生の實を擧ぐべきである。然るに至りて手近い所が却りて至難なるが爲に、此二段の下は、委曲を極めて居るのである。

容易なるが如くにして、實は難中の難たる家庭問題が、解決せられたる後の一類たる(四十三)天女以下、童子師、童子、優婆夷、三長者、婆羅門、及び(五十一)の童子、(五十二)童女に至る十人に對しては、非常の簡單を極めて居る。これは何等の躓つきなしに、事々物々の上に、修道の善知識を見出したが爲であらう。その中に於て童子師、偏友といふは、釋尊の幼時の文道の師である。善知衆藝童子といふのは、多分武道の師を意味するだらう。こゝに至りて、大に身の安さを覺えた。經に「善財の身柔軟光澤なり」とある。(五十三)求道生活の一段落たる彌勒の一段は、また最長のものである。彌勒は補處とて、佛の後繼者である。「閻中に入りて、これと同坐す」ともあり、また「身心柔軟にして、心眼朗然たり」とあれば、現世の修道は、こゝに終れりと見るのを至當とする。この後を後々の相續と見た方がよい。彌勒いふ、汝はこれより文殊

の所に至り普賢の行に入る法を問ふべし。文殊は汝の善知識にして、汝がこゝに來れるも、實に文殊の力に基づく。文殊と汝とは同生同行なり」と。修道の生活を終始して離るべからざるものは、實に知目行足である。一たびまた二たび心眼朗然たるも、身心ある以上は、智行の双運を要すべく、若しこれなくんば、心眼の開不といふの資格がない。文殊を以て、同生同行といふは、意味深き提示である。行者何人か信前後を通じて、二菩薩の引導に依らぬものがあらう。

暗示多き善知識の研究は頗る趣味ある事である。(一)文殊、善財の南行せるにて、佛教の次第に南漸せる消息を知らしめ(二)北は迦毘羅城より、南は極南浮陀洛山に至るまで、隨所に善知識の散在せるにて、大乘佛教が全印に彌漫せるを知らしめ(三)知識中に、俗士、女人の多き事は、大乘の精神が却つて比丘以外に多かりしを知らしめ(四)大本に比較して、四十華嚴に新加の多き事によりて、當時の經典が化石的の者にあらずして、活潑なる生命を含み、開遮自在なりし事を知らしむ。特に新加の部分中には、阿頼耶識に關するものが數ヶ所あり、長々しき王論があり、また最後に行願を説く一卷がある。其他にも澤山あれども、就中、是等は、教理上及歴史上に於て學

者を資する事甚だ大なるものである。前二者に關して述べたい意見もあるけれども、既に長きに失し、また餘論ともなるから、遺憾ながらこれを省略する。然し、最後の一卷につきては、猶數言を費すの必要がある。

最後歸結の一卷は、散文及六十二偈、初は四十五偈より成り、普賢が十大願王を説いて、導きて極樂往生を願はしめたと云ふ趣旨とする。十大願王とは、(一)禮敬諸佛(二)稱讚如來(三)廣修供養(四)懺悔業障(五)隨喜功德(六)請轉法輪(七)請佛住世(八)常隨佛學(九)恒順衆生(十)普皆迴向で、これには無上甚深の利益がある。行者もし此願を誦せば、一切の障礙を離れ、佛菩薩に讚嘆せられ、一切人天に禮敬せられ、一切衆生に供養せられ、命終に臨む時一切すべて隨ふものなきも、獨り此願王のみは、遂に捨離せずして、行者を引導し、一刹那中に極樂世界に往生して、蓮華中に生れ、阿彌陀佛の授記を蒙り、其後、無量劫の間、十方世界に於て、衆生利益を爲し、最後に道場に於て降魔成道すべしと説かれてある。これが普賢の行願といふもので、華嚴一篇の歸結である。是に至りて願みれば、華嚴經の説意は極樂往生に究極すと見らるべきである。この經のみならず、他の經典にも、至る所に反覆せらるる普賢行願といふは、以上の

如く何等目新らしいものでない。諸經を見るに、開合の差によりて或は八なるあり、七なるあり、或は六なるあり、乃至略して二なるあり、これは華嚴の特色として十とせらるゝに過ぎぬ。この中に甚深の意味を見出さんには、善財の如き求道生活を経ての後でなければならぬ。事物の眞意は實驗の修慧に待たねば了解せらるゝものでない。實驗を経ぬものは單なる空論に過ぎぬ。この偈が普賢行願讃として、古來甚だ尊ばれた事を、深く察すべきである。

入法界品の梵本の存在の確かなものは、倫敦亞細亞協會に一部、劍橋大學圖書館に二部、ペンゴール亞細亞協會に一部、巴利圖書館に三部、河口氏藏一部、少くも八部あり、また最後の行願讃の原本は、尼羅所傳の者は、Bhadrahari-pranidhānājaと題せらるるが、日本古傳の者は、Bhadrahari nāmīya saman'bhadrā pranidhāna と題せられ、葛城の慈雲尊者が當年異常の苦心を以て、般若心經、阿彌陀經の原本と共に、之を梓行した。後の二經は東方聖書中に、英譯もせられ、又其原本も英國に於て、一八八一—一八八三年の間に出版せられたが、行願讃のみは獨り埋木となつて居たが、渡邊氏は明治三十五年の『東洋哲學』に、之が研究を公にした。六十華嚴の譯者だ。覺賢三藏が、西

曆四二〇年を以て譯した、文殊師利發願經と云ふのは四十五偈より成り、實に此行願讃の不完全な者である。經名を見れば、文殊の發願と見えるけれど、經の後記に「外國四部衆禮佛時、多誦此經、以發願求佛道」とある通り、文殊願、普賢行を具足せんといふ、行者の發願なのである。又不空の譯せる普願行願讃といふは、六十二偈其者である。斯くて此偈、初は單行せられた者だが、其前後に長行が加へられ、而して時あつて入法界品の歸結として、追加せられた者である。

## 十一、梵網經 *Brahmajāla-sūtra*

委しくは、梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十といひ、二卷あり、姚秦の弘始八年西曆四〇六、羅什の譯せる者である。目錄には、後漢の康孟詳が、興平元年—建安四年（西曆一九四—一九九）の間に譯せる梵網經と、同本異譯であると記してある。これがあるれば、研究上の利益多いと思ふが、惜い事には、逸して傳はらぬ。什の譯場に列せる僧肇の序に徴すれば、この經の原本は、百二十卷六十一品ありしが、その中の一品のみを取り出して、口翻解釋せるもので、この時道融、道影等三百人、直にこの經に

従つて菩薩戒を受け、猶師徒義合して、八十一部を敬寫し、これを世に流通せしめたとの事である。爾來小乗の四分律戒と相并んで、非常の流行を來し、苟しくも戒律を口にするものは、之を知らぬものがない。戒經で、從來の經典と幾分か性質を異にするから、別にしやうと思つたが、華嚴經との關係上、こゝに出す事とした。

釋尊一時、第四禪地中の摩醯首羅天王宮にあり、身光を放つて、この天宮より初めて、蓮華臺藏世界を照し、大衆を將てその世界に至り、先づ盧舍那佛を禮敬して、如何にせば菩薩の十地道を成じ、佛果を得べきかを問ふ。佛答へたまふ、我已に百阿僧祇劫の間、心地を修行せる因によりて、初めて凡夫を捨て、等正覺を成じ、盧舍那佛と號し、蓮華臺藏世界に住す。その臺の周遍に千葉あり、一葉、一世界たり、我化して千釋迦となりて、千世界に據る。この一葉世界に、また百億の南閻浮提あり、百億の菩薩釋迦、各菩提樹下に坐して、各々汝が問ふ所の菩薩心地を説く。その餘の九百九十九釋迦も、また各々千百億の釋迦を現ずること、是の如し。千華上の佛は、これ吾化身にして、千百億の釋迦は、これ千釋迦の化身のみ。吾はその本原たる盧舍那佛なり。

華嚴宗にいふ蓮華藏世界といふのは、華嚴經の説に基いて居るけれど、その大中小の三釋迦を立てるのは、正しくこゝを繼紹したものである。三釋迦の事も斯る状態の蓮華の事も、華嚴經にはない。華嚴宗の學者が、これを以て直に華嚴の淨土と爲し、或は繪畫に、或は雕造に、之をもてはやすのを見ても、華嚴經と此經との間に、密接な關係の存する事を知るべきである。

次で、盧舍那佛の千釋迦、千百億の釋迦の間に答へたまふ所は、四十法門品とて、順次に淺より深に進む心地の過程である。これ菩薩の修入佛果の根原にして、盧舍那佛の修せる所も、これに過ぎなかつたのである。これを表出すれば、次の如くである。

- (一) 堅信忍中、十發趣心——捨戒忍、進定慧、願護喜頂の十心
- (二) 堅法忍中、十長養心——慈、悲、喜、捨、施、好語、益、同、定、慧の十心
- (三) 堅修忍中、十金剛心——信、念、廻向、達、直、不退、大乘、無相、慧、不壞の十心
- (四) 堅聖忍中、十地——平等、善、慧、光、明、爾、焰、慧、照、華、光、滿、足、佛、吼、華、嚴、入、佛、界の十地

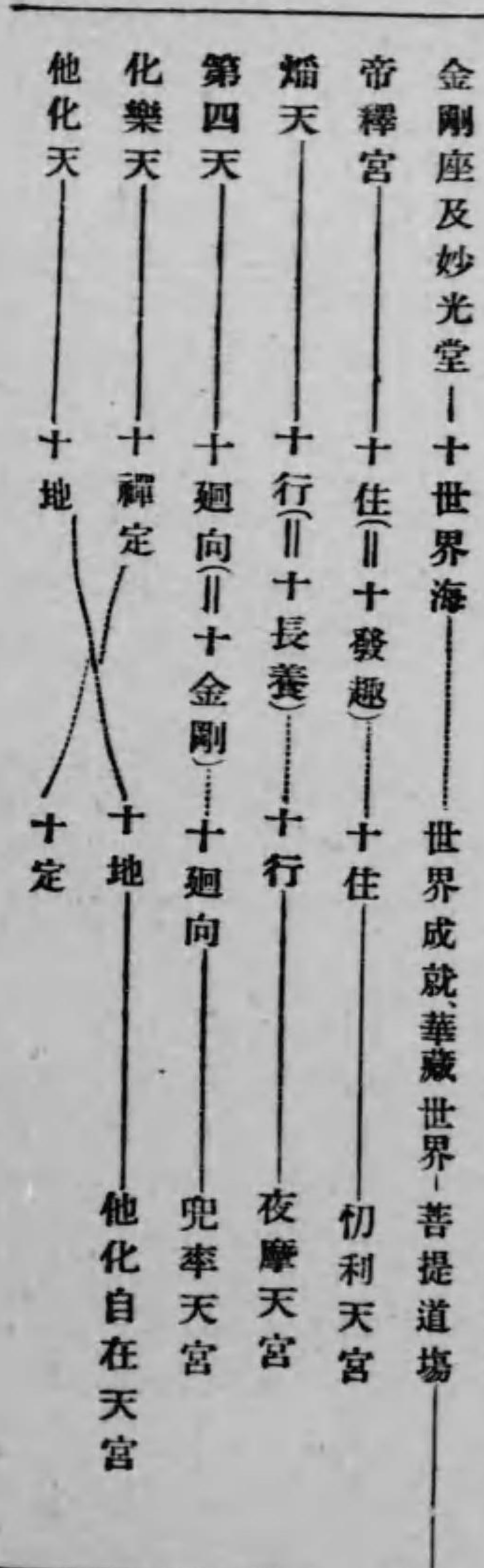
各地に體性の形容を冠せしめてある。

華光王大智明菩薩、この四十法門品の説明を求めたので、佛は一々これに答へ、終りに寶蓮花の上に坐せる十地の菩薩に授記及び、摩頂を與へ、後これを千華上佛に附屬せられた、千華上の千百億釋迦乃ち擧身より光明を放ちて、無量の佛を化し、一時に無量の華を以て、本佛を供養し、蓮華藏世界より没して、體性虛空華光三昧に入り、本原の閻浮提世界の菩提樹下に還りて、三昧より出て、金剛座及妙光堂にして十世界を説き、起つて帝釋宮に至りて十住を説き、云々、(こゝは華嚴を繼紹して、更に歩を進めて居る。次に表出比較するが如くである。)

梵網經

華嚴經

處法說



處法說

一禪 — 十金剛

二禪 — 十忍 — 十忍

三禪 — 十願

四禪中摩訶首羅天王宮 — 本原蓮華藏世界盧舍那佛所說心地法門品

普光明殿

時に釋迦天宮中に於て、魔受化經を説き終りて、南閻浮提迦夷羅國に下生して、摩耶を母とし、白淨を父とし、悉達と名く、七歳出家、三十成道して、支那日本に行はるゝ佛の成道年齢は、皆こゝに基つて、十住處に説法し、大梵天王の網羅幢を觀じて、經名はこゝに基つて、世界はこの網孔の如く、無量且つ不同なり、佛敎の門もまた是の如し。吾今この世界に來ること八千返なりと宣ひ、また梵王宮より下りて閻浮提に至り、本盧舍那佛の心地中初發心より常に誦せし所の金剛寶戒を説き、且つ戒は一切佛の本原、一切菩薩の本原、佛性種子なり、一切衆生悉く佛性あり、苟くも心情あるものは、皆佛性戒中に入るべし、この法戒は三世の一切衆生の頂戴し、受持する所、吾今また重ねて十無盡藏戒品を説くべし、と宣す。

忒上は菩薩戒に説き入る序分である。これより釋尊が、樹下に成道せる初めに、こ

佛典の解説



の菩薩戒を説きて父母師僧の三寶に孝順し、至道の法に孝順せり、孝を戒と名け、また制止と名くとて、十重禁戒、四十八輕戒を説き、もし菩薩戒を受くるも、これを誦せざるものは、菩薩に非ず、佛子に非ずと宣したまひ、特に十重禁戒に對しては、一々に對して微塵ばかりも犯すべからず、况や具足して犯すをや、若し之を犯さば現身に菩提心を發すを得ず。國王の位を失し乃至一切皆失して三惡道に墮し、二劫三劫の間、父母三寶の名字をだも聞くを得ずと、また嚴重に戒められた。さて十重禁戒といふのは、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒に、次の五戒を加へたのである。

(六) 談他過失 (七) 自讚毀他 (八) 慳生毀辱 (九) 瞋不受謝 (十) 毀謗三寶

これを小乗の十戒に比すれば、頗る兩者の不同を知る事が出来る。小乗のは

(六) 不過中食 (七) 不坐高牀 (八) 不作觀聽 (九) 不用脂粉 (十) 不蓄金銀等

兩者の立法の精神が相違して居る事は、一目瞭然である。小乗戒は自己一身を律し、いづれかといへば身體上に關する事を主眼とするが、菩薩戒は他人に關係を有し、主として精神上に關する方面に重きを置いてある。これやがて大小兩戒の相

違を代表するものである。就中、自讚毀他、毀謗三寶の兩戒の上に、當時小乗教徒が新に勃興し來れる大乘に對して、毀謗の言動ありし事を反映せしむる様に思ふ。四十八輕戒中にも、屢々この事に言及せられてある。

(背正向邪戒) 若佛子、心背大乘、常住經律、言非佛說、而受持二乘聲聞、外道惡見、一切禁戒、邪見經律者、犯輕垢罪。

(怖勝順劣戒) 若佛子、有佛經律、大乘法、正見、正性、正法身、而不能勤學修習、而捨七寶、反學邪見、二乘、外道、俗典、阿毘曇雜論、書記、是斷佛性、障道因緣、非行菩薩道、若故作者、犯輕垢罪。

而も法化違宗と貪財惜法の二戒には、新學の菩薩は勿論、外道惡人に對しても、大乘の經律を諄々として教ふべき事を戒めてある。一方にては、非佛説とまで毀るに關らず、他方にては、飽くまで之を教導すべしといふのである。この大精神を以てせば、如何なるものに對しても、慈悲の涙を濺がずに居られぬ。斯くて、次の如き、百世の下、猶吾人の心情の奥に響く所の訓誡ともなつたのである。佛教道德の根柢はこゝにある。

（不救存亡戒若佛子以慈心故行放生業一切男子是我父一切女人是我母我生々無不從之受生故六道衆生皆是我父母而殺而食者即殺我父母亦殺我故身一切地水是我先身一切火風是我本體故常行放生生々受生若見世人殺畜生時應方便救護解其苦難常教化講說菩薩戒救度衆生。

傳教大師の有名なるほろ／＼となく山鳥の歌は、必らずやこれに基いたのであらう。動物に對する愛護の精神も、こゝに至らざれば、竟畢皮相の約束に過ぎぬ。この慈悲の流るゝ所消極的には肉食を制する事ともなり、積極的には社會事業や、慈善事業の源泉ともなる。

（不瞻病苦戒若佛子見一切疾病人應供養如佛無異。八福田中看病福田第一。

八福田といふのは、(一)曠野に美井を造り、(二)水路に橋梁を架し、(三)險路を平治し、(四)父母に孝事し、(五)沙門を供養し、(六)病人を供養し、(七)厄難を救濟し、(八)無遮會を設くる事である。その中で瞻病が第一といはるゝ以上は、是等の諸項が皆當時の佛徒に奨勵せられ、また實行せられて居た事を示す。遠く例證を求むるに及ばぬ、我奈良朝平安朝時代の高僧方が、或は井を掘り、或は山を開き、或は橋梁を架する等の社會經

營に力を盡したのは、皆この經意を身に體したのに過ぎぬ。然し慈善も教化を含まねば、徒善となる。この弊を救ふべきは、次の點睛である。

（不化有情戒若佛子……若見牛馬猪羊一切畜生應心念口言汝是畜生發菩提心。而

菩薩入一切處山川林野皆使一切衆生發菩提心。

今日社會一般より佛徒に對する凡ての要求は、悉く此經の趣旨を實行する事によりて、満足せしめ得る事が出来る。

此經の精神は、以上にて其要を盡したと思ふ。是等は皆枯坐的小乗教に於て缺乏する所で、よしあるにせよ、大に奨勵せられぬものである。山を出て、實際に佛意を普及せんには、隱遁的小乗教にては不充分である。これ此經が、外道、小乗の外に立ち、一段の光彩を放つ所て、要するに外道にも小乗にも満足せぬ事が、此經あらしめたのである。經の最後の跋を爲す偈の中に、計我著相者不能信是法滅盡取證者亦非下種處。欲長菩提苗光明照世間。應當靜觀察諸法眞實相」とあるにて、外道及二乘に對する態度が、明了に看取せらるゝ。猶諸法の實相としては、不生不滅、不斷不常、不一不異、不來不去といふ三論的提示を爲し、於學於無學、勿生分別想、是名第一

道亦名摩訶衍一切戲論處。悉由是處滅。諸佛薩婆若。悉由是處出。と教へてある。我他彼此の分別を離るゝのが大乘の目的で、そこに佛智も生ずるといふのである。此經は盧舍那を本佛とし、蓮華藏世界をその淨土とする點に於て、又四十一位及その說法處の點に於て、華嚴經の大本を繼紹せる事は、疑ない。經中にも十地の所に佛華經中に廣説する如しといつてある。華嚴經を豫想せずんばこの一致を説明する事、頗る困難と思ふ。果して然らば、菩薩戒は、華嚴十地中に於かれたものゝ敷衍し、組織せられたもので、梵網戒の本源は、華嚴經中に存在する事となる。また退菩提心戒の中に梵戒を護持すること、浮囊を帶して大海を渡らんとするが如しといふ譬があるが、これは大涅槃經中に見ゆるものである。一切衆生の悉有佛性を説き、常住法身を説く所から見れば、涅槃經の後を受けたものと思はる。他には他經との連絡を知らしむべき材料を見出さぬ。

### 十三、菩薩瓔珞本業經

姚秦の竺佛念の譯せるもので、二卷八品に分たれ、西藏大藏中に一致のものを有

せぬすとの事である。これまた明藏以來、大乘律部に攝せらるゝが、華嚴經との關係上、梵網經に次で、こゝに出す事とする。

(集衆品一)佛重ねて泐沙王(Bimbisara)國、道場樹下、成正覺處に遊び、昔の如く四十二光を放たる。十方十林刹の十精進佛の所より來會せる十首の菩薩、皆佛の本業瓔珞たる十地、十行、十向、十地、無垢地、妙覺地を説かれんを請ふ。東方世界の敬首菩薩、十方佛刹に入りて、一切の佛にこの法門を發問す。釋尊十方法界の衆生の根縁を觀じて、その百億の分身をして、悉く二十八天化生の佛刹に至り、この法門を説かしむ。諸大衆天人、これを見聞するや、皆來りてこの道場樹會に集まる。(賢聖名字品二)敬首菩薩、佛德を讚じ、賢聖の名字及菩薩行を問ふ。佛、これに對して、先づ四十二賢聖の名門を説き、こゝに十住、十行、十向、十地、無垢地、妙覺の原語を並列し、秦譯を夾註す、一切の功徳行がこの中に攝せらるべきを説き、其中の一を略説すべしとて、初發心住を擧げ、此住に入るの前に十信心を修行すべし。而して初住に入れば、百法明門、十信心の心々に十あるを以て、を修行し、無量の大願を發し、また十波羅蜜、三空の如き無量の功徳を修し、十不可悔戒を受持す。(この十

戒は梵網經の十重業戒に同じこれ實に初住の第一人の行ずる所餘の九人の法行は之に准じて漸々に増廣し乃至他の九住十行十向十地無垢地もまた漸く不可思議行を増廣すべきを説きたまふ。

(賢聖學觀品三敬首菩薩の問によりて四十二心學觀の名字を説き、

六種性 六堅 六忍 六慧 六定 六觀

一、習種性——堅信——信忍——聞慧——習相定——住觀——銅寶瓔珞菩薩字

十人(十住)

二、性種性——堅法——法忍——思慧——性定——行觀——銀寶瓔珞菩薩字

十人(十行)

三、道種性——堅修——修忍——修慧——道慧定——向觀——金寶瓔珞菩薩字

十人(十廻向)

四、聖種性——堅德——正忍——無相慧——道理慧定——地觀——瑠璃寶瓔珞菩薩字

十人(十地)

五、等覺性——賢頂——無垢忍——照寂慧——大慧定——無相觀——摩尼寶瓔珞菩薩字

一人(等覺)

六、妙覺性——賢覺——一切智忍——寂照慧——正觀定——一切種智——水精寶

瓔珞妙覺

次に四十一心中に所行の法を説きたまふ。

○十住心 ○十行心 ○十廻向心 ○十地心 ○入法界心所三昧中修行十法

一、四弘誓——四正法——二諦正直 二十歡喜心 十無盡願——學佛不思議變通 集菩薩着屬

二、四念處觀——四如意足——五神通——十善——重修先所行法門

三、十一切入——五根——四不壞淨——十二門禪——問訊一切佛

四、八勝處——五分法身——三相——三十七道品——與無明父母別

五、八大人覺——八正道——五陰色——十六諦——入重玄門

六、八解脫——七觀擇法——十二入——十二因緣 十種照——現一切形相

七、六和敬——五善根——十八界——以三空智觀三界二習——二種法身具足

八、三空——四化法——因緣——無相大慧方便大用——無有二習

九、四等法——三世十二因緣——二諦空——四十辯才——無有二習

十六念——菩薩三寶——中道第一義諦——二習無明盡滅受大職位——登中道第一義諦山頂

而して第四十二心の終りに、(一)吾先於〇利天、説十觀名、初十住凡夫行、(二)吾先於燄天爲諸天、説凡夫十行、(三)吾先於第四天中、廣開此凡夫十向法、(四)吾先於第六天、説十地、導化天人、(五)吾先於第三禪中、集八禪衆、説一生補處菩薩入佛華三昧定、百萬億偈、(六)吾先在此樹下、説法界海といつてある。これ、華嚴經を指すもので、この一章は華嚴の縮寫の如きものである。而して第十向の中道第一義諦觀を相似といひ、初地以上、三觀心によりて一切地に入るを正觀と名けてある。

一、從假名入空二諦觀

方便道、因是二空觀得入中道觀

三、觀二從空入假名平等觀

中道第一義諦觀、雙照二諦、心々寂滅、無相法中、行於中道而無二

天台家が五十二位を立てるのは、此經によるので、此經によるのは、この三諦觀が主因を爲すものと思ふ。猶また地前三十心の後に、退と進とに言及し、十信と第六住までは、退分なれど、第六住に般若の正觀を得て、第七住以後に至れば、常住不退であ

る事を述べ、且つ第四十二の妙覺地を説いて後、(一)法性身、(二)應化法身の二種法身と、世間果報の名數法と、無明より七見六著の十三煩惱を起すこと、及び前三賢は三界の無明を伏し、後の十一人は法界中の三界業果を伏すること、聖位中に慧功德の二種業あることを、極めて簡略に述べてある。

(釋義品四敬首菩薩の間に應じて、四十二心の義相を説く。初に、義出體、體者菩薩體、義名功德。如是二法、一切菩薩爲體爲義、故名體義といひ、次に賢聖の一々の相義を釋し、最後に、吾昔第四禪中、爲八億梵天王、説寂照如來、無心無色而寂照一切法と結ばる。(こは梵網經を意味するものと思はる。)

(佛母品五敬首の間に對して、有、無、第一義の三諦を説き、次に諸佛菩薩の法界を照して、等覺するは、頓なりや漸なりやに關して、世尊には頓覺のみありて、漸覺なきを説き、次に無明と心との一異につきて、外道安陀師は、明闇一相、善惡一心といへど、我法の正義には、縛あり、解あり、凡あり、佛あるを説き、次に菩薩の行道久近につきて、天衣磐石の譬によりて、小中大の三劫を説き、百劫にして等覺を得べきを説かれ、最後に十信を以て一切行の本と爲し、その一信心中に十品ありて百法明門

となり、更に百法明心中、各百心あるを以て千法明門となり、更にその千心中に千心あり、萬法明門となり、増進して無量明に至るを説きたまふ。  
〔因果品六同じく敬首に對して、因果二相を説く。因とは十波羅蜜にして、果とは二種法身なり。十波羅蜜に各々三緣あり、能く七財、四攝、四辨、四依等の一切功德行を生じ、また能く五蓋、四食、四生等の一切不善を除く。〕

一、財施  
○施三緣 二、法施  
三、施衆生無畏  
○戒三緣 自性戒  
利益衆生戒  
○忍三緣 忍苦行  
第一義諦忍

起大誓之心  
○精進三緣 方便進趣  
○禪三緣 定亂想不起  
定生一切功德  
○慧三緣 照有諦  
動化衆生  
定利衆生  
中道第義一諦

自行願  
○願三緣 神通願  
○方便三緣 進趣向果  
巧會無  
○通力三緣 報通  
外化願  
一切法不捨不受  
變化通

無相智  
一切種智  
無垢慧三緣  
變化智

五賢の菩薩の修證せる法性の果體は、心行處滅のものなり、これを果極法身といふ。これと同時に、影の形に隨ふが如く、應化法身あり。果身常なるを以て應身もまた常なり。菩薩の二身は共に無常のみ。凡夫にも報、方便の二身あり、報身は各別なれど、方便身は一切衆生の共有なり。佛の功德身には、十號、十八不共法、十力等の無量の徳あり。一果體相に無量義あり、義に無量徳あり、徳に無量あり、義、徳名の三は皆教化の爲に外ならず。

〔大衆受學品七〕敬首菩薩以上の如く七會所説の要義を略問し終りて、誰か能く此座に於て受學修道すべかを問ふ。佛、乃はち文殊師利、普賢、法慧、功德林、金剛幢、金剛藏、善才、童子の七菩薩に勅し、各自の領せる大衆に受學せしむべしと重ねて六入次第道として十重戒に説き入りたまふに當り、若一切衆生初入三寶海、以信爲本、住在家、以戒爲本と提示し、然る後一切戒の根本として、(一)攝善法戒、(二)攝衆

生戒三攝律儀戒の三受門(三聚淨戒)を説き、次て上中下三品の受戒を説き、次て受戒の作法を説き、次て十無盡戒乃至攝律儀戒にして、梵網經の十重禁戒に同じの授受を説き、次て十戒及八萬威儀輕戒を受持する事によりて、十住心に入り、展轉して十行、十向、十地、無垢地を経て、妙果に入るべきを説き、座上の十四億人本座を離れずして、此六入法門に入ると結び最後に過去及現在の説法及説法處、とそ

の時この六入明門に入れる人數とを并説す

- 一、初得道時、在此間、説十世界海法門——九十億人、
- 二、普光堂、説十佛國土——百億人、 六、摩尼堂、説十地——百萬恒河沙人、
- 三、帝釋堂、説十住——五百萬人、 七、祇洹林、説入法界品——十二恒河沙人、
- 四、焰寶堂、説十行——千萬人、 八、此第八會座、六入明門——一切大衆
- 五、第四天法光堂、説十廻向——十恒河沙人

(集散品八)佛、大衆に向つて、三たび發菩提心を勸む。大衆中或は初住心を發し乃至現成正覺す。大衆及人天、各々本國に還りて、この法門を説かんとす。佛これを文殊慧海、金剛藏、道華等、八千の菩薩に附屬し、重ねて大衆に附屬す。時に金剛

華菩薩、未來世の爲に、これを説く順序を問ふ。佛これに對して、佛、法、僧、戒の四歸を授け、然る後に十戒を授け、然る後に、法師を供養すること、婆羅門が火に事ふる如くならしめ、然る後菩薩の本行を説くべしと宣す。

此經が、梵網經と同じく、華嚴經の後なることは、一見瞭然である。その折々に述べてはあるが、猶こゝに集めて見れば、次の如くである。

- 一、四十二位を説く事 二十方十林刹、十精進佛の十首菩薩の名目
- 二、十波羅蜜 四前に七會の説法あり、此經を第八會とする事
- 三、四十位の説法地として、二度まで、忉利天、焰天、兜率天、他化天を擧ぐる事
- 四、文殊乃至善財童子の七菩薩の名、
- 五、就中、七菩薩を七會に對配してあるのは、最も趣味ある問題を含む。
- 六、初會、普賢。 第二會、文殊。 第三會、法慧。 第四會、功德林。 第五會、金剛幢。 第六會、金剛藏。 第七會、善財童子。

華嚴の舊譯は、七處八會となつて居るのに、此經にては何故七會としたものであらう。或はこの頃猶複雑な第八會が無かつたものではあるまいか。果して然らば、

舊の八會が新に來りて九會となりし徑路も、説明し得らるゝ事となる。此經が、梵網經を以て、華嚴の後を受けて、四十二心の義相を釋せるものとなし、猶自らは更にその後を受けて、第八會たる六入明門を説けるものと爲せるは、經の上より明に見らるゝ所である。

十重禁戒を説く所は、勿論梵網の後を受けたもので、彼には四十八輕戒とありしを、これには更に擴げて八萬威儀輕戒としてあるが、然し之を細説せぬ。而してまた十重戒を以て攝律儀と爲し、他に積極的な攝善法(八萬四千法門及攝衆生(四無量心)を立て、以て三受門の名の下に統一して來たのは、新しい試みて、よりて以て戒が衆行の本たるを示したものである。また三歸の上に戒を加へて、四歸とした事も、新しい色彩を放つと思ふ。最後に、四依を説いた所に、涅槃經との關係を思はしむものがあるけれど、唯一つの材料にては、斷言する事が出來ぬ。有空中の三觀、凡夫の二身の説にも、また教理の上から注目すべき價值がありと思ふ。

#### 十四、大般涅槃經 *Mahāparinirvāṇa-sūtra*

北涼の曇無讖 *Dharmakṣa* によりて、西曆四二三年に譯せられ、四十卷、十三品に分たる。南宋の名僧慧嚴、慧觀が、謝靈運と共に、之を法顯譯に對照して、三十六卷、廿五品に修正したものを、南本といふに對して、これを北本と稱する。涅槃宗は、南本に基ついたものであるが、然しこれが研究は、北本に就くを至當とする。西藏大藏中には、一致のものを有するとの事である。

開元錄によれば、此經に六譯ありしが、其中の四を欠きしといふ。

- 一、後漢支婁迦讖(一四七或一六四—一八六譯、梵般泥洹經、二卷欠)
- 二、曹魏安法賢(二二〇—二六五譯、大般涅槃經、二卷欠)

古く竺道祖の魏錄に見えたとの事だが、此時代に涅槃の音譯なりしとは思はれぬ。

- 三、吳支謙(二二三—二五三譯、大般泥洹經、二卷欠)

大本、序分の哀歎品の略なりといはる。

- 四、東晋法顯(四一六—四一八譯、大般泥洹經、六卷)

大本の前分、大衆問品以前の同本異譯で、現存して居る。



## 五、北涼曇無讖四一六一四二三譯、大般涅槃經、四十卷

原本の三分一、即ち三萬五千偈中の萬餘偈を譯せしに止まると記さる。

## 六、劉宋智猛譯、般泥洹經、二十卷、(欠)——前者と同本との事である。

以上の外に、支派といふべきものに、(一)西晉竺法護(二六九)譯、方等泥洹經、二卷、(二)隋闍那崛多(五九三)譯、四童子三昧經、三卷がある。同本異譯で、これは大本の一部分ではない。また唐の會寧等が、南海訶陵國の沙門智賢 *Shānbhīndra* と共譯せる後分といふものがある。委しくは、後譯茶毘分といひ、二卷ある。義淨三藏は、その求法傳中に、これは阿笈摩經中より、如來涅槃焚燒の事を抄出せるものにして、大乘涅槃經に非ずと記して居る。開元錄の著者は、之を長阿含、邦分遊行經に對照するに、少分相似で、全分は同じからず。經中に法身常存、常樂我淨、佛菩薩境界非二乘所知とあれば、大涅槃の義理と相渉るものあり。且つ經の初に、題して憍陳如品餘といふ。且らく此に編して、後の博識を待つとしてあるが、今取りて之を見るに、四品、二卷に分たれ、その前に加へられた憍陳如品餘といふのは、添補の如くである。義淨三藏が小乘部中の抄出と爲せるは、その當を得て居ると思ふ。此經が原本の三分一に過ぎぬといはるゝのは、過大の言であらうけれど、必竟未定のまゝに傳譯せられたものである。最近續々發見せらるゝ原本頗る多いが、此經のみは辛くも一二の零片を得たに過ぎぬ。永久に之を完備せしむる希望のないのは遺憾の限りである。經の舞臺は、拘尸那城、力士生地、阿利羅跋提河邊、娑羅雙樹の間で、時は二月十五日、涅槃に臨むの時に於ける一日一夜の說法である。經中、有名な五味の譬を出し、此經を以て最後の醍醐に比するは、他の教典の後に來る事を反照する様に思はるゝ。四十卷もあるから、一々詳細に立ち入る事は出来ぬ。

(第一、壽命品、佛、大音を出して、普く衆生に告げ、疑あるものは、悉く之を問ふべしと宣す。佛の周圍には、比丘、比丘尼、菩薩、優婆塞、優婆夷、離車等、男女大小、大臣長者諸王眷屬、諸王夫人、諸天女、龍王、諸鬼神王、金翅鳥王、乾闥婆王、緊那羅王、摩睺羅伽王、阿脩羅王、陀那婆王、羅刹王、樹林神王、持咒王、貪色鬼魅、天諸采女、地諸鬼王、諸天子、四方風神、主雲雨神、大香象王、師子獸王、諸飛鳥王、水牛、牛羊、諸神仙人、一切山神、海神、河神、悉く來集す。樹林白變して、猶白鶴の如し。——畫家が涅槃像を書くのは、こゝに據れるもので、鶴林の出所もこゝにある——一切來集せしが、唯大迦葉、阿難、阿

閻世王及其眷屬のみ在らず。佛の神力によりて、三千世界の衆寶莊嚴すること、西方無壽量佛の極樂世界の如し。純陀最後の供養を爲す。文殊菩薩來りて純陀と問答す。純陀、文殊に一割を與へて、如來を以て諸行に同ずべからずといふ。佛法を以て大迦葉に附屬す。年少なる迦葉菩薩來りて、佛に問ふ所あり。佛之を讚じたまふ。

(第二、金剛身品)佛、迦葉菩薩を對手として、如來の身の金剛不壞なるを説く。中に過去の覺德比丘が、阿閼佛國に往生せる因縁を説きたまふ。

(第三、名字功德品)迦葉菩薩を對手として、大涅槃の名字義理を釋したまふ。

(第四、如來性品)迦葉菩薩を對手として、如來を以て自正、正他、能隨問答、善解因縁義と説く。中に如來所説の十二部經及秘密藏の語あり。また九部十二部中より、尼陀那、阿波陀那、優波提舍を除くを以て、半字教と爲し、毘伽羅論 *Vajirana* を以て、方等大乘經典と爲し、之を秘密藏と名け、この外に秘せるものなしと説き、——然るに梵行品には、毗佛略 *Vaiṣṭya* を以て方等大乘經典と爲す——また首楞嚴經、瞿師羅經、摩訶般若經を引證し、猶また般涅槃後、四十年中、此經流行し、其後地に隱沒

すべきこと、及び七百歳の後、魔波旬が正法を沮壞すべきを説きたまふ。

(第五、一切大衆所問品)佛、純陀の食を受けて後、諸衆生を調伏せんが爲に、病を現じて、臥したまふ。

(第六、現病品)迦葉菩薩の爲に、秘密教を説き、四果及辟支佛の五人を以て、病行者と爲す。是等二乗は、如來に非るを以てなり。

(第七、聖行品)迦葉菩薩を對手として、聖梵天嬰兒病の五種行あるを説き、また是等の根柢たる如來行あるを説きたまふ。如來行とは大乘大般涅槃經なり。——有名なる五味の喩及び捨身求法の因縁は、この品中に出づ。

(第八、梵行品)加葉菩薩を對手として、法義時足、自衆尊卑を知る所の七善法に住すれば、梵行を具するを説き、また慈悲喜捨の梵行たるを説きたまふ。——有名なる阿闍世王歸佛の因縁は、この下に出づ。

(第九、嬰兒行品)迦葉菩薩を對手として、起住し、來去し、語言する能はざるは、嬰兒なり、如來もまた斯の如しとして、第一義の上に起住、來去、語言なきを説きたまふ。

(第十、光明徧照高貴德王菩薩品)德王菩薩を對手として、大涅槃經を修行する十事

功德を説き、これを、大涅槃の常樂我淨に入り、衆生の爲に分別解説し、以て佛性を顯示すといふに結歸せしめ、猶之を信ずるものは、悉く大涅槃に入り、信ぜざるものは、生死に輪廻すべしとて、偏へに之を信行すべきを勸發したまふ。

第十一、師子吼品、師子吼菩薩が、佛性常樂我淨とは何ぞや一切衆生に佛性あらば、衆生何が爲に之を了らずして、佛のみ之を了りたまふかと問へるに對して、答へたまふ。中に、十二因縁を觀ずる智を明して、その下なるものは聲聞道を得、中なるものは緣覺道を得、上なるものは十住地を得、上々のものは無上菩提を得。故に十二因縁は佛性なり、第一義空なり、之を中道と名け、佛と名け、涅槃と名く。凡そ心あるものは菩提を成ずべきが故に、一切衆生に佛性ありと説き、次に涅槃の無相なる理由を説き、此無相を見るべき十法成就を述べ、種々の喩を擧げたまふ。第十二、迦葉菩薩品、迦葉菩薩が、佛子善星の地獄の罪人たる理由を問ひ、また未來の種々異説の事を問へるに對して、具に之を釋し、是の如きは佛の境界にして、二乗の知る所にあらずといひ、次で、逆理的論法によりて、歩を進めて後、種々の方面より佛性を釋し、涅槃を教へたまふ。

第十三、憍陳如品、憍陳如を對手として、無常の五蘊を滅すれば、常住、解脱の五蘊を得べきを説き、佛法を離れて沙門婆羅門なく、また沙門法、婆羅門法なしと説き進めたまふ。時に外道之を聞き、怒りて闍王の所に至り、佛と對論せんを請ふ。佛之を諾して、闍提首那婆羅門、婆私吒梵志、先尼梵志、迦葉梵志、富那梵志、清淨梵志、童子梵志、納衣梵志、弘廣羅門を催伏し、然る後、阿難が八種の不思議を具するを明し、文殊に勅して、咒を以て攝歸せしめ、往いて須跋陀梵志に至り、佛を見んが爲に來らしめ、實相の深義を問答したまふ。

經中に現はるゝ人物は、(一)純陀(壽命品)、(二)文殊(壽命、如來性、憍陳如の三品)、(三)迦葉菩薩(壽命、金剛身、名字功德、如來性、現病、聖行、梵行、嬰兒行、迦葉菩薩の九品)、(四)住無垢藏王菩薩(聖行品)、(五)東方瑠璃光菩薩(德王品)、(六)德王菩薩、(七)師子吼菩薩、(八)憍陳如、(九)須跋陀梵志の九名で、他に九人の外道の名も見える。是等の中、最も多くあらはれ、殆んど此經の中心ともいふべき位置を取るものは、迦葉菩薩である。この菩薩は、もと多羅聚落の人、姓は大迦葉、種は婆羅門、年は幼稚と記されてある。名稱の上から見て、大迦葉の理想化であると思はるゝ。大迦葉は耆宿であつたが、此經の附屬を受

けて、之を萬劫の後に傳ふべき役目を帯びて居るので、その精神の上から年少とせられたものであらう。既に純陀が、非常に理想化せられて、文殊と對當の位置を取り、縦横に論辯して居る所にも、大なる理想化がある。もと此經は、沙羅樹下に於ける一日一夜の説法に過ぎぬが、四十卷の大部を爲して、猶完結せぬのを見ても、理想化がすべての方面に行き亘れるを知るべきである。佛滅後の教會は、全く大迦葉の雙肩上に懸つた。最後の説法たる此經に於て、理想的となり、最極の位置を取るの、當然の事と思ふ。

經の中に、我般涅槃後、四十年中、於閻浮提廣行流布、然後乃當隱沒於地(六)とあるにて、此經が佛滅後の當時、世に存せざりしを知るべく、我涅槃後、正法未滅餘八十年、爾時、是經於閻浮提、當廣流布(九)とあるにて、佛滅後五百年乃至六百年の交に、盛んに流布せるを知るべきである。これやがて、此經の成立年代に一道の光明を與ふるものにはあるまいか。その翻譯が東晉、北涼以前に遡らぬらしい所にも、之に對する補證がある。經の内容より見る時は、華嚴や法華にも後れたらしく、既に經中に楞嚴、大般若を引證し、又無量壽佛、阿閼佛に言及して居る。

一經の眼目は、題號に示さるゝ如く、涅槃そのもので、隨つてこれを體とする法身。如來もまた眼目となる。この法身、如來は果體にして、その因位よりいふ時は佛性である。而して是等は悉く常樂我淨のものとしてらるゝ。經中を通じて、繰り返して説明せらるゝ所のものは、以上の涅槃法身、如來佛性、常樂我淨である。

さて、涅槃を説明して、大涅槃、即是諸佛如來境界(四)といひ。一切法中、涅槃爲常。如來體之故名爲常(四)といひ。さてその涅槃の體性につきては、涅槃之體、無有住處、直是諸佛斷煩惱處(廿五)、また解脫、即是無上大般涅槃(廿七)、また涅槃者、即是煩惱諸結火滅(廿七)と説いてある。涅槃の顯現につきては、作因よりせずして、了因よりす(廿一)といひ。其相を説くに、盡善性、實直常樂我淨の八事(廿五)を以てし、或は略して、即是常樂我淨、涅槃雖樂、非是受樂、乃是無上妙寂靜之樂(廿五)といひ、また單に樂者は涅槃(二)といひ。また之を讚嘆して、室宅歸依、洲渚畢竟、依と名けてある。

佛性につきては、大慈大悲大喜大捨、名爲佛性(卅二)、また佛性名第一義空……中道者名爲佛性、以是義故、佛性常恒、無有變易(廿七)とて、佛性を外にして、四無量心、第一義空、中道を求むべからざるをいひ。更に非即六法(五陰及我)、不離六法、衆生眞實、無如是

我及以我所、但以必定當得畢竟第一義空故、名佛性(卅二)といひて、佛性に對して物心的執見を抱くを避けしめ。然してまた進んで我者は如來藏義、一切衆生悉有佛性、即是我義(七)または世間之人、亦說有我、佛法之中、亦說有我、佛法有我、即是我佛性(七)といひて、如來藏の中介によつて、我と佛性とを歸一せしめ。猶その相に、常淨實善、當見眞の六事を立て(廿五)。斯くて、佛性あるも、諸の善方便を修習せざる時は、佛性を見る能はず、見ずんば成道せず。然るに佛性あるものは必定菩提を成ずべし、故に我已に菩提を得たりといふは罪あり(七)とて、憍慢のものを戒め。また佛性を以て丈夫相と爲し、之を知らざると知るとを以て、男女を分ち(九)。直に果に同じて、佛性者即是如來(十四卅二)といひ。また佛性、如來を常樂我淨のもの、一道清淨にして二なきもの、大乘眞法實諦第一義諦と名け、更に第一義諦とは世論に異らず、唯世人の所知は世諦にして、出世人の所知は第一義諦なり(十四)と説き進め。また一切衆生に佛性を具しながら、退心あるは如何との問を擧げて、其實は退心なし、唯時の遅きのみ、正因縁因の二者和合せざれば、成道せず、佛性は正因なり、發菩提心は縁因なり(廿八)とて、凡聖の區別と性の關係とを示し。また佛性に同じ、如來に同ぜる我と、

外道、凡夫の我とを區別せんが爲に、諸法無我、實非無我、若法是實、是眞、是常、是主、是依性不變易者、是名爲我(二)といひて、無我即大我の妙義を示し、また常樂我淨の四を順序の如く、法身涅槃佛法の四に配し、却りて無常苦無我不淨を以て、順序の如く、聲聞、緣覺一切外道生死有爲法に配當してある(二)。

以上の如く、此經、語言頗る強烈の色彩を帯び、從來の佛教と正反對の如くに見ゆる思想を含むが爲に、佛教界を動搖せしむる程の刺激があつた。佛教元來無常苦無我不淨を以て標幟と爲し、殊に無我を以て外道に區別すべき眼目と爲せるに、常樂我淨を以て涅槃の四徳と爲せるは、外道的口吻を帯ぶるが如くに見える。無我と大我との調和は、今や佛教々理上の大問題とならねばならぬ。法顯三藏が始めて此經の初の部分を譯するや、その影響として二個の反對事件を惹き起した。その一は、彭城の僧淵なるもの此經説を奇なりとして、之に反對せる爲に、舌根銷爛せりといふのである。その二は、什門の道生が、闡提不成佛の説に反對して、その成佛すべきを主張し、爲に教界より排斥せられたといふのである。前者は經の精神を會得せざるより起り、後者は部分を見て猶能く全部の精神を看破したのである。印

度の思想界に此問題ありしや否や不明なれど、印度佛教の發展のまゝが年代的に支那に傳はつたものであるから、支那に起れる問題は、やがて之を印度に移して見る事が出来る様に思ふ。斯の如く此經の内容中に、佛教々理に一轉機を與ふる程の思想を含める事は、特筆すべきである。

斯く新味を有する思想を含んであるが、然し此内容もまた此内容を表現する外形も、共に小乘涅槃經の發達せるものなる事は、明白である。小乘涅槃經とは、長阿含中の初分遊行經にして、その異譯として、(一)西晉白法祖譯佛般泥洹經、一卷、(二)法顯譯大般涅槃經、三卷、(三)失譯般泥洹經二卷の三種がある。經中特に骨髓を爲すものは、佛陀が一代所説の經戒を遺弟に付囑し、我常に此經戒中に存すといはれた所にある。遺教經及増一阿含の中に、肉身雖滅、法身常住といつてあるのは、これが繼紹である。佛の滅後、教徒の頭腦を支配した問題は、佛陀最後の光景と、滅後の佛陀は如何あるべきかといふにあつた。長阿含の初に遊行經のあるのは、教徒が如何に佛滅を追憶せしかの反映に相違ない。佛陀は、教徒に對して常に滅後の問題を討究するの要なし、唯現在の安心をのみ念とすべきを諄々として教訓された事であ

つた。佛陀の在世中は、之を問題としななだが、滅後の今日は、如何にしても佛身を知りたしとの強い要求を有するに至つた。是に於て先づ肉身法身の對立を見た。當初の法身は、五分法身としてのそれであつたが、然しこれが佛身としての法身に至るのは、遠い事ではない。佛身觀が發達して、一方には華嚴經の法界身の如き高遠な理想をも生ずる様になつたから、涅槃を解釋せんとする此經が、五分の法身を以て、法界に遍滿する常住法身の義と爲したのも、無理はない。斯くて、如來の身は金剛不壞と仰がれたから、其誕生も入滅も、方便の化現に外ならぬ事となつた。然らば此常住普通の法身と吾人との關係は如何といふに、現象の上からいへば、佛と衆生とは天地の差ありと雖も、既に華嚴經に、心佛衆生是三無差別の提示がある。此空氣を一たび呼吸せば、法身思想と表裏を爲す所の、佛性思想を起さざるを得ぬ。かの吠檀多 Vedānta 經に於て、梵 Brahman と名くる世界原理と我 Atman と名くる人間原理との間に、致一を認めて、直に梵我の一如を提示せるものと其歸を一にすといふべきである。佛身の不滅より得た思想は、是に於てか汎神的となり、隨つて之に對して積極的の立言を爲し、常樂我淨の屬性を附するに至つたのである。

此經の内容には、斯の如く華嚴經と密接の關係あるけれど、其形式の上にては、法華經の如き、大小調和の色彩を帯びて居る。素とこれ小乘涅槃經の系統を引くからであらう。然し、この經の大小調和は、法華經のそれと異り、言語の方面より試みたのである。即ち古き語に新らしき意味を加へて、法華の所謂三乘教の趣意は畢竟佛乘の爲に外ならぬ事をあらはさんと要したのである。富永仲基翁が「出定後語」の中に、小乘、般若、法華、華嚴の後に、此經と大集經とを出して、之を兼部氏と名け、大小二乘を兼ねたものと見たのは、暗に此意を指すものである。單に左の四例を見ただけでも、小乘經中の言語をそのまゝに採用して、之に新意義を附し、以て大小の調和を試みた跡が、歴然として分る事と思ふ。

(一) 聖行品の五味の喩——中阿含、七知品、及増一阿含、三十三に出る所。然し、阿含にては、己を安んじ、世間を感傷するを以て最上最尊と爲し、之を醍醐に比したのである。此經にては、經中の佛性を以て醍醐に比し、佛性は如來なれば、其功德の無量なること、醍醐の諸病を除くが如しと説いてある。

(二) 師子吼品中の雨の喩——中阿含、十に出づる所。但し阿含にては、此喩を善惡

兩方面に應用せる中、善き方面にては解脱に歸結せしめてある。此經にては、佛説の歸結する所、涅槃に外ならぬと教へてある。

(三) 師子吼品中の衆盲摸象の喩——長阿含、十九に出る所。阿含にては、鏡面王の戲と爲し、その象とは四諦を喩へたもので、能く四諦を知れば、争ふ事なしといふのである。此經にては、王が一大臣に命じて爲さしめたもので、王は如來に喩へ、臣は此經に喩へ、象は佛性に喩へたのである。而していふ、此經を聞くもの、或は五蘊を以て佛性となし、或は我を以て佛性と爲すべきも、佛性は五蘊及我の六法を離れず、また即せぬのである。云々。

(四) 師子吼品の七種沈没の喩——中阿含、一、及増一阿含、三十三に出づる。阿含にては、七種といふを、(一)生死に輪廻するもの、(二)信堅からざる爲、一たび得て、後に之を失ふもの、(三)信心堅固のもの、(四)須陀洹、(五)須陀含、(六)阿那含、(七)阿羅漢に配してある。後四を四沙門果と名くる。阿含にて、最後を阿羅漢と爲すは、素と當然である。然るに此經にては、初の三人は同様であるが、後の四人を(四)四沙門果、(五)辟支佛、(六)菩薩、(七)大涅槃に住する常住安樂の如來に配してある。

是等の四例は、極めて略筆であるが、如何にも巧みに應用した事が看取せられやう。表面にはいつてないが、法華の二乘開會の趣旨が、是等の中にみちみちて居ると思ふ。

此經の翻譯ありて後、支那の佛教學者は、意味深き此經を尊重して、教義上常に之を看過する事はなかつた。羅什は先づ般若除其虛妄、法華開一究竟、泥洹闡其實化といひ、僧叡は其後を受けて、此三經者、是大化三門、無極真體、皆有神驗、無所疑也といつて居る。初期の學者、既に般若、法華、涅槃の三經間に、不離の關係を認めた。其後南北朝時代に來りて、北地の一學者は、一代佛教を毘曇、成實、四論、涅槃、法華、華嚴の六宗に判じたが、南地の學者は、之を頓漸不定の三教に分ち、涅槃を以て漸教の極致と見た。一言にしていへば、北地にては華嚴を以て最上圓頓の教と爲し、南地にありては涅槃を以て漸教の究極と爲したので、その重きを置く所に差異があつた。然し、南北いづれも、此經に有力なる位置を與へた事は、明白である。一時、涅槃宗なるものがあつて、頗る榮えたものであるが、天台宗が最後の説法たる法華中に、此經を攝せんとして、法華説法の追説と見ての後は、獨立の研究廢せられて、天台宗に附屬

して研究せらるゝ事となつた。

注釋の現存するものは、梁寶亮等勅集の集解七十一卷、隋慧遠の義記廿卷、同吉藏の遊意一卷、隋灌頂、唐道暹の玄義文句二卷、隋灌頂、唐湛然の會疏卅六卷、唐行滿の私記十二卷、唐道暹の私記九卷、宋智圓の治定疏科十卷、同、三德指歸二十卷、缺卷十五、がある。此外に晉室の圓旨鈔十四卷、繼延の隨疏心鏡三十卷、吉藏の疏十四卷、憬興の疏十四卷、太賢の古迹記四卷、極太の義集七卷、義寂の義記五卷、潘洲の義記十卷、惠藏の疏十卷、壽諲の註三十卷等があつたが、逸して傳はらぬ。唯これによつて、南北朝より隋を経て、唐の中葉に至るまで、此經の研究頗る盛大であつた事を知るべきである。

## 十五、勝鬘經

*Sūmāla-devi-sinhārāṭa*

委しくは、勝鬘師子吼 乘大方便方廣經といひ、劉宋の代(四二〇—四七九)に天竺三藏求那跋陀羅の譯せるものである。異譯としては、後に唐の代に至りて、菩提流支が譯せる勝鬘夫人會といふがありて、大寶積經中に編入せられて居る。西藏大



藏中に一致のものを有すとの事である。勝鬘といふ女子を主人としたもので、中に小乗論部に對するが如き煩瑣な部分を交ふる事も多いが、然し當初の十大願といふ中に、社會的經營の根本精神を含んで居るのが目新らしい。聖徳太子の之に註せられたるは、吉藏や慧遠の後を受けたのであらうけれど、一はこの十大願が太子の精神に共鳴したが爲てあらう。自ら佛子勝鬘と稱せられた所から見ても、如何に此經に私淑せられたか分る。太子が法華維摩と相並んで、之に註せられて以來、此經我國に殊に有名となつたのである。

佛陀祇園にあり。國王波斯匿 Prasenajit 及末利 Mallika 夫人、法を信ずる事未だ久しからざる時なりき。共に謂ふ、我女勝鬘は聰明利根なり、若し佛を見れば、必らず速に法を解せん。直に信を遣はして、その道意を發すべし。即ち内人旃提羅なるものを遣はして、阿踰闍國 Ayodhya に至らしめぬ。

以上は序分で、これより正宗分に説き入るのである。波斯匿王の信法未久といふを釋して、太子は小乗を信ずること久しかりしが、大乘を信ずること久しからざりし時の事といひ、而して大乘を以て法鼓經の事なりといふ。げにや、法鼓經といふ

のは、波斯匿王の擊鼓吹貝を緣として、迦葉を對手として、有非有法門とて、有あれば苦樂あり、有なければ苦樂なし、故に苦樂を離るゝは涅槃第一樂なりといふ義を説かれたものである。

勝鬘書を見て、佛を偈讚するに、色に即せる法身の意を以てす。佛、その念に應じて、空中に光明を放ち、無比の身を現じ、衆中に於て受記す。「汝、如來の實相に通達せる切徳によりて、未來普光如來となり、勝淨土を建立せん」。勝鬘恭敬して立ち、十大受(十弘誓)を白す。

- 一、所受の戒に於て、犯心を犯さざらん
- 二、諸の尊長に於て、慢心を起さざらん
- 三、諸の衆生に於て、恚心を起さざらん
- 四、他の身色、衆具に於て、嫉心を起さざらん。

- 五、内外の法に於て、慳心を起さざらん
- 六、自の爲に財物を畜へず、悉く貧苦の衆生を成熟する爲にせん
- 七、自の爲に四攝法を行ぜず、無愛染心、無厭足心、無罣礙心を以て、衆生を攝受せん

八、孤獨幽繫、疾病、種々困厄の衆生を見れば、善を以て饒益し、其苦を脱せしめん  
 九、惡律儀及犯戒を見れば、或は折伏し、或は攝受せん  
 十、正法を攝受して、終に忘失せざらん

太子は是等を三聚戒に配し、初五を攝律義戒、中四を攝衆生戒、後一を攝善法戒とせられた。就中、中の四は最も注目すべきで、是等を見れば、菩薩の志願が、世間に向つて積極的の活動を實現せんとするにあつたを知るべきである。斯る活動は、隱遁的の出家生活に對する、不満足より來たものに相違ない。而も活動の中心たらんとする菩薩が、妙齡の婦人たるに至つては、大乘の精神の、社會化を證して餘りある。我聖德太子が、四天王寺に附屬して、敬田、悲田、施藥等の諸院を經營せられた根柢は、必らずやこゝに存すると思はる。

勝鬘更に三大願を發し、更に之を攝受正法の一大願に結歸して後、佛力を承けて、此一大願の廣大なる義を説いて曰く、此中に一切佛法八萬四千の法門を攝す。故に攝受正法の善男子、善女人は大菩薩なり。普ねく衆生の爲に、不請の友となりて、大悲を以て衆生を安慰し、哀愍す。斯る人は他の爲に身命財を捨つ。身を

捨て、不變常住の法身を得、命を捨て、無邊常を得、財を捨て、圓滿の果報を得。故に身命財を捨て、正法を攝受する人は、諸佛の爲に授記せらる。云云。

以上の如くにして、正法の廣大甚深なるを提示し、然る後、乘の體を説き、次に乗の境を説き、最後に乗の人を説いてある。乗の體を説く所は、一乗章といはれ、乗の境の所は、正誦如來藏法身一誦等の諸章に分たれ、乗の人は三種に分たれて居る。いづれにも大小二乗の對立が著しく見え、また調和の部分も見える。

(一乗章)佛大に之を讚嘆し、更に進んで一切諸佛の愛樂する所の攝受正法を説かしむ。勝鬘白す、攝受正法は摩訶衍なり。聲聞、緣覺、世間、出世間の善法は、皆摩訶衍より出づ。世尊の從來施設せる波羅提木、又も毘尼も、出家も、受具も、皆大乘の爲に外ならず。阿羅漢は如來によりて出家し、恐怖あり究竟の樂なし。佛のみ獨り涅槃を得たまふ。阿羅漢、辟支佛が涅槃を得たりといふは、佛の方便に外ならず。阿羅漢は分段生死を斷てども、變易生死を免れず。起煩惱を斷てども、その所依たる無明住地を斷つ能はず。故にその解脱は究竟せず、餘過あり、少分の涅槃を得たるのみ。されども、聲聞緣覺は、愚ならず、必竟大乘に入るべきものな

れば、自ら菩提を得べきを知る。大乘は佛乘なり、故に三乗は一乗なり。一乗を得るものは菩提を得、菩提とは涅槃界なり、涅槃界とは如來の法身なり。三乗衆に恐怖あり、如來に歸依して菩提に向ふ。されば三歸依といふも、必竟は如來に歸するなり。佛説に二乗なし、必竟大乘一乗に外ならず。

(聖諦章) 聲聞、緣覺には聖諦智あるのみ、未だ無明住地を斷ぜざるを以て、必竟は聖にみならず、諦を得たるにみならず。獨り如來のみ、第一義智あり、以て一切煩惱を斷じ、初めて諦を見て之を演説す。之を聖といふ。

(如來藏章) 聖諦とは如來藏を説くに名く。如來藏は獨り如來の分にして、二乗の境界にあらず。煩惱所纏の如來藏に於て疑惑なきものは、また之を出てたる法身に於ても、疑惑なかるべし。聖諦に二種あり、作と無作となり。故に生死にも有爲と無爲とあり。涅槃にも有餘と無餘とあり。獨り如來のみ、無作の聖諦に於て究竟したまふ。二乗は未だ究竟せず。無始無作、無起、無盡、離盡、常住、自性情淨にして、一切の煩惱藏を離るゝを、初めて眞の苦滅と名くべし。

(法身章) 不思議の佛法成就せるを法身と名け、この法身の未だ煩惱藏を離れざる

を如來藏と名く、この如來藏たるや、二乗はいふに及ばず、大力の菩薩だも、本とより見ざる所得ざる所なり。

(一諦章) 四聖諦の中、初の三は有爲の相に入る。有爲の相に入るものは無常なり、無常なるものは虚妄なり、虚妄なるものは諦にあらず、常にあらず、依にあらず、第一義諦にあらず。獨り滅諦のみ、有爲の相を離る。故に常なり、虚妄にあらず、諦なり、常なり、依なり、第一義諦なり。凡夫の心識の所縁に過ぎ、また二乗の智慧の境界にあらず。凡夫識は二見顛倒なり、二乗智は清淨なれども、本より一切智の境界及如來の法身を見ず。我見妄想より、諸行の無常を見るは、斷見にして、涅槃の常を見るは常なり、共に正見にあらず。佛語を信じて、常樂我淨の四想を起すは顛倒見にあらず、如來の法身に於て四想を起すを正見と名く。

(如來藏自性清淨章) 生死は如來藏による、故に本際不可知なり。如來藏によりて生死を説くを善説と爲す。生死といふは、世間の言説に従ふのみ、如來藏に生死あるにあらず。如來藏は常住不變なり、故に能く生死の依持たり、生死を建立するを得。如來藏なくんば、苦を厭ひ、涅槃を求むるを得ず、起滅なき如來藏あるに

よりて、能く涅槃を求むるを得べし。されど如来藏は我にあらず、衆生にあらず、命にあらず、人にあらざるなり。如来藏はこれ法界藏なり、法身藏なり、出世間上々藏なり、自性清淨藏なり。この如来藏は自性清淨にして而も客塵煩惱に染せらる。煩惱もと心に觸れず。而も煩惱あり、煩惱の心を染する事あり。自性清淨にして、而も染あること、了知すべき難し。唯佛のみ、この不思議を如實に知悉したまふ。

佛之を隨喜し、げに自性清淨心は了知し難く、この心の煩惱に染せらるゝ事も、また了知し難し。之を信ずるものは、汝及菩薩のみ、他の聲聞は唯佛語を信ずるのみと宣す。

(如来眞子章勝鬘佛の威神を承けて、最後に大乘道に入るべき善男善女として(一)自ら甚深の法智を成就するもの、(二)隨順の法智を成就するもの、(三)自ら了知せざるも、仰いて如来を推すもの、三種を擧げて、さていふ、其他のものは、種子を腐敗せる外道の徒なり。王力及天龍鬼神力を以て調伏すべきのみ。佛、善哉々と讃じ、光明を放ちて、虚空を歩み、舍衛國に還りたまふ。

以上を以て正宗分は終り、次に流通分として、勝鬘が衆と共に佛を念じつゝ、城に入りて、その夫たる友稱王に向ひ、大乘を稱嘆し、よりて以て城中の男女、七歳以上なるを悉く化せる事、及び佛陀が祇園に於て、此經を帝釋及阿難に付屬し、以て天上と人界とに流通せしむべきを命ぜるを説き、次て經名として十六の名目を列し、此名稱中に一卷の主要の綱目を包括せしめてある。

經の理想人格たる勝鬘夫人は、波斯匿王と末利夫人との所生である。母后末利 Mallikā の名も、また鬘の義を有する所から、有部律雜事第七には、これを勝鬘と譯し、釋種の大名 Mahāmāyā の女にして、勝光大王 Prasenajit の第一夫人であつたと記してある。これ行雨 Varshikā と相并んで二大夫人と稱せられた人て、一は釋種の出であつた爲であらう、殊に信佛の念に富み、多くの經典に其名を止めて居る。然し女の勝鬘は、此經の主人として見えるのみである。これ蓋し大乘菩薩の具體化で、その口によりて先づ二乗を折伏し、而して後之を攝受せんとの趣旨を寓したのである。その十弘誓を見るに、人世問題に接觸する事が、特に著しくあらはれて居る。これ恐くは二乗の徒が、生死と涅槃との間に一大溝渠を劃し、徒らに退嬰隱遁の弊に墮

せるを救ひ、以て自ら得たりとする二乗の徒を方便引入せんと目的に出たもので、その主人を俗人、而も妙齡の婦人に求めたのは、大乘佛教が出家の手より次第に俗士の手に移れる時代の反映である。維摩經が在家居士を主人とするに比すれば、更に一頭地を抜んづるものがある。この活躍たる新精神が如何に當時の教界を刺激したらうかと思ふ。

さてその内容を見るに、法身を經とし、三乗を緯として、堂々として二乗を折伏せる所には、維摩經の面影があり、また小乗論部の發達を豫想せしむる。また三乗を以て畢竟一乘に歸すべきを説き、以て一代佛教を佛乘に攝受して來た所に、二乗開會の精神がほの見える。また生死の起因を如來藏に歸せしめ、之が客塵煩惱に染せらるるを不思議と爲す所に、四十華嚴や起信論を思ひ浮べしむるものがあり、又常住の法身を以て、終局の理想となし、常樂我淨の四徳を以て之を證明せる所に、涅槃經との接觸を思はしむるものがある。斯くて、此經は、維摩、法華、華嚴、涅槃等の諸大乘經と接觸を有し、當時盛大なりし小乗論部に對抗したものである。經中、一の菩薩名も見えぬのは、大に他の大乘經と異なるが、こは菩薩思想が普遍した時代の表示

にして、理想を寓せしめた名目上の菩薩よりも、寧ろ大乘の精神を現實の人間に求めたものではあるまいか。

此經は、大藏經中にありては、大乘五大部の隨一たる大寶積經中に收められてある。南北朝時代の學者中、南地の三家は、頓漸不定の教判を立て、これを不定教に屬せしめたが、天台大師は、その五時教に於て、之を第二の方等時に收めた。天台の學が天下を風靡した所から、爾來方等部の一經典として見らるゝのを普通とするが、五時中の第二と爲す事は、今日の研究上支持に困難である。太子の釋に従ひ、法鼓經以後とするならば、法鼓經は其内容より見れば法華、涅槃の以後であるから、猶一層第二時説は成り立たぬ事となる。

註釋には、隋の吉藏の寶窟六卷、慧遠の義記二卷(下卷欠)、唐窺基説、義令記の述記二卷及び本邦聖德太子の疏三卷がある。太子の疏が、唐の明空によりて私鈔を加へられた事は、特筆の價值がある。太子が自ら佛子勝鬘と號し、四天王寺を起し、敬田悲田等の諸院を設け、佛教の精神によりて救濟事業を經營したのは、前述の如く、十大受の中四を事實の上に現はしたものに相違ない。この理解に困難な經典の主張

が、佛教渡來の劈頭に於て、早く既に實際上に力を現はしたといふのは、珍らしい事である。

### 十六、大方等如來藏經 Taḥīgatagarbha-sūtra

三譯ありしが、二者欠けて最後の二のみ、現存して居る。西藏大藏中に一致のものをも有するとの事である。

一、西晉法立共法炬譯。舊錄云佛藏方等經。見僧祐錄。

二、西晉河内帛法祖譯。見長房錄。

三、東晉北天三藏佛陀跋陀羅、元熙二年(四二〇)於道場寺譯。見竺道祖普世雜錄及僧祐錄。

經の説處は、王舍城耆闍崛山中、寶月講堂、栴檀重閣にして、説時は成道十年、對告衆は金剛慧菩薩であつた。會座には、法慧、金剛慧、觀世音、大勢至、香象、虛空藏、彌勒、文殊師利等の四十九菩薩の名が見えて居る。經起因縁は、佛陀の入定神變より現はれた千葉の蓮華、その數無量中に各々化佛を包めるが、同時に舒榮して、須臾に萎變したのて、金剛慧その理由を尋ね申したのによる。

佛金剛慧及諸菩薩に告げたまふ。大方等經あり、如來藏と名く。今將に之を演説せんとするが故に、この瑞相を現せるのみ。善男子よ、われ佛眼を以て、一切衆生を觀るに、貪欲、恚、癡の諸煩惱中、如來智、如來眼、如來身あり、結加趺坐して、儼然動かず。善男子よ、一切衆生、諸趣の煩惱身中にありと雖も、如來藏ありて、常に染汚なく、徳相の備足すること、我と異なるなし。恰も所化の蓮華の忽然萎變し、花内の化佛の、結加趺坐して、大光明を放つが如し。

此經、題號の如く、如來藏を説くを主眼とし、先づ前述の如き概説を爲して後、相次ぎて九個の譬を擧げ、反覆以て如來藏或は佛性の、衆生身中に存在することを説き示されてある。

一、天眼の人の、未敷の花内に、如來身あつて、結加趺坐するを見、萎花を除去して、便はちこれを顯現せしむるが如し。

二、淳蜜、巖樹中にあり、無數の群蜂圍繞守護せんに、一人あり、巧智の方便もて、先づ彼蜂を除き、乃はちその蜜を取り隨意に食用し、かねて遠近を惠むが如し。

三、糠粃の未だ皮糲を離れざる時、貧愚は之を輕賤して、棄つべしと爲すも、皮を除

いて精ならしむれば、常に御用を爲す如し。

四、不淨處に墮ちし眞金あり、年載を経歴して、猶壞せざれど、これを知るものなきに當り、天眼のものあり、衆人に向ひて、この不淨中眞金寶あり、汝等之を出して、随意に受用せよといふが如し。

五、貧家に珍寶あり、自ら之を知らず、また語るものなし、寶はもとより我れこゝにありといはず、爲めにこの寶藏を開發する能はざるが如し。

六、菴羅果内の種壞せず、之を地に種ゑて大樹王を成すが如し。

七、人あり、眞金像を持ち、行いて他國に詣り、劫奪に遭はんを懼れ、弊物に裹みて、識るものなからしめ、その人道に於て、忽ち命終す。是に於て金像、曠野に棄捐せられ、行人これを踐んで、咸く不淨といふ。天眼あるもの、弊物中に眞金像を得るや、これを出して、一切の禮敬を得るが如し。

八、貧賤醜陋の女人あり、四天下に聖王たるべき貴子を舉んに、その子自ら之を知らず、常に賤子の想を生ずるが如し。

九、鑄師の眞金像を鑄成して、地に倒置するや、外は焦黒すと雖も、内像變ぜず、開模

して像を出せば、金色晃曜たるが如し。

以上は譬のみを挙げたのである。是等の譬に合すべき法は、多言を待たぬ。唯その一例として、第一喩に對する法を挙げやう。

佛は衆生の如來藏を見て、これを開敷せしめんとして、經法を説き、煩惱を除滅して、佛性を顯現せしむ。諸佛の法皆爾り。佛出世すとも、出世せずとも、一切衆生の如來の藏は、常住不變なり。たゞ彼衆生、煩惱に覆はるゝが故に、如來出世して、爲に法を説き、塵勞を除滅して、一切智を淨うせしむるのみ。

斯くての後に、佛陀は金剛慧に向ひて、此經の功德の大なるを説き、最後に過去の因縁を挙げ、此經の堂奥の深さを示されてある。その因縁とは、過去に常放光明王如來といふあり、初めて成佛するや、その法中に無邊光なる一菩薩あり、佛所に於て如來藏經を問ふ。佛即ち十方世界の諸菩薩の爲に、無數の因縁、百千の譬喩を以て如來藏大乘經典を説く。諸菩薩これを聞き、受持讀誦、如說修行して、四菩薩を除く外は、皆既に成佛せり。その無邊光菩薩とは、異人ならず、我身即ちこれなり。未成佛の四菩薩とは、文殊師利、觀世音、大勢至、及び金剛慧に外ならずといふのである。

此經の形式を見るに、長行に次いで必ず偈頌あり、以て同様の意を反覆して居る。これ所謂重誦 *Ceyya* と云ふもので、此形の經典は、長行のみものより古いと思はる。經中、他經との關係を暗示すべき何等の痕跡をも見出さぬが、成道十年の説法と標榜する所から見れば、これまた大乘經典中には、比較的古い起原を有するかと思はる。勝鬘や楞伽や深密の如來藏思想、及び涅槃經の佛性思想は、斯る風にして圓熟して來たものではあるまいか。如來藏及佛性を既定の事實として、提示するものよりも、衆生の身中そのもの存することを、反覆丁重に説明したものの方が前にある様に思ふ。換言すれば、斯る經を豫想して後、楞伽、涅槃等の諸經があり得べしといふのである。未成佛の四菩薩の事は、增一阿含、四十四、及舍利弗問經に説かれたる不泥洹の四大羅漢の轉化であらう。四大羅漢とは、大迦葉、羅睺羅、賓頭盧、君徒般難にして、是等は彌勒佛の出世まで、佛法を護持せんが爲に、佛命によりて、此世に残されたのである。

## 十七、解深密經

*Sandhinirmocana-sūtra*

全本としては二回の譯あり、共に現在する。

初譯、深密解脫經、五卷。元魏北印菩提留支、延昌三年(五一四)於洛陽出、僧辯筆受。

第二譯、解深密經、五卷。唐玄奘、貞觀二十年(六四五)於弘福寺出、大乘光筆受。

部分の譯としては次の三種がある。

一、相續解脫地波羅蜜了義經、一卷。劉宋四三五—四四三、求那跋陀羅、於荊州出。

二、相續解脫如來所作隨順處了義經、一卷。同譯(?)。

三、佛說解脫經、一卷。陳、五五七—五六九、眞諦畧出。

一は玄奘譯の卷四の異譯、二は同じく卷五の異譯、三は同じく卷一、二に跨る初五品の異譯である。翻譯年代が、西曆四三五—六四五の間に亘つて居る事は、此經の流布が、第五世紀の前半よりせる事を示して居る。而もその前に之を傳へたものゝない事は、經の時代を限定せしむる上に於て、有力なる一材料である。之が年代的限定は、延いて無着世親の年代を限定せしむるにつきて、有力なる一法となる。此經は西藏大藏中に於て、一致のものを有するとの事である。

唐譯は五卷、八品となつて居る。法相唯識宗は之れによりて成立し、三國に亘り



て頗る有力なものであつたから、少しく丁寧に解題しやうと思ふ。

(序品一)經の説所は、最勝光曜七寶莊嚴中略天宮殿にして、會座に十菩薩の名見ゆ。(是等の十菩薩は、列名の順序を以て、悉く經中にあらはれて来る。)

(勝義諦相品二)如理請問菩薩、解甚深義密意菩薩に問ふ。一切法無二とは如何。曰く、一切法は有爲、無爲の二種に分たるれど、實は有爲にも非ず、無爲にも非ず。有爲といふは、假りに施設せる言句にして、徧計所集のもののみ、成實にあらず、無爲も然り。されど事なくして、所説あるにあらず。聖者は、聖智聖見を以て、離言法性に於て正等覺し、他をして現等覺せしめんが爲に、名相を假立して、有爲といひ、無爲といふ。之を離言無二の義と爲す。これ甚深にして、愚の所行に非ず。時に法涌菩薩、佛に白す。東方に具大名稱世界あり、廣大名稱如來在ます。我、彼土より來至す。彼に衆多の外道あり、諸法の勝義諦相に於て、種々の意解を爲して、互に爭論し、離散せり。我之を見て、佛、世尊のみ、獨り能く之に通達したまふを知りて、奇特の想を爲せり。佛いふ、然り、勝義諦相は、一切の尋思を超過せるものにして、聖者内自の所證なり、無相の所行なり、言説すべからず、諸の表示を絶し、諸

の諍論を絶す。

時に善清淨慧菩薩、佛に白す、曾て衆多の菩薩あり、勝義諦と諸行との一異につき、問答し、論議紛々たりき。佛宣す、若し異らずといはば、一切のもの、皆既に諦を見、菩提を證すべし。もしまた異らば、諦を見るもの、諸行の相を除遣せざるべし。故に異りといふも、異らずといふも、共に如理に非ず。若し異らずんば、諸行の相の雜染の相に隨するが如く、此勝義相もまた隨すべし。若しまた異らば、一切行の相の共相を勝義諦の相と名くべからず。勝義諦の相や、諸行の相と一相異相を分辨すること難し。若し一異を分別せば、如理の行にあらず、勤めて止觀を修せば、能く解脱を得ん。

佛、善現に告げたまふ、所解を記別する中に於て、増上慢を懷くものと、之を離るゝものとの多少如何。善現白す、之を離るゝものは、誠に少く、之を懷くものは甚だ多し。有所得の現觀によりて、増上慢を懷き、種々相の法を説くものは、勝義諦の徧一切一味相を解了せず。世尊よ、此聖教の中に修行する、苾芻すら、この一味の相に通達せず、況んや諸の外道をや。世尊告げたまふ。是の如し。我已に一切

の蘊處縁起・食・諦・界・念・住・正・斷・神・足・根・力・覺・支・道・支の中に於て、清淨の所縁これ勝義諦なりと顯示せむ。勝義諦は、徧一切一味の相なるを以て、觀行を修するもの、若し一蘊の眞如勝義法無我の性に通達せば、更に各別の餘蘊諸處縁起等の眞如を尋求せざるも、徧一切一味の相に於て、審察し趣證す。もし、彼諸蘊等の異相あるが如く、一切の法性も異相あらば、この眞如は因より生ぜるものなるべく、隨つて有爲なるを以て、勝義にあらざり、即ち更に餘の勝義諦を尋求せざるべからず。この勝義諦や、如來の出世するも、出世せざるも、常恒に徧一切一味の相なり。

(心意識相品三)廣慧菩薩の請問によりて、佛陀告げたまふ、六趣有情の身分は、一切種子心識より生起する所にて、この心識の成熟し、和合し、廣大するは、二執受(有色の諸根及所依の執受、相名分別の言說戲論習氣の執受)による。この識や、身に隨逐し、執持するが故に、阿陀那識と名く。また身に攝受藏隱し、安危の義を同じくするが故に、阿頼耶識と名く。またこの識によりて、色・聲・香・味・觸等、積集し、滋長するが故に、心と名く。此阿陀那識を依止と爲して、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識身轉ず。眼及色を縁として、眼識を生じ、眼識に隨行して、同時同境に、分別意識ありて轉ず。

他の諸識も然り。譬へば、大瀑水の流の、もし一浪の生縁現前することあれば、一浪轉じ、若し多浪の生縁現前すれば、多浪の轉ぜんに、然もこの瀑水は、恒に流れて斷なく盡なきが如し。瀑流に似たる阿陀那識を依止と爲して、一の眼識の生縁現前せば、一の眼識轉じ、五識身の生縁現前せば、五識身轉ず。如來即ち頌を説いて云く。

阿陀那識甚深細 一切種子如瀑流 我於凡愚不開演 恐彼分別執爲我

(一切法相品四)德本菩薩を對手として、佛陀宣ずらく、諸法の相に略して三種あり。一には徧計所執相(假名差別の言說)、二には依他起相(縁生)、三には圓成實相(平等眞如)これなり。この眞如に通達し、修習するによりて、無上菩提を圓滿す。相名相應を縁として、徧計所執相を了知すべく、依他起相の上の徧計所執相を縁として、依他起相を了知すべく、依他起相の上の徧計所執の無執を縁として、圓成實相を了知すべし。若し能く諸法の依他起相の上に於て、如實に徧計所執相を了知すれば、即ち一切雜染相の法を了知す。若し圓成實相を了知すれば、即ち一切清淨相を了知す。

す。若し依他起相の上に於て、如實に無相の法を了知すれば、即ち雜染相の法を斷滅す。若し雜染相の法を斷滅すれば、即ち能く清淨相の法を證得す。

(無自性相品五)勝義生菩薩の請問に對して、佛陀説きたまふ、三種相生勝義の無自性々によりて、一切諸法の皆無自性、無生無滅、本來寂靜、自性涅槃を説く。諸法の偏計所執相は、假名によりて、安立し、自相によりて安立するにあらず、故に相無自性々と名く。諸法の依他起相は、依他の緣力によりてあり、自然有にあらず、故に生無自性々と名く。諸法の圓成實相は、清淨所緣の境界なるが故に、勝義無自性々と名く。これを知らざれば、正道を失ふ。一切の聲聞、獨覺、菩薩、皆この一妙清淨の道を共にし、皆この一究竟清淨を同じくし、更に第二なし。故に説いて、惟有一乗といふ。されど有情の性に差別あり。唯一身を度して、寂滅に趣くものは、一向趣寂の聲聞なり。大悲勇猛にして、衆生を捨てざるものは、廻向菩提の聲聞にして、之を菩薩といふ。

勝義生白す、世尊初め一時に於て、婆羅痾斯に於て、聲聞乘の爲に四諦の法を轉ず。これ有上有容にして、未了義なり。第二時に於て、たゞ大乘を修するものゝ爲に、

一切法、皆無自性、無生無滅、本來寂靜、自性涅槃に依りて、隱密の相を以て、法輪を轉ず。これまた有上有容にして、猶未了義なり。今第三時に於て、普ねく一切乗の爲に、一切法、皆無自性、無生無滅、本來寂靜、自性涅槃、無自性々に依りて、顯了の相を以て、法輪を轉ず。これ無上無容なり。眞の了義なり。

分別瑜伽品六、慈氏菩薩を對手とせる佛説にして、(一)初に大乘の止奢摩他、觀毗婆舍那の依住として、法假安立と不捨菩提願とを提示し、(二)次に止觀所緣の境事に於て、觀所緣の有分別影像、止所緣の無分別影像、俱所緣の事邊、所作成辨を擧げ、(三)次に止觀の同異に及び、獨り空閑に處して、十二部經に於て、思惟し、安住し、身心の輕安を起すを止と爲し、身心の輕安を所依となし、三摩地所行の影像に於て、勝解し、尋思し、伺察するを觀と爲し、(四)次に三摩地所行の影像と此心との同異に及び、彼影像は、唯これ識なるによりて異なし、識の所緣たるものも、畢竟は唯識の所現なりといひ、(五)彼影像と、此心と、異らざれば、如何ぞこの心還つてこの心を見るかとの間に對して、この中、少法として能く少法を見るなし、然るに此心生ずる時、是の如き影像ありて顯現すと答へ、(六)更に進んで止觀及止觀並修を定義して、觀と

は相續作意して、たゞ心相有分別影像を思惟するなり、止とは相續作意して、たゞ無間心(彼影像を緣ずる心)を思惟するなり、止觀を修するとは、正思惟する心一境性(この影像は唯これ識なりと)通達し、或は通達し已りして、また如性を思惟するなり)なりといひ、(七)次に止觀の種類に各々有相尋求伺察の三種あり、また四禪四無色の八種あり、また四無色の四種ありといひ、(八)依法、不依法の止觀によりて、菩薩に隨信行、隨法行を分ち、止觀を修するにつきて、五種の知法、十種の知義ありといひ、知義の第二に七眞如を擧げ、(九)止觀上の作意と除遣とを明して、眞如の相もまた除遣すべきや否やに及び、十七空によりて除遣すべき十相を説きて後、三摩地所行の影像の相を除遣して、雜染縛の相より解脱を得て、彼も亦除遣すべしと結び、(十)止觀の因としては、清淨なる戒及、聞思所成の正見。果としては、善清淨心善清淨慧、また世出世の一切善法を擧げ、次て止觀の作業としては、相縛、蠱重縛の解脱。止觀の障としては、五繫、五蓋を擧げて、止觀の圓滿清淨に及び、(十一)止觀の現在前する時の心散動の五種として、作意外心、內心、相、蠱重を列し、(十二)初菩薩地より如來地に至るまでの止觀に對する障を擧げ、(十三)止觀によりて菩提を

證する順序を詳述し、(十四)かくして得たる菩薩の廣大なる威徳を明し、(十五)無餘依涅槃界中に於て、永滅する二種の受を明す。

(地波羅蜜多品七)觀自在菩薩を對手として説きたまふ所。(一)菩薩の十地に佛地を加へたる十一地が、四種清淨、意樂、戒、定、慧、及、十一分の攝なる事、(二)十地の名義、(三)十一地の所對治たる二十二種の愚癡と十一種の蠱重、(四)諸地を安立する八種の殊勝、(五)菩薩生の殊勝なる四因縁と、四因縁によりて廣大願、妙願、勝願を行ずる所以より、(六)所應學事としての六波羅蜜多に説き及び、この六度を三學及び福德資糧、智慧資糧に配當し、次て、六度を修學すべき五種の相。六に分類せられし理由。六度の助伴として、方便、願力、智の四度を施設する理由。六度の次第の理由。六度の品類に、各々三種ある事。波羅蜜多と名けらるゝ五因縁。六度に相違せるもの。六度の果。一切の波羅蜜多の總別の七種清淨相。五因縁に應ずる五業。菩薩が所得の果を愛樂せずして、波羅蜜多を深信愛樂する五因縁。一切の波羅蜜多に存する四種の最勝威徳。一切の波羅蜜多の因と、果と、義利。菩薩が一切無盡の財寶を具足し、大悲を成就せるに、世間に貧窮の衆生ある理由。般若波羅蜜